

巻頭によせて（『鎮魂・反省そして復興』）	………	学校長	藤井幹雄	3
阪神・淡路大震災により亡くなられた県西ゆかりの方々	………	………	………	4
一 学校・生徒会				

次

1

四 生徒作品

山口地区PTAの取組み	元常任理事	赤羽志津子	55
震災をふりかえって	地区部理事	岡本順子	56
震災をふりかえって	広報部理事	原田美智子	57

修学旅行中の地震	三年	伊藤ひろみ	60
魚を配るおばさん	二年	仁井泰久	61
その時	二年	川谷昇久	61
雪の中の募金活動	三年	宮地亜衣	62
家族	三年	岡野晶子	62
遙かなるあなたへ	一年	上村真利衣	63
地図づくりボランティア	三年	川瀬礼実子	65
第三学年「短歌」			66

五 特別活動

SMA Pには負けへんで!	「夕刊フジ」記事		82
絶望から再起させた甲子園球場開会式の演奏	三年	池邊雅美	83
「震災」と「いきいきハイスクール」	教諭	吉永陽一	84
演劇「MY こんなBLUE空の下では誰だって幸せになれる」	教諭	福田成樹	89

六 資料

旧三年六組学級通信「蛙声」(最終号)			93
震災救援物資について			94
被災状況資料			95
編集後記	教頭	田村高	96

鎮魂・反省そして復興

学校長 藤井幹雄

夜明けはいつも美しく希望に満ちていなければならない。平成七年（一九九五年）一月十七日という日は、私たちにとって夜明けはなかった。

兵庫県南部を襲った阪神・淡路大震災は、一瞬のうちに、私たちから希望の全てを奪い去ってしまった。一番耐えがたかったのは、県下で六千余名の方々が犠牲となられ、本校でも二人の生徒のかけがえのない命が失われたことだ。私はその生徒の訃報を、二年生の修学旅行団とともに行先不安な帰路に就いていたバスの中で知った。沈痛な思いの帰路であった。なぜ西宮でその苦しみを共にできなかったのか。悔やんでもどうにもならない自責の思いが心中を何度も往來した。帰ってから、救出に何人もの生徒の仲間が加わってくれたことを聞いた。目頭が熱くなった。私には心からご冥福を祈ることしかできない。

学校では何人かの先生を核にして、沢山の先生方がまさに不眠不休の協力態勢をとり、修学旅行団では引率の先生方が緊張の連続のなかで、生徒たちを無事西宮まで連れ帰る手立てのために奔走してくださった。不測の事態がどんどん出てくるなかでの応急の判断は大変であったが、それぞれその場で対応に当たってくさった先生方の判断や措置は当意即妙であったと、今感謝の念でいっぱいである。

あれから一年たった今、生徒たちも逆境の中でよく頑張り、かなりよい内容の教育活動ができるようになり、成果もそれなりに上がってきている。うれしいことである。

ただ、責任ある立場としての私には多くの反省がある。危機を予測し、日頃からの備えを計画的にしていなかったことである。そのために先生方や生徒や保護者の皆様に大変なご苦労やご心労をおかけしてしまった。

震災一周年を迎えるに当たり、当初以来、復旧のめどがついてきた今に至るまでの折々の本校の営みや状況について、可能な限り記録にとどめ、反省の資料として座右に置いて、今後の備えに資するのは、偶然にも生かされた私たちの使命であると考える。

この冊子が田村 高教頭の企画立案のもと、多くの先生方や生徒たちの協力で作成できたことに敬意を表し、感謝してその労を多とするところである。

阪神・淡路大震災により亡くなられた県西ゆかりの方々（判明しているの方々・敬称略）

本校旧教員 松尾兼徳先生ご令嬢

松尾麗華

西宮市立商業学校甲種昭和十八年度卒業

安井長太郎

本校普通科昭和四十一年度卒業

島田智子

本校普通科昭和四十七年度卒業

山中浩一

本校普通科昭和六十二年度卒業

秋山聡子

本校普通科昭和六十二年度卒業

斉藤弓子

本校音楽科昭和六十二年度卒業

成富祐子

本校商業科平成二年度卒業

雨宮孝子

本校普通科平成三年度卒業

福田朋子

本校普通科平成五年度卒業

福田修平

本校普通科第三学年在学中

福田斉子

本校普通科第一学年在学中

秋山高広

謹んで、ご冥福をお祈りいたします

『事務室からの報告』

事務長 山根 逸郎

一月十七日（火）

我家、親の家、兄弟の家の様子を電話で確かめた後（この時通話できた）、六時三十分頃交通機関が止まっていたので車で出勤する。

通路が倒壊家屋等のため、不通の所が多く、どこをどう通ったかわからないまま、二時間三十分を要して学校に着いた。（通常は四十分程）

道すがら家屋などの壊れを見ていたので覚悟はしていたが、旧図書館の外壁の壊れをみて本校もかと思った。車を降りてすぐ前日の休みの日ガス工事をしていたので、ガスのことが気になり、瀬戸口さんに各建物の元栓を閉めてもらった後、校舎の外側から見て廻ったところでは、A棟の玄関、生徒昇降口のガラス戸が壊れている程度で、大きな被害はないと思われた。この時、グラウンドは南門が開いており、車が二十台ほど駐車していた。これは外部の人が南門の鍵を壊し、車を入れたと思われる。

次に、校舎内を見て廻る。A棟、D棟、C棟と見たが、A棟、C棟はかなり壊れており、次第に恐ろしさが湧いてきた。ところが、B棟、音楽棟を見ると、全然被害がなく、机もそのまま行儀よく並んでおり、ただ、B棟は屋上の高架水槽が壊れていて水が落ちていたが、一安心した。講堂も古い建物のわりに、窓枠がとび壁がずれる程度で大したことはないように見受けられたが、E棟に入ると一変した。一階の食堂を見て、二階への階段をなんとか上ったが、書道教室を見て足がすくんだ。ロッカーが倒れ備品類が四散しているのは見なれていたが、柱が曲がっているのだ。三階へ上るよりも、下へ降り建物から飛び出し、すぐ戸を施錠した。正直なところ恐ろしかった。その後廻った体育館、同窓会館

には壊れは見受けられなかったが、体育館二階のフロアーは水銀灯がかなり落ちており、ガラスが四散していた。この事が、このすぐ後に起った避難所の場所を定めるのに、体育館一階だけになった大きな要因であった。

一通り見て廻って、事務室でタバコも吸わないのに一服していると、グラウンドにすぐ来てほしいとだれかが呼びに来た。この頃の時間は昼頃であったように思うが、避難させてほしいと蒲団を抱えた家族の人たちが待っていた。お聞きすると、避難所である上が原小学校、甲陵中学校が一杯で入れないので県西へ来た、入れてほしいとの事である。校長不在であったので困ったが、体育館一階を開放する決断をした。

すぐ前の瓦木消防署甲東分署へこのことを連絡して帰ってくると、体育館は避難してきた人たちで満ちていた。その間十分程であつたのに。

そこで説明した事は、本校は避難所ではないので、一、皆様のお世話は出来ないのです、お世話するリーダーを選んではほしい。

二、食物・衣類等救援物資は届かないと思つてほしい。

三、提供する場所は、安全と思われるこの一階だけである。他は危険と思われるので、このことを承知してほしい。

以上のことを説明した。

一斉に電気釜等を使ったためにヒューズがとんだこともあり、魚を焼いて火災報知器が作動し、防火壁が閉まり、慌てたこともあった（避難所のことは他稿にゆずる）。

出勤していた教職員で取りかかったことは、

一、職員と生徒の安全を確認する。

二年生は修学旅行に行っているので、一・三年生の確認で

あるが、電話一本だけ受信できたので、掛かってきた電話の受け答えは「本人・家族の状況、友人の状況、その地域のこ」とであった。また、登校が可能ならば、登校して状況を話してもらおう事にした。電話も夕方から断続的ではあるが発信できるようになり、夜中には二本正常になった。記憶が定かではないが、何日か後には、街中の電柱・掲示板・避難所に県西生に告げるビラを張りに廻ってもらった。内容は、学校への連絡をするようなことであった。

二、校舎等施設設備の点検は事務室ですが、各自の気のついたところがあればすぐ事務室に連絡する。

三、修学旅行団と連絡を密にして、学校の状態を可能な限り伝えること。（昨年修学旅行を経験している三年学年団が大変すばらしい連絡をしていた。）

四、避難所のお世話を可能な限り行なうこと（南雲教諭が主になって行なってもらったので円滑にできた）。

いつのまにか夜になり、事務室・校長室で朝を迎えた宿直者六人、事務室のブラインドを開けて驚いた。グラウンド一面車で埋まっていた。この夜避難された方、六百五十人程。

一月十八日（水）

昨日の続きで動いたけれども、時間の経過がわからない。主として三年学年団が修学旅行団と連絡をとりあった。夜中に現地を出発することになり、夜を徹して連絡をとり合った。避難所も含めてWCの水にプールの水を利用することを提唱したのは上村教諭、大きな問題をクリアした（個人名を出してすみません、あなたはえなかった）。宿直者五人。

※ ついでに、ライフラインのことについて記すると、

一、電気は日中三時間程度停電しただけ。

二、水道は二月三日まで断水。（復旧後五カ所の破れが見つかった）

三、都市ガスは三月三日まで止まった。

一月十九日（木）

朝、修学旅行団無事阪神競馬場に七台、山口中学校へ三台到着。ただ、山口までは「蟻の歩み」、大変な道中のものであった。お土産は「水」と「パン」、さすが県西、連絡を取り合った効果でしよう。この時、家と連絡のとれない生徒のために同窓会館を宿泊所にする準備をしていて、三十人程入ったが（PTAの役員で生徒が不安を抱かないようにと泊まる用意をして学校にお見えになられた方もいた）、結局午後七時頃までに全員保護者と連絡がつき帰っていった。

また、家に被害を受けた職員もわかり出したので、五人分福利厚生課へ教職員住宅の入居申込みをしたが、満室で駄目だったので、この同窓会館を職員の一時避難所にした（五・六人が利用した）。

午後四時頃に学事課からの依頼を受けて設計事務所の人が校舎の被害状況を調査に来た。一時間ほど駆け足で見て廻った。その結果報告が学事課の以降の仕事になったので、それを正すのに大変苦労した。と言うのも、学校もだいたいぶ落着いてきたので、誰もが校舎のチェックをするようになっていた。これから以降、設計事務所の報告と自分たちとの違いを分かち合ってもらおう様にするため、建設業者に調査してもらうことにした。二十一日に体育館を建設した浜田組、二十三日にA棟を建てた松田組にお願いした。結果は別表の通り。この結果を電話で何度も学事課に報告連絡することになる。校長が修学旅行から帰ってきたので、夜中になったが

家に帰る。宿直六人。

一月二十日（金）

校舎の片づけを出来るところからしだす。トイレ用の水運びも大変であるので、仮設トイレ設置を学事課に要求する。これは一月二十六日に二十五台設けてもらう（十五台を旧図書館の前に、十台を屋外便所の前におく）。

今日から避難所への救援物資が入りだす。宿直七人。

一月二十一日（土）

授業再開に向けて、A棟の目に見える所を修理すべく手配をする。これは生徒の恐怖心を取り除くものである。家が壊れるとか傾くとか被害を受けている上に、登校する道中の悲惨な建物風景を見て、着いた学校が不安を抱かせるようでは勉強どころではないと考え、最低の修理をするものである。宿直今日から二人。なお、一月中は二人、二月中は一人の宿直にする。

一月二十二日（日）

今日位から学者・研究者の訪問が目につくようになる。建築・土木・地震等、各分野の人が自分の研究のために訪ねてくる。

一月二十三日（月）

前向きの仕事が出来るようになった。A棟・E棟の替わりとしての仮設校舎建設を学事課に電話で要求する。

今日以降とりたてて記憶に残っていることはない。ただ、一日の過ぎるのが早い。いつも宿直か家に帰る時間は夜中であった。交通機関の関係で自転車で通勤していた。冬の夜道は、ドライバ―にガソリンを入れなければ走れなかった。余談になるが、この頃の食事等について記すると、多数の職員が水・おにぎり・ラー

メン・パン等出勤するとき持ってきてくれた。暖房は皆オーバー・コート等を着ていたが、二台あった石油ストーブが大変重宝した。避難してきた人が持ち込んだ石油ストーブのために灯油がほしいとの要求があり、県立高校の避難所をまとめていた高校教育課との相談の結果、灯油を学校が購入することになった。このことから西宮市内の県立学校の管理室に石油ストーブが必要な数を聞き、尼崎の県立高校から余っている分を借用することにしたら、十台集まり、各校2台借用した。本校だけ独り占めしなかったこの美しさ。足として自転車三台の寄贈を受け、五十CC単車二台を三月中旬まで借用したが、これも大変重宝した。

一月二十八日（土）

先にも記したが、施設・設備の事で電話では来てくれそうもないので、初めて県教育委員会へ行く。道中、電車は一部しか動かず、代替バス・徒歩と乗り継いで行った県庁も、エレベーターが動かず階段を歩いて上がる状態であった。仮設校舎の配置図、設備の経路図を提出するように宿題を受ける。三の宮東門筋を通った時、建物が倒れ大変だなーと思ったが、帰りの灯がない三の宮暗さでそろそろしか歩けない飲み屋街、涙が出てきたのはなぜだろうか。

一月三十日（月）

朝、校務連絡会のメンバーと体育科の教員に集ってもらい、一昨日の話をして、とりあえず配置を決める。この時の案は、A棟・E棟分をグラウンド半分体育館よりにする、おさまりきれなかった場合は、講堂裏のバレーコート、東門と体育館の間の空地に建てることであった。

一月三十一日(火)

この案をもって学事課へ行く。学校の希望などを説明する。この返事として、学事課からファックスが送られてきたのは二月六日であった。これは建築法・消防法等仮設とはいえ法規に合ったものであり、グラント半分に建てるものであった。東西にのびたものでA棟に平行したものである。なおこの時はA棟分だけであった。

二月一日(水)

夕方から校長と学事課へ再度行く。六時頃から八時頃まで待ち、(この時は八時三十分を過ぎると代替バスの関係で帰れなくなる)ぎりぎりのところで技術担当の岸本副課長が帰ってきたので会う。今日から授業を شدしたので、ぜひ一度校舎の状態を見てほしいと要望する。校長が足を運んだのが効果があったのだろう。一週間以内に行くとの返事をもらう。

二月二日(木)

夕方暗くなつてから岸本副課長が来る。開口一番A棟の壊れた箇所ので急修理を咎める言葉が発せられる。当初その意味がわからなかった。なぜなら自分の経験上からは、壊れたものは直ぐなおす。これが我々のノウハウであった。台風等で施設・設備の壊れ、また、昭和四十年半ばから始まった学園紛争時の校舎破壊等全て直ぐ直すことであつたので、今回も設計事務所の人に相談した上であるのに、傷口をふさぐと壊れた状態がわからないからという理由であつた。

なおこの時、使用可能なところは(生徒が入って良いところは)A棟の東半分・B棟・音楽棟・体育館の二階フロアー・同窓会館・部室であつた。

ところで、A棟(管理室関係・HR教室十八教室)の仮設校舎について記すると、

二月十五日 入札(朝早く校長と二人今津港から船に乗って神戸メリケン波止場につき県庁に行った)、業者決定。その前から避難所の関係で南門を開けてグラントも開放していたので、グラント半分以上を占めている車を退けてもらう事から始まっていた。

二月十日 南門に仮設校舎建設のお知らせと車の撤去を呼びかける看板を掲げた。

二月十四日 各々の車のワイパーに東側に移動するよう呼びかけたビラをはさんだ。

二月二十七日 登録制にするので登録を呼びかけたビラをはさんだ。

二月二十八日 卒業式が終わった午後から機材の搬入開始。

三月一日 十二台の登録ですんだので、東門から入り、体育館東側の下に駐車許可をする。工事開始。

地震による建物調（平成7年1月17日）

兵庫県立西宮高等学校

業者 建物	宮本設計	浜田組	松田組	三日月建設
A棟（本館）	職員室駄目、故に2・3 4F9クラス（上階） 使用	職員室△であるが、 2・3・4F9クラス 使用×	左に同じ	
B棟	○	○	○	
C棟（理科棟）	○	入れないほうが良い	入れないほうが良い	
D棟（社会・家庭 商業科棟）	○	3階が×、故に×	入れないほうが良い	
E棟（芸術棟）	×	×	×	
音楽科棟	○	○	○	
体育館	○	○	○	
講堂	良いだろう	—	△	
部室	—	—	○	
同窓会館	○	—	—	
旧図書館	—	—	—	○
調査日	7・1・19 16:00~17:00	7・1・21 夜	7・1・23 11:00~12:00	7・1・23 15:00~

（備考）

宮本設計は、学事課からの派遣

浜田組は、体育館建設業者

松田組は、A棟建設業者

三日月建設は、一番学校を知っている業者。修理をする（今回）。

「震災記 録（生徒部・避難所）」

避難所の始まりと終わりまで

生徒指導との関わりとともに

生徒部長 教諭 南雲 努

一 長い日の始まり 一九九五年一月十七日 五時四十六分

やっと生徒手帳の訂正原稿をうち終えて、プリンターから打ち出されるのを見ながら時計を見る。一時三十分だ。今日から三年生の最後の授業だ。その時間が一時間目にある。今年の生物の時間も「ガン告知の話」で終わるのだなと思いつながら床に入った。

ドーという音を聞いたような気持ちで目が覚めた。体が震えている。地震だなとぼんやり考えている時間があつたようだが、振動は止まない。激しくなるばかりの揺れが上下左右、ものが落ちる音で隣にねている妻に布団をかぶせ上から体を被せた。

めっちゃめちゃになったガラスだらけの室内、天井は落ちてきていない。「おい大丈夫か！」泣き声で返事が聞こえる。「暗いから動くな。揺り返しがくるぞ。」何回かの揺り返しがきた。

外へ出てみると近所の家々は無事である。大丈夫ですかと出てきた近所の方と声を掛け合い無事を喜びあつた。火元に注意をしましょうねと注意をしあつた。少し明るくなってきた。

部屋に入つて倒れている家具を起こした。電気をつけたか、テレビのスイッチを入れたのか、いまでは思い出せない。家族の顔がそろつたのを見て、学校にでかけることにした。

校門に着くまでに壊れている家を見ている筈なのになにも思ひ出せない。気付いていなかったのだろう。

上村先生と出会う。生物教室を見に行く。ひどいものだ。谷垣先生と会い無事を喜び合う。

*避難所開設

事務室で、集まった先生方と事務長を交えて善後策を話してい

た。「避難者への対策は、市立の小中学校が避難所として指定され組織的に対処されるから、県西としては断つたほうがよい。」「断ることができるか」と話しているところへ、上村先生が地元の方を伴つてこられた。「避難所を開設して下さい。」と地元の方々が要請する。「体育館はガラスが落ちてきて危険ですが下の武道場は大丈夫なようです。」今西県会議員も一緒に要請される。学校長は修学旅行中である。教頭もいない。本校は避難所の指定を受けていない。事態はまだ十分に分かっていない。この状態で避難所開設を受けるにも手順を考えておかねければと思うのはなんと情けない気持ちだ。事務長と相談し①今西県会議員からの要請、②他の避難所が一杯であること、③本校に収容場所があることを西宮市に連絡し避難所開設の確認をして貰う。ということを開設に踏み切る。事務長、上村先生とともに武道場を見に行く。ガラスが一杯に剣道場に広がっている。避難しておられる方々で掃除をしてもらうことにする。

西宮市に電話をし、確認をするがはっきりしない。「県西は避難所になっていないはずです」「分かりません」と言う答えが返ってくる。混乱を極めているようだ。総務課に電話が回って、連絡が完了する。

そこで、再び事務長より正式に連絡して貰う。「今西事務所より地元を代表して本校に申し込みがあり、消防署を通じて本部より了解を得る」その結果、本部より「県立西宮高等学校を災害避難所とする」の依頼があつたという流れができた。災害本部の電話番号は三五―三五四七である。

生徒が集まる。

先生方が登校されてくる。生徒も来る。どうしたらよいですか。ここのへんの様子は、総務部長山道先生の記録を参考にして頂いたらよいだろう。私が緊急事態の窓口の役割をすることになった。

県への連絡は事務長と分担する。電話で修学旅行先と連絡を取り、避難所からの要望・苦情、生徒の安否の窓口となった。

戦争時代の緊張感が湧いてくるような妙な気持ちであった。とにかく、「正確な情報を如何に確保していくか。それを如何に的確に伝えるか」が肝心なことである。

情にながれることがあつてはならないと自分に言い聞かせる。先ず、生徒の安否を確認することから始まった。事務室の受け付けに生徒名簿一覧表を置き、本人の報告、安全な様子を確認したものと区別して記録させた。十八日休校の指示、生徒の口コミで安全な生徒の確認をするように指示する。まさに戦場である。揭示して行く紙には在校生秋山君、福田さんの訃報、卒業生斉藤弓子さんの訃報、松尾先生の娘さんの訃報と事務室の壁に掲示して行く。同僚の広岡先生の義母様が死亡と訃報が続いた。学校長と連絡がつかない。

繰り返し電話をするうちに学校長と連絡が付く。こちらの状況を説明し、避難所開設の報告をした後、学校長より①生徒の安否の確認 ②県教委との緊密な連絡の指示がある。スキー実習はこのまま継続し、予定どおり十八日夜に長野を発するとのことである。十八日休校の指示、生徒の口コミで安全な生徒の確認をするように指示する。まさに戦場である。

* 避難所

日が暮れてきた。「先生炊き出しをしたいので釜はないでしょうか。」といわれた。B棟横の崩れた赤煉瓦を体育館の前に一輪車で運び炬を組み、釜は家庭科教室の崩れた棚のなかから見つけて貸し出す。

上村先生と瀬戸口校務員さんはトイレの水を塩素用のポリタンと大型のポリタンに入れて体育館前に運んでいる。避難した方々で一杯になった武道場、廊下、階段。

炊き出しが行われている。それぞれの家や、今西事務所から提供された米が使われている。六百二十名余りの方々が避難しておられるという。

県西の南にある嵯峨ハイツの住人で、宮田さんという若い男性が避難所を仕切っておられる。宮田さんが私と事務長を紹介する。宮田さんは「みなさん、ここは避難所として指定されていないのです。借りているのですから、みなさん協力して下さい。力を合わせて下さい。」

私は何も言うことはない。「頑張ってください」としかいえない。自治組織のリーダーのメンバーは今西事務所の人を含めて3人が活動しているようであった。

どこからも食料も物品もこない。

事務室で電話番号が続ける。外の公衆電話はなかなか繋がらない。また長電話だ。長い列ができている。学校の回線は外と繋がるようになっていているようだ。しかし、外への連絡がうまくできない。避難所に安否を尋ねる電話の内容をメモにして避難所に伝える。あるいは、伝えて貰う。

今日は上村先生と片山先生が泊まってくれと言う。宿直室には関学神学部の斉藤君がいる。宿直員であった。彼を含めて何人が布団をかぶって仮眠をとっている。

もう十八日の二時だ。何も食べていないと気づく。寒い一日が終わり家に戻る。

二 修学旅行団帰宅完了 一月十八・十九日そして二十三日まで

五時四十分 目が覚める。二時間しか眠っていない。しかし、目がさえる。餅を電気オーブンで焼き、食べ、気がせくまま学校に向かう。

事務室で床にじかに眠っている先生方四名、椅子によりかかっ

てまどろんでいる方がいた。いまではどなただったか思い出せない。長靴をはいた磯村先生の長靴が印象に残っている。

* 避難所に行く。外でタバコを吸っておられる方がいる。本部が混乱しているようで食料、医薬、衣類、毛布などがこない。いまのところ近くの方々が自宅から持ち寄っているので大丈夫だといわれる。避難されている方々の大半は上甲東園付近の方々が多い。自治的な活動が続けられている。先生、電気あなか、灯油のストーブ使っではいけないんでしょうかね。病気の方がいるのですがといわれる。

「電気が飛ばない限り仕方がないでしょう。（すでに炊飯器を使っただけブレールが落ちたようであるが）灯油のストーブは余震がありますからいまのところは安全が第一で遠慮願ったほうがよいとおもいます。」と答える。

最初の3日間が第一のやまであると思った。

先生方が、生徒の安否の確認に動き出した。生徒もやってきて被害の状況を伝えている。

安否確認が進み、竹中・石田先生がコンピュータにデータの記入を始める。

避難所は人の出入りがあるが、自治組織が機能しているようだ。避難所との電話連絡は柳田さんが代わってくれた。メモをもって体育館に走る先生がいる。少しでも早く安全を伝えたい気持ちが伝わってくる。

修学旅行団から連絡によればバスの手配ができたようである。テレビに生々しい災害の風景を次々に映し出す。旅行団の生徒はこの映像を見て心配しているだろうとテレビを見ていた先生達は話し合っていた。

生徒の登校についてはどうするか二論があった。このようなきはとにかく生徒は学校へこれるものは来て安全の様子を報告す

ることだ。いや、安全が第一だ。ではどのように生徒の安否を確認するのか。分かることしか分からないのだからもう少し状況を見よう。

修学旅行先に電話をして、現状を伝える。二十一時に現地を発するとの連絡がついた。いつ、どこに到着するか。全く分からない。外回りをしていた先生からの情報から、仁川の競馬場付近でないと下車は無理だと伝える。その状況をどのように二年の保護者に伝えるか。被害の分からない生徒が宿泊するのはどうするか。安全に家まで行けるか。安全に家に到着してもそれをどう確認するか。旅行団の職員も学校にいる職員も電話では確認できないことが多かった。

二十時ごろ、子どもから八時に着くと連絡があったがまだ来ないどうなっているのか。と保護者が訪ねてくる。出発と到着が混同されているようだ。

学校長、石塚先生と旅行団の行動の連絡がとれた。ホッとして体育館に行く。食品が届いている様子がいい。本部に連絡する。どうも連絡が取れない。本校が避難所であることが確認できているのだろうか。不安がよぎる。電話での語気がついあらくなる。

いま避難所で必要なものは、赤ん坊のおむつだ。水は昨日、今西事務所が手配している。事務所前の水道管が破れているところから取水しているという。まずは安心である。

一月十九日 三時夜が更けた。家に帰り仮眠する。家族みな一つのこたつに靴をはいたままで寝ている。

五時目が覚めて、学校に行く。

避難所では、眠れずに外でタバコを吸っている人が二、三人いる。最初より避難してきた人数が減っている。だが四百人はいるだろうという。

「とにかく、いまはみんなで助け合っていますので、先生は生徒のことに専念して下さい。」とリーダーの宮田さんはいう。若いのにしっかりしている。感心するばかりである。

事務室の電話が鳴る。メモを取る。伝える。その繰り返しだ。旅行団からの声、川上先生だ。「どこにいるの。」携帯電話が威力を発揮している。当時の記録を見ると、七時五分豊中市の桜の町、七時二十分刀根山阪大付近である。そこで渋滞。八時四十分、七台のバスが仁川に着く。塩瀬方面に二台、山口方面には一台と分かれていったということだ。電話で塩瀬・山口中学に駐車場を依頼する。快く了解いただく。塩瀬・山口地区の被害は少ないようだ。学校には九時三十分ごろから旅行団の生徒が戻ってきた。十時すぎ山口方面の保護者より「まだ着かないどうなっているのか。」と心配の電話がくる。十一時三十分バスは山口に到着した。同乗している先生方を迎えにいった先生が戻れたのは何時だったろうか。

*避難所

避難所からの物品、医療について本部に連絡してくれと依頼がくる。

人数報告は三五―三八四九、諸連絡は三五―三八三三、健康管理課は三五―三三〇七とメモには記載してあるが、どのような連絡を取ったか思い出せない。学校長を囲んで事態の再確認と県からの調査への回答づくりが始まる。

「学校が登校となると避難所が閉鎖になる」との噂がでる。本校に移動の希望者が出てきているという。すぐ、災害本部に問い合わせる。噂であることを確認する。今後、甲陵中学、上ヶ原小学校とも連絡を取る。「今後、避難者の縮小にあわせて避難所は閉鎖する。」なんとも楽観的であったかと当時を思い出して苦笑してしまう。

一月二十日 朝四時帰宅。

一月二十日 朝九時登校。

一月二十日の朝日新聞に安否確認のために登校の呼びかけが載せ

られた。市立西宮高校、県立西宮今津高校の呼びかけが掲載されていた。

本校は生徒の登校は、二十三日とするように話しがまとまり、総務は一月二十日テレホンサービスに登校案内が吹き込んだ。教務は授業計画、管理・事務は校舎状況の確認と立入禁止地区の確認、進路は受験対応、生徒部は対生徒対策と活動が分担され作業が進行する。生徒の状況調査表と生徒の皆さんへの文書を作る。その要点は下記の通りである。

①状況を正確につかむこと。②不確実な噂に惑わされないこと。

本日の作業

①生徒状況カードの記入 ②連絡の受け方、出し方を確実に行う。
③登校できなかった生徒に調査票を渡し、状況を聞くこと。安否を確認する。

④テレホンサービスを利用すること。サンテレビからの情報新聞の登校呼びかけに 注意する。

⑤PTAの協力がある。⑥近所の県西生に情報を直接伝える。

⑦長電話はしない。

⑧危険箇所への立ち入り禁止。⑨進路については学校は対応している。

⑩学割など証明書は余裕を持って対応すること。

*避難所へ*****

十九時ごろやっと準備が終わり、職員が減って、電話連絡をする。

人も少なくなかった。避難所の年輩の女性が「電話の連絡はだれがいつ受け付けたのか。はつきりしなければ困る。そんなこと常識でしょう。」と厳しい顔で学校の対応の悪さを詰問している。それに答え、現在の事態を伝えて了解して貰う。電話のメモを転記

トレーニングルームも武道場も布団に入つた人が一杯である。依頼した名簿づくりはうまく行かない。おおよその人数を知りたい。本部への連絡が必要である。二十時四十分現在二百三十八名+αである。本部には二百五十名と報告する。

*二十時、校長と共に避難所に入る。

学校長をリーダーの宮田さんより紹介して貰う。

学校長から修学旅行団の帰校までの様子が丁寧の説明された。大阪から西宮までの道路事情や生徒の現状が分かりやすく、疲れた避難の方々も好感を持って聞いてくれた。次に、私が避難所の窓口となることを告げ、次のように話す。

ご苦労様です。お疲れのことと存じますが、これから落着くまでが大変なのですが、

当面は私どももできるだけのことをいたします。しかし、ここは最初から公式の避難所組織に入っていないので不十分なことばかりです。生徒の方にも手が回らない状態なのでお手伝いもできずにおりますが、ここは自主的な自治活動で避難所が運営されていることを大切にしていただけたらありがたいことです。①西宮市への連絡と人数の把握と確認が必要です。②伝言が来たときのための名簿があればよいのですが。③二十三日に生徒の安否確認のため生徒が登校します。とお願いと予定を話す。

避難所の人数の変動は下記の通りであつた。

一月十七日	620名	二月十三日	70名
十八日	500名	二十日	70名
十九日	400名	二十一日	60名
一月二十日	250名	二十二日	50名
二十一日	250名	三月一日	50名
二十二日	250名	二日	47名
二十三日	200名	四日	47名
二十四日	180名	五日	42名
二十五日	180名	六日	42名
二十六日	180名	七日	32名
二十七日	150名	八日	28名
二十八日	60名	九日	23名
二十九日	?	十二日	23名
三十日	120名	十三日	15名
三十一日	120名	十九日	15名
二月一日	120名	二十日	10名
二日	100名	二十七日	10名
十二日	100名		

三 一月二十三日、体育館に生徒が集まった。

体育館は水銀灯のガラスが取り除かれたがまだガラスがあるだらう。

生徒は五百十三名が集まった。テレビ局がカメラを回す。集合の注意を始めても、生徒は久しぶりで出会った安堵感と興奮から私語が止まない。マイクはない。「静かにしなさい！このような事態では、まず聞くことです。いつ余震がくるか分からないのだ！」怒声となる。テレビ局のカメラは非情なものである。震災の犠牲

となつた福田さん・秋山君の鎮魂もかねて静かに聞いて欲しい。犠牲を増やすことがあつてはならないのだ。「下には、避難してきておられる方がおられる。また、在校生もいる。静かにせい！」

一時間ののち解散。安否確認ができ直ちに帰宅させる。

ある生徒が質問してきた。「先生、部活どうなるのですか」

「気持ちには分かるが、今は自主練習だな。でも、自分でできるボランティアでもしたらどうですか。」そうだ、今日集まった生徒に「できることをしなさい」といったらどうか。今も記憶にはない。三月の春休みの注意の文書までは、全体の生徒にボランティアの呼びかけはしなかったと思う。

*避難所

避難所に行き、体育館の二階からの音の響きを聞く。避難所の方がたは皆遠慮されて大丈夫ですと答えておられる。昼間は職場に出ている人が多くなつた。昼間、避難されている人は四十名ぐらいで老人と子どもが多い。

ボランティアが関学から派遣されてきた。三名ずつ三交代である。食料の分配は避難所の人たちがやっている。何をしたいのか分からずにいる学生もいた。そういうとき、私は避難所のリーダーに必ず自己紹介をするように薦め、また仲介する。そして、3人のうちだれが代表かを聞くのである。入り口の椅子に座っているだけの学生と話しているときは、まず、見てごらん、見つめてごらん。そうすれば自分がすることがわかりますよと話しかける。東京の青山学院や、愛知からの女学生、関学のいろいろな学部の学生と関学ではボランティア組織が動き出している。このボランティア組織とは別に神学部を中心にボランティアがある。本校の宿直員である斉藤君は神学部の四年生で震災当日の宿直だった。彼は震災で呆然としていたのはつかの間だけ、毎日ボランティアのリーダーとして活躍している。夜は電話番号をして避難所の

連絡をしてくれていた。どんなに力強い助けになったことが改めて思い出してしまふ。

一月二十日健康管理課に医療についての連絡をとる。風邪の場合は、大きな病院を紹介する。万一の時は救急車の要請をして欲しいとのことだ。

兵庫医大第一外科古川先生が来校。医療のボランティア活動が始まったのである。医師が常駐するという。ありがたい。更衣室を診療室にする。医薬を置くので鍵を掛けれる部屋を用意した。

一月二十三日十五時三十分 消防署の中倉さんに避難所の名簿を渡す。

避難されているIさんが肋骨が折れているので兵庫医大に行くことになる。二月三日入院された。

十五時五十分災害本部に本校に本部から避難所対応の職員またはボランティアの派遣の依頼を要請した。最初に出たA氏は名乗らず明確な回答もしない。「1週間近くたつたのだから、どうにかならないか。市立校で避難所にはなっていないところもある。あなた失礼ですな、私が名乗っているのに、あなたは誰ですか。責任ある回答ができないのなら本部に回しなさい。」と電話を代わってもらふ。部長Nさんに「事情を話し」善処を求めた。県と市の連携がまだできていないようだ。ところが二十四日になると市立西宮東高校と市立西宮高校の事務長が交代でくることになっていた。市立西宮高校は被害が甚大である上に須磨から来ておられるのだ。お二人には気の毒と思つた。しかし、これで市との連絡はスムーズに進み、食料・医薬品など避難所の対応が軌道に乗った。

この日以後まもなく、N・T・Tが電話を五台設置した。NHKはテレビを設置した。二月にはいると洗濯機が届けられた。

四 生徒が運動を始めた。

二月一日より授業が開始された。生徒と避難をしておられる方

々の関係で一番気を使ったのは、被災した人と災害の少なかつた生徒との気持ちのずれであった。それと体育館の体育の運動での騒音であった。二月十五日からは六時間授業が行われた。部活動のできない生徒の欲求不満がつのっている。避難者の気持ちが分かつてそれ以上に部活ができないストレスが溜まっている。二月十七日部活は十六時までを限度に再開を承認した。しかし、体育館を利用する部はまだ許可できない。

部活動が再開され、生徒の顔がいきいきしてきた二月二十七日卒業式予行、二十八日卒業式。避難所の人数は四十名を切っている。昼間は十名程度の人だけである。もう体育館での部活の再開をさせてくれと繰り返し要望が出る。毎夜二十時過ぎに避難している方と話しを続けた。病人がいることも分かり、それぞれの事情も分かり出す。体調の悪い方は、昼間体育の授業中は外に出ていることもあるのだということも分かる。学校が正常に機能するのは当然と了解しておられはする。しかし、それぞれに事情があるだけに部活での騒音はもうすこし待って貰うことにする。三月にはいつて体育館の部活も再開された。学校の事情を話し、再開前には学校長と共に避難されている家族が全部そろそろ二十時過ぎに挨拶に行く。みなさんは快く「生徒さんは元気な活動をして下さい」と返事をいただき感謝する。

「地震収束の宣言がなされていない。」ので部活動活動時間は制限されたままだ。形式的だと言われたが、時間を守らなかった部は活動停止になった。

五 ボランティアをする人々

生徒のなかには、トイレの清掃や子どもと遊んでやるなどこころ遣いをする生徒もいた。しかし、避難している人の辛さが分からない生徒もいたのである。

他の避難所でボランティア活動をしている生徒もいた。音楽で

慰問活動をした生徒もいた。先生何かすることはありませんかと言う生徒もいた。「学校として何ができるかを考えたのか」と自問してみると何も思い出せない。これからの我々の大きな課題だと思う。

一月の終わりには、避難所の人数が百二十名を切った。避難所は第二の段階に入った。県西へボランティアにくる関学のボランティア集団はもう何回も繰り返し返ってくる学生がいる。要領が分かっているからスムーズに給食やトイレの掃除、電話、伝言、市への連絡が進められていた。県内のあちこちから巡回ボランティアがくるようになり物資も一応そろうようになった。

自治的な活動はリーダーのなり手がないと成立しない。私は、次々に代わるリーダーのつなぎを取り持ちながら、避難所の人々の集団が次々と新しい段階に変わって行くのを見た。一番長くりリーダーをされた西さんは温厚な人柄で皆をまとめておられた。そのリーダーのときでも、最初は献身的なボランティアで評判のよかったAさんが、皆のためによかれと雑炊をつくり、食料の配分をやった。しかし、女性陣のペースを崩すということになりお引きとり願うことになった。どちらの話しをも聞かせていただいた。これからは考え方の違う人の対立がでてくると予感した。

炊き出しをする各地のボランティア団体が訪れてきた。部活をしていた部員もお相伴に預かった。特に二月十九日にやってきた淀ライオンズクラブの活動は組織的で手慣れていて感激した。トラックに積んだ、給水器、燃料、食器、餅つき道具、新鮮野菜と用意万端が整っている。手分けしてつくるブタ汁、餅、それを分ける人々。それぞれが自分の得意な分野で活動しているのが良く分かった。リーダーの指揮のもとでやがて楽しいものであった。このライオンズクラブから連絡のあったときは、避難所は百五十名を数えていた。当日は避難しておられる方々は、転居先を探したり、日曜日やと家族団欒ができると大阪に出かけたりして少なかつた。

二月二十四日、私は関学のボランティアセンターを尋ねた。事態の全体的な情報を得ただけではなく、関学のボランティアの活動の多様さと強さを見た。さらに、付近の公的な集会所を見て回って気づいたことをメモした。すでに、空っぽになったところもある。そうでないところもあると感じた。

六 夜話をして

授業も軌道に乗り、学期末試験も近づいてきた。入学試験も近い。一度家に戻って食事をしてから、再び学校に来る。避難所の石油ストーブを前に座っている方々とよま話をした。テレビの話し、家族のこと、学校の様子、町へ出たときのこと、なかなか風呂に入れないこと、どこの風呂がよいなどである。体調の悪いお年寄りが一時大変だったなどふともれてくるのは避難者の切なさである。荷物を預けた先との関係、夜だけくる避難者の話。学校の授業も大切だろうが、自分の家が立て直すまでは動けないなどそれぞれの事情が話される。私には聞くだけのことしかできない。

七 避難所の解消と訪問

三月二十一日 二十一時、学校長と避難所の方々と話しをすることになった。約束の時間になっても一所帯が来ない。二十二時やっとそろったので、学校の状態を話し、できれば新学期は授業が正常化できないかを打診する。結論はださないし、出せない。学校の状態を学校長が説明し、なにかできることがあればと希望を聞いた。現状維持を希望する方もいたが、少しは目途のある方もいた。六月にならなければ分からない人もいた。

西宮市は避難所の統廃合を打ち出した。市の担当がやってきて、現在の避難している方の人数、地域を考えて、市の職員が常駐し

ていて、暖房があり、厨房もある上ヶ原市民館を提示した。本校の避難所の方々は、その案を入れて武道場は新学期には学校にお返ししようという結論をだした。三月二十六日きれいに掃除されて、本校の避難所は終わった。

三月二十九日、上ヶ原市民館を訪問する。リーダーを長い間されたBさん家族がおられた。二十六日まで本校におられた方々はほかのところへ行かれたようだ。病人を抱えたBさんにこれまでのご苦労を聞き、本校で活躍されたことを感謝して帰校した。

八 最後に

この大震災も風化するときがくるのだろうか。再び災害が起きたそのとき、日本の社会が語り伝える力を生かして欲しいものだ。他者を我がこととできる力も衰えさせないような社会であって欲しい。そして、もっと災害には強い仕組みができることを祈りたい。メモや記憶を羅列したばかりで、思い違いがあるかもしれない。田村教頭の精力的な収集に感謝して筆を置きたい。

谷垣 幸雄 教諭

各所に亀裂を生じ凹凸が激しい道を、振動で家屋が倒れてきそうな危険を感じながら車を走らせ、七時半頃学校に着いた。途中、段上町一帯では相当な数の全半壊の家屋を見たが、上ヶ原の高級住宅街に至ると意外に被害は少ない。校門を入ると学校の建物も庭も植木も、何事もなくいつもと変わらぬ姿に見えた。

朝の早い木野邑・上村両先生はすでに出勤されていた。木野邑先生は、川西の自宅から学校への出勤途上の車中で地震に遭遇されたという。上村先生はJR芦屋駅で下車後、ランニングで学校に向かう途中激しい閃光と振動に反射的に道路に身を伏せられたという。

早速校内を巡回する。職員室は足の踏み場もないというより倒れたロッカーや散乱した書類や書籍を否応なく踏みつけ跨げねば歩けない惨憺たる状態、A棟の二階以上は被害軽微、何とか授業は出来ると思えた。商業棟の階段や柱・壁などの亀裂や崩れは著しい。パソコンやタイプライターは、ほとんど全部机上から床に転落し、まともな状態のものは見当たらない。四階の窓から市街を見渡すと、数か所から煙が立ち上るのが見えた。

理科棟に行くと、生物準備室や化学準備室のコンクリート壁が大きく崩れ落ち、穴が開き室内が覗ける。薬品の匂いが漂う。階段の踊り場が揺れる感じがする。身の危険を感じ理科棟を脱出した。

築後年数の最も長いB棟は、意外にも被害極めて軽少。平常日当たりや風通しが悪いと職員生徒に疎んじられ、一時改築の話もあったB棟が無事なのは皮肉にも思えたが、この校舎のお陰で後日逸早く授業が再開出来たのは有り難いことであった。

学校のシンボルの存在で、卒業生たちの心の拠り所となっている講堂の天井やモルタル壁の傷みはひどい。何とか壊さずに残して

欲しいと願う。

音楽棟の校舎内へは施錠のため入れない。外観は被害はほとんど見当たらない模様。後日聞いた話では、全国に十台とない一千万円もする何とかというピアノの脚が折れて、修理に多額の費用を要したらしい。

芸術棟に入る。被害甚大である。二階から三階と昇って行くが足下が危ない。余震で階段や踊り場が崩れ落ちる危険を感じ逃げ出した。

事務室に戻ると、磯村先生が出勤されていた。先生は自宅マンションの一人用の個室で地震に遭われ、ウンガツキたかと思われたそうだ。さすが国語の先生だ。恐怖の最中に面白いことを言うものだ。

九時半頃だったか、三年九組の竹中寛が息を切らしてやって来た。顔は青ざめ、ただならぬ様子である。「先生、甲山が崩れました」と言う。振り返って見れば、甲山は何時もと変わらぬ。「仁川が埋まってしまいました」と要領の得ぬことを言っている。落ち着かせて話させると、甲山の東山麓の仁川百合野町から仁川にかけての崖崩れで、多くの民家が押し潰された。かなり多くの人土砂の中に埋まっているらしいことを伝えに来たのだ。彼は朝から近所の人達に協力してと救助作業をやっていたと言う。すぐに戻って作業をやらなければならないと言うので、「頑張ってくれよ。怪我の無いように」と励まして帰らせた。その時彼もひどく慌てていたし、私も彼の話を十分に聞く余裕が無かった。

暫くして三年六組の和泉幸太郎と国本拓平がやって来た。竹中の言っていた崖崩れで三年四組の福田斉子の家が土中に埋まり、家族全員生き埋めになっていることを話した。

竹中は福田斉子のお家の事は言わなかったが、彼の慌てようがその時になって理解出来た。磯村先生の車で現場に急行。堆積した

土砂の急斜面を駆け上った。地上4、5mの高さにあるはずの電柱の街灯が、私の肩の高さにあった。土砂の堆積層は末端部でその位の高さになっていたのだ。それはまさに丘であった。丘の頂上に立つと妙に展望が利いた。数百mにわたる一帯が、民家はもとより木も草も無い地面が広がっていた。福田の家はどこかと思渡し、今自分の立っている数mの丘の地中だと気付き、慌てて駆け降りた。

そこは早朝から近所の人達の手作業で可能な限りの土砂や瓦礫などが取り除かれ、作業は限界に来ていた。消防隊員や自衛隊員、警察官の姿は一人も無かった。重機はおろか道具らしきものもほとんどない手作業では為す術もなく、無理をすれば二次災害のあるところまで来ていた。磯村先生も私もただ呆然とするほか為すすべも無かった。救援隊の到着を待って、無事救出される事を祈るしか無かった。

翌日、自衛隊員によって福田斉子一家五人が遺体となって発掘された。あの時何もすることが出来なかった、何かしてやれることがなかったのかと今なお心残りでならない。その後、磯村先生とあの時のことを話すのをお互いに避けているが、一度だけ私と同じ思いを漏らされたことがあった。その日、要請により遺体確認に行かれた担任の衣川先生と同行の片山先生も、彼女の様子を詳しくは語ろうとはしなかった。

十八日夕刻、どんな姿でもいいもう一度福田に逢いたいと思い、越前・衣川先生とともに市民体育館の遺体安置所に赴いた。安置所になっている武道場の前に止めてある三台の名古屋ナンバーのワゴン車を見た。安置所には彼女の姿は無かった。衣川先生が親戚の方を見つけ尋ねると、今運び出されたばかりだと言われ、あの名古屋ナンバーかも知れないと急いだ。福田斉子と書かれた車を見つけた。間に合った。手を合わせた私たちの前をすぐに車は出発した。福田斉子は私たちの来るのを待ち侘びていたのだと思えた。両先生も同じ思いだった。

十七日にもどそう。午後は校区を巡回することにした。山口・塩瀬地区は生徒や保護者からの電話によって被害が少ないことはすでに情報を得ていた。電話は一回線のみ朝から開通していた。阪急の甲東園駅周辺から段上地区を地図と照合しながら、被害の激しい地域を地図に印していたが、いつの間にかその作業をするのを忘れてしまっていた。

甲東園駅周辺の被害は激しい。特に駅東側一帯は倒壊したマンションや商店・民家で道路が塞がれ、思いど通りに歩ける状況でない。何度か迂回したり、後戻りしを繰り返しながら歩いた。途中、毛布に包まって道端に座り込んでいる何人かの老人に出会った。「大丈夫ですか」と声をかけても返事をする気力もないらしい。「頑張って下さいよ」と言って通り過ぎるしかない。

段上地区の大きな旧家はほとんど全て柱や壁がひしゃげて落ち、屋根が地面を覆う格好になっていた。石塚先生の自宅も立ち寄った。家が道路側に少し傾きかけている。玄関のドアは外されていてベニヤ板で塞がれている。声をかけたが人の気配がしない。近所で訪ねようとしたが周辺の家も留守の様子。避難所に行かれたのだろうと考え立ち去った。

生徒や卒業生に逢う度に家の様子や安否を尋ねて廻った。一人で歩いていると、変わり果てた町の姿に頭が変になってきた。これは現実ではないのだ、悪い夢を見ているのだと思えてならなかった。

四時頃学校に戻った。学校周辺は意外に早く電気が復旧した。テレビは神戸や阪神間の地震の被害状況を伝えていた。

二年生は一月十五日から十九日の日程で修学旅行に出かけていた。宿泊している竜王プリンスホテルは、各室にテレビがあるはずだ。四十四回生の修学旅行で同ホテルに宿泊した際、イラクのクウェート侵攻に始まる湾岸戦争のテレビ放送報道が話題になったことを思い出す。

先生方や生徒たちもテレビで地震の被害状況を知り、自宅のこ
とや家族ことを心配していることだろう。パニック状態になって
はいないかと案じられる。旅行を中断して帰ってくるのだろうか。
復路も帝産バスの予定になっているが、会社は神戸にあるはず。
会社や車両や乗務員宅にも被害があつて、迎えに行けないかも知
れない。名神自動車道も京都以西は不通、阪神高速道も各所で壊
滅とテレビは報じている。東急観光の添乗員が何とか手配をする
だろうが、神戸にある同社のビルも倒壊したと伝えている。長野
のバスをチャーターする手はある。しかし、不案内のバスが寸断
した道路と大渋滞の中を切り抜けて来れるだろうか。引率されて
いる先生方の自宅も住所から考えて、どのお宅も倒壊の可能性の
ある所ばかりだ。家族のことも気がかりだろう。留守宅の家族も
心細いだろう。私が学校であれこれ心配してもどうにもならない
ことは分かっているのだが・・・。

出発前に神崎教頭に「旅行団に必要なことがあれば私に言つて
下さいよ。三年の担任の先生方は行動力はあるし、竜王スキー場
への道ならどんな道でも走れるイキのよいのばかり居りますから」
と冗談半分に言っていたことが、こんな形で現実になるうとは。
その神崎教頭のご自宅も倒壊し、母上が怪我をされたとの連絡
が入っていた。

朝から一回線だけで通じていた電話が、夜までには三回線とも
開通したが、回線が塞がって思うようにはかからない。本校は災
害時の避難所には指定されてはいなかったが、周辺の小中学校の
避難所が満杯になったとのことで、本校も武道場を避難所として開
放することになった。すでに被災者の人達が集まっていた。夜に
入ると安否を気遣う電話が頻繁にかかってくる。ほとんどがあち
こちの避難所に消息を尋ねる問い合わせだった。最初は放送で呼
び出しをしたり、小黒板に名前を書いて被災者の間をまわったり
したが、深夜に入るとそれも出来ない。被災者の名簿もない。先

方にすればやっと通じた電話であろうが、用件を紙に書いて張り
出しますので、居られたらこちらから連絡してもらいますと言
うことにした。秋田県など遠方からの問い合わせもあったし、一
つの回線を長くふさいで置くわけにも行かない。冷淡なようで気が
咎めたが、やむを得ない措置であつた。

そんな間隙を縫って修学旅行団の石塚・川上・田中諸先生と何
度か交信が出来た。公衆電話には延々長蛇の列が並ぶなかで、学
校の電話を三回線とも優先復旧して貰えたのは本当に有り難いこ
とだった。

旅行中の生徒たちは、案外冷静であるらしい。動揺するはずの
生徒たちを落ち着かせている先生方の努力のほどが偲ばれる。田
中先生・水井先生の家の様子が分からないかと尋ねられ、当たっ
てみましょうと言ったが困った。どこに電話しようにもこちら
だって、どこの家にも電話は通じない。テレビだけが情報源なの
だ。事務室で徹夜を決めこんでいる上村・片山・磯村先生たち
にも相談したが、多分あの辺りはだめでしょうと言う。私もそう
思ったが、多分だめでしょうでは返事にもならないし、心配を増
幅させてもいけないと考へて、お宅のことはよく分かりませんと
曖昧なことを言っておいた。石塚先生からご自宅の様子を尋ね
られた時も、詳しくは言わなかった。

何時頃であつたか忘れたが、夜遅く修学旅行先から電話がはい
る。明十八日予定通り一日スキー実習を行い、夕食後現地を出発
するという。迎えのバスの手配もできたらしい。夜行バスを走ら
せ十九日の午前中には西宮に帰ってくることになる。名神自動車
道も近くまで開通するかも知れない。道路状況も少しは明らかに
なるだろう。

テレビは、長田区の火災現場や各地の被害状況・時間ともに数
を増す犠牲者の名前を一晚中伝えている。時々、地鳴りを伴いな
がら余震がやって来る。椅子を並べて横になったり、保健室の毛

布に包まったりしながら、四人とも眠らないまま朝を迎えた。正確に言うとは眠さを感じないまま朝を迎えた。

時計が五時四十七分を指した。長い二十四時間だった。一昼夜で何年分の体験をしたのだろう。夜明けを待って六時頃、十九日朝帰ってくる修学旅行団のバスコースの下見に出かける。

甲東園から学校への坂道は、途中三十秒位の段差ができて、学校への帰着はできない。宝塚ICで下りることも考えて、中津浜線を宝塚へ、仁川から競馬場を下りる坂道の半分が大きく陥没しているが、通れなくはない。宝塚大橋が壊れたらしいとの噂もあったが異常はない。小浜の交差点を右折して、尼宝線を南下、大渋滞である。特に、北へ向かうトラックが列をなしている。中国自動車道の代替コースになっているためだ。

昆陽の交差点を左折、一七一号線を東に向かう。門戸の跨線橋が全壊したため、車の数は少ない。修学旅行団のバスは、このルートを帰ってくる可能性が最も大きい。伊丹市役所付近まで走ったが、異常はない。Uターンして甲武橋へ。東詰め凹凸がかなり大きいが走れる。車の数は極めて少ない。下大市交差点から中津浜線を北へ向かう。

八時半、南行きはすでに渋滞が始まっている。北行きは空いている。昨日四時頃は北行きが大渋滞だった。何とか午前中に西宮に着かなければ渋滞に巻き込まれる。

誘導するコースは決まった。

宝塚IC利用可能なら、宝塚大橋く中津浜線く競馬場西側の路上で降車。

一七一号線利用なら、甲武橋く中津浜線く仁川学院付近で降車。

中津浜線渋滞の時は、甲武橋西詰め右折く武庫川右岸道路く競馬場正門前路上で降車。

学校に戻り、竜王プリンスホテルに電話。学年主任の石塚先生に昨夜の予定変更を再確認。迎えのバスが着くのを待って、夜の

十時には出発できるとのこと。こちらの道路状況を伝え、上のコースを説明しておいた。仁川学院のグラウンドを降車場に借りれないかとの話もあったが、同校も避難所になっており、被災者の駐車場になっていて無理だった。

社会科準備室の片付けをやり始めたが、散乱たるや尋常でない。どこから手をつけたものやら、気長に一つずつやるしかない。夕方までかかってようやくいくらか歩けるだけの通路が開けた。

午後7時頃、修学旅行団の川上先生よりの電話で、迎えのバスが到着したので八時には出発できそうだと連絡があったと磯村先生から聞く。神戸のバス会社が、よくもこんな時間に竜王スキー場に着けたのもだとその時思ったが、東急観光の手配で名古屋と奈良のバスの迎えだったことを後で聞いた。

八時前再びホテルから電話、これから出発するという。竜王スキー場から中野市街までの下り道は、この時間には完全に凍結しているはずだ。先生方も生徒たちも帰路につくとなると、家のことと家族のこと町のことなどさまざまな不安が増長しているだろう。引率の先生方の緊張感はいかばかりかと思う。

事務室には、昨日と同じ上村・片山・磯村先生と私。被災者に関する問い合わせは、昨夜にも増して頻繁にかかって来る。深夜、仙台から家用車でたどり着いたと言う人が来られた。親戚のものがこの付近に住んでいるのだが、消息が掴めない。テレビで知った中央体育館を訪ねたら、この学校を教えてくれたのでやって来たとのこと。武道場の避難所に案内するが、該当者は見つからない。甲陵中学校に電話で問い合わせる。すでに被災者名簿が、出来ていたらしく該当する人は見当たらないとの返事。ならば関西学院か。宿直代行員の関学生に案内してもらうことにした。

テレビは、震災でなくなった方の名前を絶え間なく伝え、「XX XXにお住まいの〇〇さん、△△さんが探しておられます」の放

送をやっている。戦後間もない頃のラジオ番組「尋ね人の時間」を思い出した。不思議とこの夜も眠気を催さない。

途中のサーブエリアから、順調に走っていると二度連絡が入り、三時半頃大津サーブエリアに着いたとの電話を受けた。ここで一時間ほど休憩し、その間に塩瀬地区と山口地区の生徒を特定の車両に乗り換えさせて、各地区に直接送り届ける。塩瀬には伊藤先生が、山口には川上先生が同乗して行くので、迎えに来てほしいとの依頼を受ける。

山口へは磯村先生にお願いし、塩瀬へは越前先生に行っていた。大きくように池田の自宅に電話で依頼。私は本隊を迎える手筈を決める。

四時四十五分大津SAを出発したと電話を受け、その後五時二十五分国道一号線京都南IC近く、六時五十分一七一号線高槻、六時五十分三島丘と相次いで携帯電話からの連絡が入る。携帯電話の便利性を初めて知った。ここまでは驚くほど順調、夜明け前とは言え相当なスピードで走っているのが分かる。六時四十分新御堂交差点で渋滞にかかり、動かなくなったと連絡。いよいよ正念場だ。再び越前先生宅に電話し、帰着が予定よりも早くなるから一七六号線の交通混雑も考えて、一旦学校に行くつもりだと言うのを、塩瀬に直行していただくようにした。（後で分かったことだが、これは私の大失敗だった。船坂トンネルを使った磯村先生は余裕を持って川上先生を迎えられたが、越前先生は伊藤先生を塩瀬中学校で三時間も待たせてしまった）

昆陽寺付近で待った。意外に早く一行のバスはやって来た。どうやら渋滞は中国自動車道の代替コースになっている一七六号との分岐点付近までだったらしい。バスの後について走った。

最後の車中から、中津浜線沿いの多くの倒壊家屋を見た先生や生徒たちの反応はどんなだっただろう。仁川学院付近で止まるものと思っていたが、仁川の道路陥没地点を難なく通過して、競馬

場東側にバスは停車した。八時三十分。

辿り着いて、変わり果てたわが家に、浦島太郎の心境になる人もいるだろう。帰る家もなく、避難所に親を捜さねばならない生徒もいるだろう。無事を確かめ合って、涙する親子もいるだろう。覚悟して家路につけよ、どんなことがあっても勇気を失うなよ、そんな思いのする時だった。地球の自転とは無関係のあの瞬間からの私の一日が過ぎた。

第47回生学年主任 石塚 健

一月十五日晴、朝、職員保護者の方々に見送られて県西を出発。雪の難所、関ヶ原も高速道路閉鎖直前に通過し、夕刻、予定どおり竜王プリンスホテルに入る。

一月十六日雪、スキー学校開校式、各班に分かれてスキー実習開始。夜は前半のクラスレク。風邪ひきも少なく順調なスタート。後発のバスケット部員は明朝到着予定。

一月十七日晴、六時三十分のNHKニュースで神戸に強い地震があったとの第一報（この時点ではこのような大震災になるとは夢想だにできなかった。）朝食の席で心配げな生徒たちに確かな情報が入るまで落着いてスキー実習を続けるよう指示する。校長を中心に職員緊急ミーティング、まず、正確な情報を集めること、なんとか県西と連絡をとること、その上で生徒の安全を第一に今後の修学旅行団の行動を決めること、を確認する。TVの画面は時間がたつにつれて増していく死者の数と倒壊した建物や焼け続ける市街を映し出す。

西宮も相当の被害が出ている様子。事態の深刻さは予想をはるかに超えている。

すぐにも西宮にもどりたいがバスが神戸から出られない。私たちの旅行のお世話をしてくれている東急観光の会社のビルが傾いていく様子がTVに大きく映る。県西との電話連絡がつく。谷垣上村両先生の力強い声を聞き、勇気百倍。谷垣先生は生徒の安否だけではなく、引率職員の留守宅の安否状況も苦勞して確認して下さっている様子。有り難いこと。

県西自身が大きな被害を受けている様子だ。修学旅行不参加者の安否が心配。

再度の職員ミーティングで出来るだけ早く西宮に戻ることを決定、その準備に入る。家に電話がつながった生徒は家族の無事を確認。

一月十八日晴、スキー実習の最終日、朝食の席で集中をもつて絶対事故をおこさないようにと指示。一女生徒の話「実習をうけながらスキーですべているときは家のことは思わないのですが、リフトに乗るときにはやっぱり家族のことを思います。」東急観光が奈良や名古屋から集めてくれたバス十台が夕方にくるとうのこと。予定を早めて帰路につくことにする。生徒一人あて水ボトル一本とパンなど予備食糧を途中のドライブインで積み込む手配をする。

夜、生徒全員を集め、必ず親元につれ帰るから、指示に従い事故のないよう行動してほしいと話す。夜八時、ホテルを出発、渋滞を避け深夜の高速道路を走る。真夜中に途中のドライブインで水・食糧の積み込みと、バスの乗りかえ（山口方面二台、塩瀬方面一台をつくる）をおこなう。携帯電話で県西と連絡をとりながら進む。

南雲先生から「県西の同窓会館を修学旅行からもどった生徒で親と連絡がとれなかった場合の待機所として、水・食糧・毛布を用意した」との連絡あり。

渋滞をくぐりぬけ朝八時、甲武橋を渡る。全壊した家屋、落下した新幹線を目のあたりにして、みんな沈黙。競馬場横で七台をとめ、生徒たちに一度家を見に行くように、そして家族と会えなかったものは、学校にもどるよう指示。三台はさらに塩瀬、山口へ向かう。破壊された校舎に言葉もなし。生徒二名が亡くなったことを聞く。最後の生徒を家族に引き渡したのは夕方。

夕暮れの中、全壊した我が家の前に立つ。

たくさんの人々のおかげで無事戻れたことに感謝。震災で多くのものが壊れたが、親と子と教師の心は一つに結ばれたのではないか、そんな気持ちがある。

震災後授業正常化にむけての取組み

兵庫県立西宮高等学校 教務部

震災直後より生徒の安全確認およびアフターケアを重点課題とし、登校可能な生徒は学校で、不可能な生徒に対してはP T Aの力をお借りして、取り組んできました。

1月いっぱい、生徒の状況把握、安否の確認に忙殺され、授業再開の運びとはなり得ませんでした。

2月より登校可能な生徒が増えてまいりましたのを機に、少しずつではありますが授業を再開していきました。

ただし、本館（A棟）・理科棟（C棟）・商業科棟（D棟）・芸術科棟（E棟）が被災して使用不能となり、実際に使用できる教室はB棟（12教室）のみであり、当初は2時間授業から開始し、全体を5クールに分けて、別紙のように徐々に授業時間を増やしていきました。

被害調査が進む中、A棟の一部が使用可能と判明し、2月15日から40分授業ながら6時間授業に移行しました。

交通事情の回復にともない、3月1日からはそれを45分に、そして4月17日からは普通授業に戻すことができました。

ただ、阪急電車夙川～西宮北口間が依然不通であり、従来遅刻者指導の関係から第1校時と第2校時の間に設定していたSHRの時間を、第1校時の前にとり、遠隔地から通学する音楽科などの生徒のためのクッションとしました。

生徒・保護者の皆様のことを考えますと、ひじょうに無理もあったかと思われませんが、よくご協力いただき感謝しております。

遠方から通学している生徒に対しての対処もこれで良かったのか、避難所にいる生徒に対しても十分に配慮できたか等、今なお検討課題としております。

生徒の心の問題と、そして学習することの狭間での苦しい選択もありました。しかし、これもそれぞれの立場によって考えが違いましたが、最終的には全教職員・P T A等のご理解を得て乗り切れたのではないかと思います。

もちろん、いまなお心の問題は残っており、今後とも教職員全員で取り組んでいきたいと思いをします。

授業正常化にむけての授業計画

第1クール（2月1日（水）～2月7日（火））

（条件） ・ 交通機関のある程度の確保 ・ 簡易トイレの確保

（方法） ・ 隔日2時間授業（10:00～12:00）
・ 生徒在校時間 9:30～13:00

第2クール（2月8日（水）～2月14日（火））

（条件） ・ 阪急今津線全面開通 ・ 水道復旧 ・ パン類、牛乳製品の販売

（方法） ・ 毎日3時間各40分授業
・ 週替わりで 1年・2年 午前午後の2部授業
・ 第1週は 第1部（午前の部）＝1年、第2部（午後の部）＝2年
・ 授業は従来の1・2・3限（1部）または4・5・6限（2部）の授業を行う。

9:00～9:10	職員打ち合わせ
9:15～9:25	S H R
9:30～10:10	1限
10:20～11:00	2限
11:10～11:50	3限
11:50～12:00	終礼
12:25～12:35	S H R
12:40～13:20	4限
13:30～14:10	5限
14:20～15:00	6限
15:00～15:10	終礼

第3クール（2月15日（水）～2月28日（火））

（条件） ・ A棟東半分使用可能（県の十分な審査を経て）

（方法） ・ 毎日6時間40分授業

9:00～9:10	職員打ち合わせ
9:15～9:25	S H R
9:30～10:10	1限
10:20～11:00	2限
11:10～11:50	3限
12:00～12:40	4限
12:40～13:20	昼休み
13:20～14:00	5限
14:10～14:50	6限
14:50～15:00	終礼

第4クール（3月1日（水）～4月15日（土））

（条件） ・ 交通機関の改善

（方法） ・ 毎日45分6時間D型授業

8:40～8:50	職員打ち合わせ
8:55～9:05	S H R
9:10～9:55	1限
10:05～10:50	2限
11:00～11:45	3限
11:55～12:40	4限
12:40～13:25	昼休み
13:25～14:10	5限
14:20～15:05	6限
15:05～15:15	終礼

第5クール（4月17日（月）～）

（条件） ・ 強い余震がないとの終了宣言 ・ 全生徒、全教職員の定時登校可能

（方法） ・ 平常授業（朝にS H Rを持ってくる。）

※ この期間の生徒の出欠席は、担任の判断による。手続きはクラス担任より成績伝票を教科担任に手渡すときに、出欠席の一覧表をつけて行う。

『 県西阪神大震災日誌 』

社会科教諭 村津 弘明

一月十七日（火）

午後登校する。甲東園駅前の商店街は壊滅状態。学校の安否気になる。校門の東でかなり太い桜の枯枝を拾う。旧図書館の北壁崩れ、本館玄関のガラスは砕けた跡が生々しい。正面壁に斜めの先断亀裂が走っている。職員室は書類散乱して足の踏み場もない。室内の柱は全部亀裂が入っている。階段部の亀裂も生々しい。とくに商業家庭科棟の西便所壁面の崩壊がひどい。脇机の上に立てかけていた復元中の青山校長杯はまた壊れた。

一月十八日（水）

午後登校すると小川美栄さんが「先生にとっておきの資料がありますの」と教えてくださったのが職員室の掛時計、震災発生時の五時四十六分で停まっている。「ほんと、関東大震災時の中央気象台の時計、広島長崎の原爆時計に匹敵するね」と拾い上げ、とりあえず「針を動かさぬように」と貼紙をしておく。本日、今回の地震を『兵庫県南部地震』と命名さる。

一月二十日（金）

午後登校す。事務長より芸術棟の食堂は危険につき立入禁止区域とするとの報告あり。十八日に発表された地震の規模を岩屋六・二から、岩屋三宮七・〇、地下十キロの直下型地震と改正される。

一月二十一日（土）

本日も休校。休校の決定は日々決められる。昨夜は珍しく余震

なし。山道先生より電話あり「二十三日の月曜午前十時に集まれる生徒だけ召集することになりました」とのこと。夜、西沢郁子さんより見舞電話あり。なかなか通じなく一時間ほど待ったとのこと。こちらからはまだ電話できない。

一月二十二日（日）

震災後初の無情の雨。

一月二十三日（月）

今朝始発より門戸厄神北口間開通する。門戸厄神以北は新幹線の架橋崩壊で依然不通のまま。九時登校。朝会時事務長より、校舎中安全なのはB棟・音楽棟・体育館・同窓会館、本館は事務所より東側。この時校長より「登校できる職員は申し出てほしい」との要請あり。南雲先生の報告では、現在体育館に避難しておられる住民は二百五十名。玄関横に腹をこわした犬が一匹不安げに吠えだてる。

本日より今回の地震の震災名を「兵庫県南部地震」より「阪神大震災」と改名さる。夜余震あり。九時四十四分は震度三。十一時四十二分も震度三。

一月二十四日（火）

午前0時五十三分にも余震あり。午後市民病院から市役所に向く。高木東町、北口町、芦原町と墨々として倒壊家屋がつづく。その中に西福寺の本堂のみ頼もしくそびえている。「町の誇りです」と町内の人の言葉。寺の住職は遭難されたことをニュースで見た。町内で日本建築学会の調査員と出会う。市役所では山と積まれた救援物資の衣料をボランティアの人たちが選別されている。市役所広報課で『地震災害広報一号』をもらってくる。帰りに北口町の元大阪芸大名誉教授津高陽一氏宅跡のタンスの背に「津高先生ご夫妻は二十一日山科で茶毘にふされました」との悲しい貼紙あり。市内各所に被災された人々へのたむけの供花がなんとも

わびしい。

一月二十五日（水）

午後登校し図書館北壁壁片を拾う。3時過ぎから登校した職員が手分けして避難所の生徒を励ましに行く。段上小学校へ行くがあいにく外出しており留守。この後樋ノ口小学校へ行き3年生朝野祐子さんと出会う。少しセキをしていたが元氣そう。夜十一時十六分余震あり。震度四、マグニチュード四・七。

一月二十六日（木）

夜十一時一分余震あり。今夜は一時間に一回のわりでグラツとくる。

一月二十七日（金）

午後登校す。職員室外廊下の柱角部を拾う。資料庫を整理していると上村先生から「先生にお渡ししようと思ってきました」と図書館の鍵を下さった。震災時に横揺れで中央から真二つに折れた鍵だった。早速資料庫に収納す。

一月二十八日（土）

七時五十二分にグラツときた。八時六分にも中央区で震度三の余震があるが西宮では感ぜず。

九時五十分登校。職員会で阪神大震災に対する当面の対応策についての連絡あり。内容は、二年が月・水・金、一年は火・木・土曜にB棟で一・二限のみ四十五分授業。授業は時間割の三・四限とし、始業は十時。休憩は二十分とする。十時からの生徒朝会で上村先生の地震体験談あり。当時の状況を知る参考としてその大要を示すと、五時四十二分にJR芦屋駅で下車し走り出した時、突然ゴーという地鳴りがして空一面が青白く光ったと思うと、烈震におそわれ前に倒れた。崩れる音と舞い上がる土煙で目の前が真暗になった。地面の震えがおさまったのでたちあがってみると、

後ろで七回建てのビルが崩れていた。夙川までようやく来ると救いを求める人の声があちこちで聞こえる。

午後、改めて校舎を見て歩く。商業家庭科棟各階段共西端の便所・階段の部分の崩壊が激しいが、商業I.L教室がある三階部分の壁面の崩壊が特に際立っている。棟の外面は三階床部の全柱に横の亀裂が走っている。一階の社会科準備室・社会科教室共に柵は全部倒れ、準備室の机は全て西壁に押し寄せられている。社会科教室の床に散乱する須恵器片・瓦片・埴輪参考品を拾い上げる。この後本館2階の二・四と三・五の教室を撮影する。椅子は立っているが机は倒壊が多い。夕方、補修の技師が本館の剥離面を檢視されていたが、どうも鉄筋が効果的に入っていない模様。このあと、講堂前の植込みから棟上の半割瓦を拾う。裏にAKASHIの刻印あり。

一月二十九日（日）

午前0時半頃余震あり。午後市内南部に向かう。久保町の旧西宮商業学校記念碑は健在。帰り市役所へより、『地震災害広報二号』をもらう。午後四時頃かなりの余震あり。本日まで地震でなくなれた人は五千八十七人、行方不明者は二十人。

一月三十一日（火）

八時二十三分余震あり、かなりきしむ。本日、天皇・皇后陛下被災地お見舞い、西宮中央体育館に来られる。

二月一日（水）

午前一時四十分余震、二時間後にまた余震あり。登校中、上甲東園二丁目角に胸像放置してあり拾う。一部損傷あるが復元は易い。午後、講堂天井より落下し破損した照明灯、講堂基壇コンクリ、模様ガラスなどを拾う。

二月二日（木）

登校途中放棄されたブロンズ像を拾ってくる。とりあえず資料庫に保管す。午後、現在までの収集品に『阪神大震災被災資料』のナンバーを貼り付ける。また学校のゴミ捨場より、家庭科の元備品で被災して抹消した食器類を拾ってくる。震災状況を具体的に示す資料としては適している。

このところやや余震多発し、四時六分、十六分にも震度三あり。夜旧職員古本保夫先生から電話あり。県芦屋高校も国道に面した南校舎が使用不能、一・二年で二部授業とのこと。

二月三日（金）

午前四時すぎ余震あり。北淡で震度一。登校中に釈迦説法（石膏製）像あり。背の部分が欠損するが復元は易いので拾ってくる。ゴミ捨場から家庭科の破棄品を数点集めてくる。震災考古学（仮称）では瓦礫収集場を平成の貝塚と規定する。震災を学ぶには震災被災品以外に教材はない。午後卒業生小林由紀さん疎開先の熊取町から帰られ来宅。旧職員津村直子先生よりお見舞の電話いだ。七時四十二分頃また余震あり。ドンときたが神戸で震度一とか。本日までの震災による死者は五千二百四十三名、行方不明者六名。負傷者二万六千八百四名（死亡者数兵庫県のみ。他に大阪十四名、京都一名あり。）

夜、十一時四十五分頃垂水区で震度二、西宮では感ぜず。

二月四日（土）

北村先生を甲武橋までお送りして室川町・千歳町へ行く。分銅町・寿町・千歳町も畧々と倒壊家屋が続く。千歳町の卒業生平井幸代宅も全壊。壁の残骸に「家族五人無事です。雲井町小原四郎のところにおります」との貼紙あり。夜、そこに電話をする。元気な声に安心する。

二月五日（日）

北口町の道端に希少動物アルマジロの剥製が放棄してある。丁度引越しをされるようなので、ご不要品か伺ってみると「あげます」とのこと。「県西の村津といいます」と申し上げると、「私も県西の卒業生で、花折作治先生が担任でした。引越しのおりに県西の先生と奇縁ですね。どうぞお使い下さい」とのこと。県西校舎の被災状況や二部授業のことなどをお話してお別れした。

二月六日（月）

半月ぶりに二・三で授業をした。修学旅行から帰ってきて以来初めての授業であった。午後二時すぎ帰ろうとするとグラツときた。

二月八日（水）

七・八日と余震はないが、死者の数は増える一方、五千二百七十六人との発表である。痛ましい現実が続く。午後県芦屋高校へ行く。こども体育館が避難所になっている。県芦屋高校の運動場は全面が自衛隊災害救援部隊の駐屯基地になっている。芦屋市内も畧々と倒壊家屋が続く。打出町の楠公古戦場の石碑も根元から倒壊していた。

二月九日（木）

二・二と二・三は授業があつたが、二・四は今のところ授業ができない。今後の進度の調節が大変だ。

二月十日（金）

半壊家屋や取り潰しの家屋が多くなり、頭上からの落下物に対する安全策としてヘルメット着用がすすめられている。とりあえず手元のものを着用してくると、ゲシュタポのヘルメット・ルフトワッフェンや旧日本軍用などを適当につけてくる。昼前から西宮戒神社の状況を見てくる。室町期の土塀にかなりの被害が目立

つ。境内の灯籠類はほとんど倒れている。川東町・桜谷町・越水町の周辺も被害大きい。帰校した直後の三時二十分に余震あり。

二月十一日（土）

建国記念日で休み。震災から二十五日を経過し一応のけりもついていた。学校も来週から授業も正常化へ移る気運である。ただ余震はまだまだ続くという予知連の発表がなんとも心に重い。

二月十二日（日）

午後四時五十分頃余震あり。家の各所からキシミの音が激しく聞こえる。三時すぎから雨、被災地での生活は大変だろうとしみじみ思う。

二月十三日（月）

二―四は震災後一カ月にして初の授業。三時二十分頃余震あり。学校では資料庫整理に過ごす。瀬戸口さんより「先生にあげようと置きました」と公務員室の時計をいただく。震災発生直後で停っている。早速資料庫の壁に掛ける。

二月十四日（火）

三年生の成績を完了した後、家庭科廊下から割れた摺り鉢を二体拾ってきて接着する。韓国からの救援物資ロッテチョコレートパイのダンボールを資料庫に保管する。

二月十五日（水）

本日より終日短縮六時間授業を開始する。やっと変則授業から脱却し全クラス満遍なく行けるようになる。このところ二・三日救援物資の弁当で昼を過ごす。ボランティアをされている日下部弘明先生が残りを持って来られるもの。

二月十六日（木）

芸術棟は震災以来危険建築に指定され立入禁止になっていたが、技師の検分のため開いていたので上つてみる。書道準備室入口の壁面大きく崩れ書棚も倒れている。書道教室西南隅の柱は外面からも大きく裂けているが内部の座屈も激しい。竹中貴子先生から「書道全集を持ち出したい」と言われていたので、半数出してくる。また西南隅の角柱片を拾ってくる。準備室の床は三階からの漏水で相当浸れている。午後三階の美術室を見る。散乱する教具のうち石膏像一点拾ってくる。人の声がするので廊下に出ると西谷博文先生と三隅広樹先生にお会いする。お二人は準備室から糸鋸機二台を持ち出されたので、これも後。先生の許しを得て資料室に保存す。（瀬戸口さんの話では故障し使用できないらしい）

二月十七日（金）

震災以来一カ月たつ。正午に大震災で亡くなった五千三百九十一名の冥福を祈って黙祷をする。昼食はPTA有志による炊き出しがあり、五目ご飯、豚汁、サラダ、揚げポテトをいただく。食堂が営業していないので温かい昼食は久しぶり。職員室にMarieのビスケットがあり、包紙にカルカッタの記名あり、インド政府からの救援品である。事務長に講堂の今後の状況を尋ねると、解体せず修復することとで脇部屋もそのまま使用してよいようだ。来週にでも震災で壊れたドアの修理をしたい。本日正午より明石天文博物館の時計が動き出した。一つ一つ復興への歩みを感じられる。

二月十八日（土）

学校で仏像などの復元にかかる。とりあえず甲東園周辺と学校内の被災品。震災考古学の実験室は今の所県西が唯一の実験場。小学校からの終戦五十周年企画シリーズの資料依頼の中に、学校資料以外の品目を送付する。夜三度余震あり目が冴えて眠れず。今一時。

二月十九日(日)

七時七分余震あり。昨日の新聞に阪神地区四学会共同で震災で消滅の危機にある歴史資料を守ろうとの活動が始まることが出ている。本日の新聞には神戸国際会館ビル撤去の記事も出ていた。神戸の懐かしいビルが一つ一つ消えていくことは誠にわびしい。夜八時二十分頃北淡町で震度一の地震あり。他に京都で震度三、猪名川で震度一の群発地震ありとの報を知る。

二月二十日(月)

査定会議の日、夜七時二十二分前後に余震二回あり。本日午後よりガス復旧する。本日の新聞に、本震に匹敵するような余震は可能性としては少ないだろう。しかし用心は大切とある。

二月二十七日(月)

学校で上甲東園二丁目から拾ってきた中国製大甕を復元す。夜十時二十五分頃余震、かなり大きな揺れ。十時四十三分にまた余震。今度もかなりの揺れだ。さらに十一時二十五分に三度目の余震だ。ところがテレビは一回の速報もない。さらに十一時四十五分には四度目の余震。たまりかねた家族が大阪の気象台に電話をすると、西宮の震度計には反応がないとのこと、京大の予知連から報告なしと言う。まことに不思議で奇妙な話だ。

二月二十八日(火)

卒業式当日。午後雨模様だったが余震もなくおだやかな一日だった。

三月一日(水)

登校途中、上甲東園で小林一三著『曾根崎艶話』などを拾ってくる。運動場に仮設校舎の資材山積みす。

三月二日(木)

運動場に仮設工事のための資材の搬入と校舎基盤の杭打ち始まる。

三月四日(土)

本日より学校にガス復旧す。電気・水道につづきLife Lineは一応復旧を終える。

三月五日(日)

五時すぎ余震あり。

三月六日(月)

三時二十分につづき夕方また余震あり。

三月七日(火)

午後北村隆枝先生と芸術棟に入り、懸案だった書道教室の『書道全集』全巻を持ち出す。これで書道教室の重要書類は全部避難したことになる。

三月十日(金)

仮設校舎基台の丸木と柱片を拾ってくる。

三月二十二日(水)

午後資料庫階段部の整理をする。

三月二十三日(木)

四月初めに仮設校舎へ移るため机上整理をする。体育館二階から運動場を見下すと三並び五棟の仮設校舎が完成している。この新体育館南二階ベランダ部に活断層と平行に南北方向十二の亀裂が入っている。なおベランダ西部には東西方向の亀裂一本走っている。また芸術棟南の階段は南北方向に十一本の亀裂が見える。

三月二十八日（火）

本日をもって体育館の避難所は閉鎖される。

三月三十一日（金）

避難所へ貸出食器類一式を資料庫に搬入す。

以上が平成六年度分の日誌の概要である。日誌はこの後神戸市内各所における火災資料品の収集記になり、再度学校被災品の収集は神戸市内の瓦礫集積場が消滅した十一月以降となるため割愛した。なお、日誌は内容を出来るだけ客観的に示すため、事実だけを表現し、自分の感情や批判は最小限にとどめている。

私は小さい頃から一つ目標を立てていた。五十年前の少年期に大阪空襲の資料を十分に集めることができなかったことに対する惜念の情があった。大阪や各地での戦争展にも手元の資料を提供してはいるものの、組織的な収集でないことが悔やまれてならなかった。今回の大震災は、かつての大空襲に匹敵する惨禍だった。災害で失われた尊い人名は現在六千二百名を超している。この惨禍を永遠に忘れさせないためにも、証となる資料を永く将来に残す努力をしたい。瓦礫として放棄された物品も一月十七日の早朝まではその一つ一つに生活があり歴史があった。災害を災害で終わらせず、将来への指針として活す努力が今一番要求されるときであるが、私は私の方法で努力を積み重ねたい。学校の資料も、神戸の資料もいわばその一貫として収集したものであった。

この目録は、1月17日以来、各所で発行されたプリント・ビラなどの出版物の中から、学校、地方自治体、企業、個人関係品を収集日順に記したものである。なお、原資料はあくまで個人的な収集物であって、学校保管資料とは異なるものである。

村 津 弘 明

1	保護者宛プリント	学 校	1月23日	50	西宮市ニュース地震災害広報5号	西宮市	2月17日
2	生徒宛プリント	"	"	51	大震災遺児に奨学金供与	学 校 で	"
3	生徒状況調査票	"	"	52	災害特別貸付償還表	"	"
4	地震災害広報1号	西宮市	"	53	第4クール授業時間帯	"	2月27日
5	避難所生活生徒一覧	学 校	1月25日	54	第2次分震災緊急教科書搬送	"	"
6	避難所生徒一覧原稿	"	"	55	生徒保護者の皆様へ	"	"
7	保護者宛プリント	"	1月27日	56	阪神大震災緊急教科書搬送	学 校	3月1日
8	危険校内立入禁止ビラ	"	"	57	J T U特別見舞金について	学 校 で	"
9	危険立入禁止	"	1月28日	58	教育ひょうご税還付	"	3月5日
10	阪神大震災に対する当面の対応	"	"	59	西宮市ニュース地震災害広報7号	西宮市	3月16日
11	職員動静表	"	"	60	兵庫県南部地震生徒保護者の皆さんへ	学 校	3月6日
12	県立西宮高校生徒諸君へ連絡	"	1月18日	61	家屋破壊生徒ほか6点	学 校	"
13	県立西宮高校生徒諸君へ連絡	"	"	62	余震への備え	西宮市	3月7日
14	福田斉子告別式地図	"	1月28日	63	兵高組西阪神支部通信	兵高組	3月8日
15	1月28日(土)出席者数一覧	"	"	64	頑張れ西宮大震災をぶとばせ!	阪急北口駅で	3月9日
16	西宮市ニュース地震災害広報2号	西宮市	1月29日	65	J T U生活必需品贈呈を決める	J T U	"
17	読者の皆様へ	学 校	2月2日	66	阪神大震災礼状住所録	学 校	"
18	共済制度改正決定	J T U	"	67	にしのみや2月統計だより	西宮市	"
19	授業料事務取扱要領	学 校 で	"	68	こうべ地震災害対策広報13号	神戸市	3月12日
20	県西生徒諸君へ	学 校	"	69	神戸ホットプレスV o l 4	"	"
21	上が原小学校からのお知らせ	上が原小学校	2月6日	70	お知らせ	西宮市	3月15日
22	神戸女学院正門までのコース	神戸女学院	"	71	阪神大震災会員の皆さん	学 校 で	"
23	高木小学校の皆さんへ	高木小学校	"	72	被災された皆さんへ	"	"
24	王貞治サイン色紙	北口町で	"	73	希望商品申し込みc o p y	"	"
25	毎日中学生新聞	中央体育館	2月7日	74	皆様の足阪神電車	西灘駅	3月17日
26	毎日小学生新聞	中央体育館で	"	75	3月15日以降の「JR」への振り替え	J R住吉駅	"
27	がんばれ受験生A塾	"	"	76	解雇に負けるな!	J R新長田駅	3月18日
28	震災ニュース2号	兵庫県	"	77	お詫びとご案内	阪急西宮北口駅	"
29	地震災害広報3号	西宮市	"	78	第1回ぼちぼちいこや西宮	室川町で	3月24日
30	被災者のみなさんへ	"	"	79	がんばろやWE LOVE KOBE	ダイエー	"
31	震災ニュース4号	兵庫県	"	80	このネコを捜しています	広 告	3月25日
32	ファックネット生活情報	県芦屋高校で	2月8日	81	西宮震災地の声7号	中央体育館で	4月5日
33	広報あしや地震災害情報	芦屋市	"				
34	読売新聞震災掲示板	県芦屋高校	"				
35	震災復興まちづくりニュース	神戸市	"				
36	生徒異動について	学 校	"				
37	2月行事予定	"	"				
38	県西生への緊急アピール	"	"				
39	2月行事予定改訂版	"	2月13日				
40	保護者生徒の皆様へ	"	"				
41	生徒部ニュース	"	"				
42	兵庫県南部地震被害速報26号	兵庫県	2月14日				
43	避難駐車をされている自動車	学 校	"				
44	ロッテチョコレートパッケージ	韓 国	"				
45	神戸新聞がんばっています	学 校 で	"				
46	被災証明の発行	西宮市	2月16日				
47	P T A各位へ	学 校	"				
48	市民の皆さんへ	西宮市	"				
49	マリービスケットパッケージ	インド政府	2月17日				

上村 敏幸 教諭

その時、私は芦屋・夙川間の国道2号線をジョギングしていた。前日、バスケット部が阪神大会決勝まで進み、2年生が遅れて修学旅行に参加したため、大阪駅に見送りに行った。そのため睡眠不足でボーとしながらJR芦屋駅を出発し、5分位たったかどうか。「ゴゴゴゴゴッ」という地鳴りと共に、東の空が青白く発光すると同時に体が浮上し地面に叩き付けられた。コンクリートの路面上に突っ伏したまま骨盤を突き上げる揺れを感じたのは、私以外そうたくさんはいないだろう。地震だと理解できなかった。恐怖もあまり感じなかった。顔をあげると土ぼこりの霞がかかり、あたりはあちこちに止まっている車のヘッドライトでぼう々とすすんで、傾いたり崩れたりしたビルやマンシヨンのシルエツトが浮かんでいた。私の前後には、倒れた自動販売機や、根もとで折れている電信柱があった。幸いにも両膝のかすり傷程度でたいしたケガはなかった。「冷静に、落ち着いて！」と心の中で繰り返しながら芦屋駅に戻ろうとした。なんと引き返す道には5階建のビルが倒壊して道をふさぎ、その向こうに芦屋駅のホームが崩落しているではないか。家に帰ることを諦め学校へ、家族の安否が気になり電話BOXがあるたび電話するがつながらない。夙川・安井町のあたりまでくると、道路に避難と救助を求めて多数の人が着のみのまま出ていた。地割れや地崩れがあちこちにできていたが、夙川の松並木は不思議なことに何事もなかったかのようだった。

県西の校舎が見える場所まで来た。ちゃんと立っている。講堂も崩れていない。よかった。上が原の台地の上と2号線付近とはこんなにも被害が違うのか。

正面玄関に車のライトをつけっぱなしにして、宿直の代行員が

茫然と立っており、ケガはないかと尋ねると、返事の声も震えていた。あの校舎の中でただ一人だったのは怖かっただろう。粉々になった玄関のガラスに気をつけ、事務室に入り電気をつけた。停電していない。TVもつけた。緊急ニュースを繰り返している。鳴りっぱなしの警報機をOFFにしていた。電話が鳴りっぱなしになる。「今日、授業はあるのか？」という被害の少ない地区からの生徒の問い合わせである。「自宅待機して連絡を待つてください。」電話の応対にかかりつきりになって時間の過ぎるのもわからないくらいであった。グラウンドを見るといつのまにか南門が開いていて、数十台の車が駐車しており、避難してきている様子であった。お昼頃、付近の住民代表の県西の校舎を避難所として使用させてほしいという申し出があり、山根事務長さんと相談し体育館一階武道場を避難所にあてることにした。二階フロアは、柱もなく二次災害の恐れもあるので、一階部分のみという判断であった。

断水しているので、水洗トイレはそのままでは使用できず、プールから水を運ぶことにした。始めは十八リットル入りのポリタンクにプールの水を汲み取り、十本ずつリヤカーで運んでいたが、それではおっつかず三百リットルの薬液タンクを軽トラックに積み込み運ぶことにした。

その夜は、一階部分の廊下・階段総てに人があふれ、後で聞いたところでは六百名位避難の方が泊まったそうだ。

こうして今まで経験したことがない、学校が避難所になる日々が続くことになる。

『地震当日から震災後のデータ管理をするまで』

書道科教諭 竹中 貴子

一月十七日午前五時四十六分、布団の中で部屋ごと強烈にシャッフルされ、この日が始まった。あまりの出来事に、何が起きているのかわからず、「地震だ」と夫に言われたときにも、東京で大地震が起き、関西にまでその揺れが伝わったのではないかとまで思った。それほど、関西には地震が来ないと思いこんでいた。だんだん外が明るくなり、部屋の惨状を見たときにも、まだ事態の大きさに気がついていなかった。割れ物が多く、戸口まで出るのに一時間近くかかり、七時頃、連絡のとれない神戸市中央区の夫の実家に車で出かける。この時間に、毎日私は県西に出勤する。いつもは渋滞して数珠つなぎの有馬街道にほとんど走る車がない。信号も消えたままである。静かな道を南へと下り、兵庫区に入ると、焦げ臭いにおいがしてくる。黒煙も見え、火事が数カ所で見えてくるのが分かる。それでも、消防車のサイレンの音もなく、ただただ静かな街。家が倒れ、ガソリンスタンドが崩れ落ち、道には毛布に身をくるんだ人が立ちすくんでいる。私は、車から見たこの光景を決して忘れることはないだろう。

中央区花隈の夫の実家は建ってはいたものの、一階と二階がズレてしまっていた。学校に連絡をいれようと公衆電話に並ぶ。やっと順番がまわってきたが、話し中のツーツーという音だけ。

食料をコンビニエンスストアで買い、両親ともども鈴蘭台の自宅に戻ったのが八時半頃。帰ったときには、電気がきており、テレビでは、各地の惨状が次々と報道されていた。もちろん、電鉄各社も不通。これでは、出勤できないと、このあと三日にわたって学校へ連絡をしようとするが、全くつながらなかった。この間、学校では、連絡のつかない者のリストに私の名前が載っていたらしい。車を中央区に走らせただけでも、いろいろな惨状を目にす

るのだから、西宮までの距離は、とても遠いものと思った。この三日間、夫は勤務先の神戸甲北高校に出勤していた。毎日必死で生徒の安否確認をとっているその話を聞いているだけで、県西でも同様の取り組みがおこなわれているのがわかった。夫は、夜にも家で、生徒やその家族の方々の安否や連絡先を入力していた。このあと、学校へやっと出勤した私が、同じように入力したきっかけは、ここにある。

地震から三日経った二十日午後、やっと一段落ついていた夫に同乗してもらい、六甲山を越えて、県西に向かった。山頂付近の落石がひどく、ある箇所では、道が三メートルほど下に陥没していた。自衛隊の人が土嚢をつんで、やっと車一台通るだけの道を作ってくれていたが、谷へダイビングするようで、とても怖かった。やっとの思いで着いた県西の事務室には、十数名の先生方と事務職員の方々の姿があった。その顔に浮かぶ憔悴感から、神戸甲北高校よりも状態の悪いのがすぐにわかった。神戸甲北高校は、あの大火災が起きた長田区兵庫区を校区に含む。しかし、幸いなことに犠牲者はでていなかった。学校が避難所になっていること、断水が続いていることなどいろいろな条件が考えられるが、何よりも生徒に犠牲者がでたこと、職員の家族に犠牲者が出たことが重くのしかかっていたように思う。そんな疲れ切った先生方の顔を目にし、何もしていない、何もできていない自分が悲しかった。その日は、全壊した芸術棟の書道室を見に行った後、船坂峠を越えて帰宅した。車は西宮甲山高校から有馬街道までつながっており、四時間かかってたどり着いた。明るく二十一日朝出勤。学校に着くと昼。自分のできることとして、神戸甲北高校で見ていたデータベースを参考に表を作り始めた。半日程度では入力しきれず、安否確認が記入されていた用紙をコピーし、自宅に持ち帰った。このころ、一日の起きている時間の半分を車内で過ごしていた。学校に勤務できる時間が少なく、家で入力するぐ

らしいか私にできることがなかった。二十二日、冷たい雨。神戸甲北高校の事務室からプリントアウトしたデータを県西にファックスで送信した。少しでも早くとの思いからであったが、神戸甲北高校の教頭先生も快く貸して下さった。二十三日から二月下旬まで、このデータベースのデータの訂正等が続けていった。地震後、一ヶ月の間には大きな余震があるかもしれない。そのときは、今よりも生徒の居所がつかみにくくなる。私のように、家と職場が離れている職員も多い。電話がつかなくなかったときに、動ける職員がすぐに、データを使える状態にまとめておきたい。そんな思いで続けていた。大きな余震はこなかったが、仁川の方で避難勧告が出たという情報が入れば、その地域の生徒たちのデータを取り出したり、授業の開始時間を決めるのに登校時間を調べてみたり、何かしらの利用価値はあったと思う。四月に入って、このデータを新クラスに並べ直し、授業料減免などのデータも加えていった。授業で生徒に接している時に、その生徒のデータが頭に浮かび、大変な中で頑張っている姿に心が打たれた。こういったデータを知った上で、生徒に接することができたことが、私にとって一番良かったように思う。

* * *

地震から十ヶ月経った今、何か遠い日のような、それでいて昨日のこのように鮮明に思い出され、妙な気持ちになります。生徒の現状把握を下さった先生方が、そのあと少しでも使いやすい状態にしておきたいと思って始めたデータベースでしたが、やはり、電話連絡のとれない生徒に、足を使って会いに行かれた先生方に、頭が下がります。また、データの入力を手伝って下さった先生方にも感謝しています。物が散乱した保健室の整理で忙しい先生、小さなお子さんをお持ちの先生、どちらも決して人の仕事を手伝う余裕などおありではなかっただろうに手伝ってくださいました。また、連日連夜学校につめておられた先生、避難所で地域の人々のお世話をされた先生、生徒の登校前日にガラスの

破片を片づけておられた先生、救援物資や食べ物を運んできて下さった先生、それぞれが誰に言われることなく、自分の考えで、自分の出来るすべてを出し切って動いた日々です。極限状態の中で、暴動がおきなかった姿が、世界から評価されましたが、私には、人の心の優しさ、人間の強さを教えてくれた日々でした。

『家庭科の授業』

家庭科教諭 木村 ゆきみ

カリキュラムに従い、二年生（普通科・音楽科）・三年生（商業科）の家庭一般においては例年各クラス約八回の調理実習を実施してきた。一九九五年一月十七日は、三年生の商業科が実習の最後の締めくくりとして、班別に計画を立て分担にしたがって材料を購入し楽しみにしていた。当日早朝の大地震によりその計画は潰れたが、もし、あの地震が十七日の正午頃（実習中）であったならと想像すると血の気が引く思いである。

D棟一階・二階にある家庭科教室は、ほとんどの戸棚が倒れ使用していた食器は約八割が割れてしまった。冷蔵庫も電子レンジもアイロンもミシンもあらゆる備品に被害が見られた。

授業時数の二分の一は実習をせねばならないとされる家庭科であるが、以後仮設の実習室ができるまでの九か月の間、普通教室での授業を余儀なくされた。授業が再開された二月は、住生活や保育の分野の学習を教室で行なった。知識だけに偏らぬようにできるだけ作業や視聴覚教材を取り入れる工夫をした。

四月、新年度がスタートして待望の家庭科男女共修が全面实施されるといふ記念すべき一九九五年度を迎えたが、県西では仮設の普通教室での授業が続いた。保育や家庭経営の分野を学習することとし、時には視聴覚教材を利用し、時には教室でできる簡単な実習を取り入れてはみたが、水・ガス・電気の使えない状況では家庭科教師は何とか実物教育をと、いつも重たい教材を背負って教室に通った。

それでも何とか早く実習をさせたい思いで、連日実習室の整備に努め、やっと十月に入って一学年九クラス・二学年一クラス・三学年二クラスは被服製作を、二学年九クラス・三学年一クラスは調理実習を開始した。実習が始まると、教師も生徒も準備や片付けに時間をとられながら、連日家庭科教室はフル回転している。何しろ毎週二十二クラス四十四時間約八八〇名の生徒が調理室と被服室に入れ替わり立ち替わり使用しているのである。D棟の再建にあたっては、現実の使用状況を認識し、将来を見通して、施設・設備ともに充実した実習室ができることを切望している。

九月に入って、鍋・釜をはじめ備品・器具の種類・数の多い家庭科教室の引っ越し作業は、とにかく大変の一語であった。

『震災後の生徒会活動』

生徒会長 二年一組 西野 弘美

まだ記憶に新しいことですが、一月十七日に私の生活を大きく変える出来事が、ほんの数秒の間に起りました。それは、たくさんの人や物をこの世から消しました。

県西では、二つの尊い命が消え、芸術棟やA棟が使用できなくなり、仮設校舎での勉強が始まりました。そんな中で、五十代理事会としては、初めての行事である球技大会が行なわれました。これは、四十九代との共同作業によるもので、仕事の流れを知る上で大変いい勉強になりました。しかし、その球技大会で私たちの前に大きな壁が立ちました。それは、グラウンドが使えないということでした。そこで、球技大会はやむを得なく四十九代の人にほとんどしてもらい、その問題も解決してもらいました。そして私は、四十九代の人に感謝するとともに、これから自分たちで解決していかないといけないと思いました。次に私たちがしたことは、体育大会です。運動総務、彼がいなかったらこの行事は出来なかったと思います。彼は一年生の時理事会で仕事をしていたため、何をしたら良いのかわからない私を引っ張ってくれました。グラウンドが使えないということで、甲陵中学校を借りて行ないました。体育大会は私たちが五十代だけで行なった初めての行事で大成功しました。と言いたいのですが、残念なことに雨が降ってしまい、午後は中止となってしまいました。私は、この時ほど天候を恨んだことはありません。なぜならずっとしんどい思いをして準備してきたことが、全て無駄になってしまったからでした。だからといって、いつまでも昔のことを後悔しているわけにはいきません。次の行事が控えていたからです。

私たちが次に取りかかったのは、冬季文化発表会と、いきいきハイスクールです。今年は、地震のために仮設校舎になりましたが、仮設はとても殺風景で、その校舎に潤いを与えるために壁画

製作を行なうことになりました。スケジュールが一日単位でうまくいくか心配しましたが、みんなの協力のおかげですばらしい作品を作ることが出来ました。本当によかったなあと、今改めて思います。

私は、地震のあった年に会長になったことを後悔してやめたいと思ったこともありました。それというのも、今までに例を見ない問題があったりして、いろいろと大変だったからです。けれども今は違います。地震のあったこの年に会長をやれたことをとても幸せに感じます。なぜなら、私は理事会に入ったことで、自分一人では何もできないということを知ったからです。それに、すばらしい仲間を多く得る事が出来ました。彼、彼女たちは何か仕事を頼んでも、全然嫌な顔もしないで、その上、暇があれば他にすることはないかと聞きに来てくれたりします。

これからの生徒会活動の中で、また色々な問題出てくると思います。しかし、私たちは一つ一つ問題を解決しながら、この県西に新しい伝統を残していけたらいいと思っています。

『福田斉子さんの死に寄せて』

元三年四組担任 衣川 伸秀

仕事を片付け、床に就いたのは夜中であつた。一月十七日未明の地震は、目が冴えてなかなか寝付けず眠りの浅かつた状態の私をこれは夢に違いないと錯覚させるほどに激しく恐ろしいものであつた。ベッド横の、自分の力では微動だにしない大きな洋服ダンスが今にも倒れんばかりに揺れている。それを私は足で必死に支えている。耳には台所の食器が棚から落ちて割れる音が聞こえてくる。いったい今何が起つているのか。それを理解するのは少し時間が必要であつた。この同じ瞬間に、今何が起つているのかという疑問さえもおそらく抱く暇もなく、土砂の流れに家ごと押し潰されて福田斉子さんは逝つてしまつていたのを、私はその時知る由もなかつた。

揺れがおさまつたので外に出た。停電のため、辺りは真っ暗である。近所の人々も出てきて、それぞれに何かしゃべつていて。足許には冷たい水が嵩を増している。海に近い場所なので、誰かが津波の水じやないかと言っている。水道管が破裂したのだと言っている人もいる。これが液状化現象であることは後になつて知つた。建物はなんとか大丈夫のようだった。水の冷たさに耐えきれず家の中に戻つた。泥だらけの足をすでに冷たくなつてゐる風呂の残り湯で洗い、体が冷えきつてゐるのに気づいて、ふとんの中にもぐりこみ、ラジオを聞きながら朝を待った。

八時ごろであつたか、どんな状況かも知らないのでとにかく学校に向かつた。まず、車の多さに驚いた。全然前に進まない。新聞社の車が間に割り込み割り込みして進んでいく。西宮市立病院の前では、渋滞に焦りながら運転している自家用車が病院の中に入つていく。今思えば、おそらく負傷した家族を急いで運んでいたのだろう。しかしこの時までには、地震がどれほどの被害を与えていたかはまだ十分に分かつてはいなかつた。それが分かつた

のは、国道一七一号線を越えてからである。目に入つてきたのは、全壊した家々の惨状であつた。ここにきてようやく地震の激しさを実感した。あたりの凄惨な光景に目を見はりながら学校に着いた時には家を出てからかなり時間が経つていた。

外観を一瞥して学校はそんなに壊れてはいないようだった。しかし、中に入ると壁は大きくひび割れ、職員室の中は足の踏み場もないほどに本や書類が散乱し、頑丈な机さえも傾いていた。既に何人かの先生方が出勤し、事務室で電話の応対などに忙しそうであつたが、その日はすぐに家に戻つた。被害を受けてゐる生徒もいるに違ひないことは学校の回りの家々の状況から予想していた。福田斉子さんの家が土砂に埋もれてゐることを越前先生から聞いたのはその翌日であつた。家ごと土砂に埋もれてしまひ、一家全員まず助かる見込みはないということであつた。そのうちに福田斉子さんの近所の方が学校に来られ、遺体を確認できる人を警察が探しているということ、片山先生と一緒に仁川の現場に走つてかけつけた。しかし、既に遺体は安置所に運ばれた後で、もうそこにはなかつた。多くの家が埋もれていて、まだ土砂を取り除く作業は続いている。クラスの友人が目をはらして泣いてゐた。私たちを見つけて何か言いたそうだったが、口から洩れてくるのは嗚咽の声だけだった。私たちはすぐ学校に戻り、そこから自転車に乗つて、遺体が運ばれた西宮中央体育館に向かつてゐた。中央体育館は避難所にもなつていて、多くの人々が集まつてゐた。給水車には人々が列を作つて並んでゐた。安置所になつてゐたのは体育館の奥にある武道場だった。武道場の一つとにかく入つた。そこには多くの遺体が毛布や蒲団にくるまれて置いてあつた。遺体の横には遺族の人たちが座つてゐる。彼らの間を縫うように福田斉子さんの遺体を探し回つた。死者に涙してゐる遺族の姿はなかつたように思う。呆然として無言のまま座つてゐる遺族、何もなかつたように普通の顔で語り合つてゐる遺族、何よりも異様であつたのは、遺体の横で食事をしている遺族が少

なからずいたことだ。これは遺体安置所の光景ではない。避難所で家族が肩を寄せ合って座っている光景と同じである。死という非日常的な出来事の横で日常の生活が営まれていると言ってもよいような妙な光景である。我々の日常を突如襲った地震という非日常的な出来事は、我々の日常を侵蝕し、死という非日常的で特権的な出来事さえも日常化してしまったのである。死は生の彼岸にあり、生とは非連続な、生にとっては厳粛な出来事であるはずなのに、死が生と肩を並べて生の隣の手の届く所にある。これほどまでに死が間近にあると、逆に死の本来の姿が見えなくなってしまう。森厳たる死に対する感覚は麻痺してしまっているように私には思えた。いや、これは遺族がそうだったのではなく、自分の感覚を遺族に投影しているだけだったのだらう。実際に、家族を亡くして悲しみに沈まない遺族などはいはしまい。

遺体は見つからず、私たちはその場を離れ、二階にある別の武道場に入った。そこは新たに運び込まれた遺体の置き場になっていて、遺族らしい人の姿もまだ少なかった。「福田」と札の書いてある遺体を見つけた。人の死が満ちあふれている中で体を包んでいる毛布をはがすことにほとんどためらいはなかった。しかし、やはり死に顔を見た瞬間、先程死に感じた日常性は錯覚であることが分かった。遺体はすぐに福田斉子さんのものと分かる状態ではなかったが、厳然とした死の事実を前にして、胸は痛んだ。そこには、「福田斉子」という一人の人間の固有の死があった。何千人と死んでも、匿名性の死などは決して存在しないのだ。新聞は死者何千人と報道する。しかし、何千人の人が亡くなったのではない。福田斉子さんが亡くなり、Aさんが亡くなり、Bさんがなくなり、Cさんが……、というようにひとつひとつが固有の死であつたのだ。「何千人の死者」という言葉は、そうした固有性への想像力を奪ってしまう。その意味で、私は福田斉子さんの死を無念に思う以上に、その亡きがらに面会できた幸せを思いたい。自分にとってはたかだか大地震の恐怖を初めて体験したに過ぎなか

つた瞬間は、亡くなった人にとっては自然が揺れの恐怖や潰れた家屋に圧迫される苦しみといったものさえも呑み込んで暗黒の世界の彼方へと自分を運び去っていく、そんな自然の威力に身を任せざるをえない、私の時間とは極めて異質の時間でもあったはずだ。今回の地震における自分自身の卑小な体験をもってしては、福田斉子さんの死を語ることは何もできはしないが、少なくとも亡きがらに残されたその時の表情、人生を完結した最後の表情を私はいつまでも心に刻んでおきたいと思う。

二年九組 遠藤 浩輝

今までの様々な僕の思い出には必ずといってよいくらい秋山君が関わっています。

日曜スポーツクラブではサッカーをやっていました。とりあえず言葉では言い切れないほど弱かった。

少年野球チームでは松籟荘チームとして燃えまくった。サッカーにしろ野球にしろ僕も秋山君も特に練習好きで、朝から晩まで練習したこともよくあった。その成果が少年野球の試合で現れ、見事に準優勝、銀メダルを獲得した。(でも決勝は二十四対ゼロで大敗した) この少年野球の思い出は僕の今までの思い出の中で一番印象に残っています。中学に入ってもよく秋山君とは少年野球のことについて話したりしていました。

Jリーグが始まったのがちょうどこの年で、僕も秋山君もすっかりサッカーにはまってしまいました。秋山君はとてもいセンスがあり、僕なんかよりずっと上手でした。僕はクラブが休みの日などはよく秋山君の家の前の細い道でサッカーの練習をしました。時にははまりすぎて肉離れになったこともありました。あれは痛かった……。ほかにも本当にたくさん、言葉では言い切れない思い出があります。

今思えば、秋山君と最後に交わした言葉が何であったか気になります。

これはあまり良くないことかも知れないけれど、僕と田原君は今でも秋山君の死という現実を信じていません。信じたくはないというよりも、いつもいつも笑っていたあの秋山君の顔をもう見ることができないなどということがあるはずがないからです。

あいつの顔がひんやり冷たかった時、左手が固まってしまっ手が組めない状態であるあいつを見た時、今まで自分で必死に泣くな！泣くな！と思っていた心の糸が突然ぷつぷつと切れてし

まい、次第に大粒の涙でもう何がなんだか分からなくなりまして。何度も何度も声をかけたのにあいつは全然目を開けようとはしてくれませんでした。誰でもいいから秋山がどうしたら目を開けて、いつものあの笑顔を見せてくれるのか、本当に教えてほしかった。どうしていつもあいつだけがこんな目にあわなくてはないのか。僕は本当に神を恨みました。一体秋山が何をしようと聞きたかった。あいつは何も悪いことはしていません。誰もが断言できるはずですが。ただ、普通に朝起き、学校に行き、勉強し、遊びしてただけなのです。

僕は秋山君のような友達をもっていることを誇りに思います。これからも色々秋山君に迷惑をかけるつもりです。

二年七組 塚田 哲

地震があつた日からもう十カ月ぐらいになる。学校の帰り僕はよく建替え中の自宅を見て帰る。その自宅から秋山君の家があつた敷地が見える。ほとんど毎日見ている。僕があいつのことをことを忘れる日など一日もない。みんなはどうだろう。いつの日でもあいつのことを覚えていられるだろうか。時々あいつのことを覚えているのは自分だけではないのかとか、みんなはあいつのことを忘れてしまっているのではないのかなんてことを思っ気分が悪くなる。決してそんなことはないだろうに……。

少し前に古いアルバムを整理していたら、幼稚園の頃の写真が出てきた。僕と秋山君が二人で写っている。秋山君の顔は幼稚園時代も高校生時代も大して変わっていない。本当に面白いくらい変わっていない。正直いって、僕は幼稚園の頃を、この写真をとった頃も全然覚えていない。しかし、間違いなく僕は幼稚園の頃から秋山君を知っていた。

不思議に思うことがある。僕はあいつが本気で起こった顔を見たことがなかった。顔だけではなく温厚な性格も昔から変わるこ
とがなかったのではないだろうか。そういえば、僕が秋山君の性
格において一番に思うことは、優しさのある人間だったというこ
とである。それにいつだって明るく楽しく生きていたと思う。本
当にいい奴だったと思う。ごまかしなんかじゃないの。本当にい
い奴だった。だから決して僕があいつのことを忘れることなどな
いだろう。決して忘れることなどないだろう。

二年二組 田原 秀晃

あの地震の日から十カ月が過ぎた。それと同時に彼の姿を見な
い日が十カ月過ぎた。それまでは、毎日のように一緒に遊んでい
たし、実は地震の前日も彼の家で遊んでいた。その日の夜も、電
話で数日後に厄神祭にいく約束をしたところだった。それなのに、
まさか約束どころか二度と声も聞くことができなくなるとは思っ
てもみなかった。あまりにも急に一瞬にして消えてしまったので、
いまでも彼といた日々が昨日のことのように感じられるし、ひょ
つとするとまた姿を現わすのではないかと思う。最近になっ
て、僕がくだらないことを思いつくとまず彼に伝えたいと思うこ
とがよくある。そんな時はいつも涙が込み上げてくる。考えれば
考えるほど悲しくなる。あの日ほど自分が何もできない無力な人
間だと、むなしい気持ちになったことはなかった。「彼の将来を
返せ」と思った。

また彼と会って話したりできるのなら会って話したい。兄弟の
ように仲良く遊んでいた日々が帰ってくるのなら帰ってきてほし
い。そう今も思うし、その思いはこれからもきつとつきることが
ないと思う。

二年二組 藤田 洋平

僕と秋山君は、たった九カ月足らずの短い親友だった。高校に
入り、新しい友人ができていった。その中に、秋山君がいた。休
みの日になるといつも一緒に、朝早く池で釣りをして楽しく過ご
してことが一年も前のことだと思ふと、とても早く感じる。

一月十八日、何も知らずに秋山君の家の前で立っていた僕は、
おばさんに、「今までありがとう」と声を詰まらせて言われたと
き、僕は何が起こったのか、分かっていないにもかかわらず、そ
の場で泣き崩れてしまった。そしてまた、もう動くことができな
い秋山君との最後の別れをしたときも、心の整理ができずじまい
だった。それは今も変わらず同じだ。

秋山君は僕にとって、急に現れて、突然去ってしまう不思議な
存在だった。震災後の、この多少変化した生活に、秋山君が、再
び突然戻ってくることをよく想像する。すると僕は、何も疑わ
ず、秋山君を受け入れることだろう。

あまりにも身近かな人の死は、受けとめることができないこと
をこの震災で知った。

最期に、秋山君と同じ年に県西に入り、親友になり、他人より
多くの時間いろんな話ができたことが、いまはとても良かったと
思う。

*これは、震災時におけるPTA関係の記録を、当時の断片的なメモと薄れかけている記憶をもとに、日誌風に書いてみたものである。（震災当時、克明に日誌をつけておくべきだったのだが、当時は時間的にも精神的にもまったくその余裕はなかった。）従って思い違いや記憶違いが多々あると思うが、ご指摘下さればありがたい。

一月十七日（火）地震発生一日目

今回の地震を通して現代の通信機能のよろさを痛感した人は多いと思う。この日、学校が最初に直面した問題は、電話回線がパニック状態（早朝は機能していた。）のため、生徒の安否の確認はもちろんのこと、同僚の安否さえ全く把握できないということだった。特に、修学旅行中の二年生（十五日から十九日の予定で長野県竜王スキー場にて修学旅行中）の生徒および職員の留守家族の安否は、修学旅行先でも一番気になることであろうから、この確認をまず最優先しなければならぬはずだった。しかし、電話は全く機能をなさない状態でお手上げだった。この時、学校側も必死にダイヤルを回し続けていたが、生徒・保護者側も学校とコインタクトをとろうと必死にダイヤルを回し続けていたらしい。甲陵・甲武地区は学校の近くだから何とか被害状況も把握できるし、神戸・芦屋地区もテレビなどの報道で推測できるが、山口・塩瀬地区との通信途絶は、何と言っても不気味だった。「山口・塩瀬はどうなっているのか。ひよつとして壊滅状態ではないのか」という恐ろしい想像も頭に浮かんで来たりした。

そんな時、わが家のことも顧みず、「何かお手伝いできることはありませんか」と一番に学校に駆けつけて下さったのが和泉P

TA会長親子だった。その日一日和泉会長は自宅から携帯電話を使って山口・塩瀬地区のPTA役員に何とか連絡を付けて下さったのである。（家からかけるより、公衆電話や携帯電話でかける方がかかりやすいらしいという噂は地震直後から流れていたが、事実だったらしい。後日、電話帳に「災害時に電話がかかりにくくなった場合でも、黄色・グレー・緑色の公衆電話からは、かかりやすくなっています」という項目が載っていることを初めて知った。）こうして私たちが山口・塩瀬地区の被害が比較的軽微だったのを知ることができたのは翌日のことであつた。

一月十八日（水）地震後二日目

修学旅行団が予定を大幅に繰り上げて、夜八時半に長野を出発することになった時、「こちらは水も食べ物もないし、ガスもないし、余震の心配さえあるのだから、もう少し向こうでホテルに滞在しておく方がよほどいいのに」とみんなが本気で思ったものだ。なによりも心配されたのは、帰着時間が全く想定できないことである。高速道路はこの時点で全国からの救援隊で埋め尽くされていた。ある学校は十七日に長野を出発して神戸に到着するまで、まるまる二日近くかかったという噂も入ってきた。学校に到着しても家に帰れない生徒が出てくるに違いないということで、同窓会館に百人程度が泊まれるだけの宿泊準備をしておかなくてはならなくなった。布団は備え付きのものが四十人分程あるから何とかなるのだが、問題は食料である。山根事務長が何とか手配しましうと言つて下さったが、大変なことだったに違いない。何しろ、私たちも三食インスタント食品しか口にしていないような状況だったのだから。

一月十九日（木）地震後三日目

驚くべきことに修学旅行団が朝八時半に仁川に到着。何と約十二時間で帰って来たということになる。私たちは、少なくとも到

着は、その日の夜になるだろうと踏んでいただけに、この時の早さには本当に驚いた。早朝に着いたということもあってか、大半の生徒は何とか昼過ぎまでに、自宅もしくは避難先に帰っていた。最後の一人も夕方に家族の方が引き取りに來られて、結局、その日学校に泊まる生徒はゼロということになり、私たちもほっと一安心した。ところがその夜のことである。前日、同窓会館に生徒が百人程宿泊するかもしれないということを事務室で聞いておられた和泉会長が、そのことを連絡して下さったらしく、山口地区の保護者十数名（生徒二名、卒業生一名を含む）が車三台を連ねて、同窓会館に宿泊する生徒のために、おにぎり千個分をはじめ、水・肌着・医薬品などの救援物資をどっさり届けて下さったのである。（千個のおにぎりについては、十五軒の方が炊き出しに協力されていた）この時、盤滝トンネルは地震のために通行止めになっており、道路に岩が落ちたままで二次災害の恐れもある船坂峠を二時間近くもかけて來られたとのことで、本当にありがたかった。この時のことは、今思い出しても胸が熱くなる。たぐさんの救援物資を前に、「早速、体育館の避難所の方へ回します」と言うと、常任理事の八上さんが「いいえ、これは先生方が使って下さい。先生方が元氣を出さなければ、子どもだって元氣が出るはずがないじゃありませんか」とおっしゃった。教師が元氣を出さなければ生徒も元氣が出ない。私はその後、震災のことで気持ちが萎えそうになる時、この言葉をいつも思い出すようにした。

一月二十日（金）地震後四日目

震災後初めて生徒向けに「登校可能な人は、二十三日午前十時に登校のこと」の指示を出す。山口・塩瀬地区に対しては、卒業生の梨尾さんのご好意で連絡網を回していただけたことになった。その他の地区に対しては、一応テレホンサービスにも入力したが、電話がほとんど機能していないため、職員が手分けして掲示板や

ローソンなどに貼り紙を掲示することにし、甲東・甲武地区の掲示は片山・福田・乾・勝野先生に、船坂地区は神戸市北区へ車で帰宅する竹中貴子先生にお願いした。

一月二十一日（土）地震後五日目

昨日の指示に対して早速、塩瀬・山口地区のPTA役員一同から「現在、山口午前五時始発のバスがJR名塩に八時に着く状態である。たとえJRにたどりついて、三田駅で既に多く積み残しが出ている状態で、まして道場駅や名塩駅ではとても乗ることはできない。しかし、子どもたちの中には自転車に乗ったり、歩いてでも学校に行くという者が大勢いるようである。親からすると危険なので、当地区については、安全な交通状態が確保されるまで自宅待機するように指示を出してもらえないか」との要望が入る。学校側としては、阪急今津線が不通だから、山口・塩瀬地区の生徒は当然「登校可能な人」の範疇には入れていなかったのであるが、生徒からするとあの文面では「何としても学校に行かなくては」と思うらしい。それに、一刻も早く友達の安否を自分の目で確認したいという気もあったのだろう。でも考えてみたら、私が高校生でも（冒険心もあって）やっぱり無理をしても登校したかもしれない。その後何回か山口地区の役員と打ち合わせした後、昨日の補足として「昨日の連絡の『登校可能な人』というのは『通常の登校手段で登校可能な人』の意味です。したがって、無理をして自転車・おうちの方の自動車などを利用したりして登校する必要はありません。通常の手段で登校できない人（特に山口塩瀬の人）は自宅待機しておいて下さい」との掲示をさらに張りだすことにした。この例でもわかるが、その後も簡単な指示を出すこと一つに対しても、実にまだるっこしい手間がかかるのは閉口した。しかも県西の場合、生徒の居住範囲は、芦屋・神戸・明石・加古川・高砂・姫路・西脇など広範囲に渡っており、これらの地区の生徒への連絡は、テレホンサービス以外、事実上手つ

かずの状態であり、後日それらの地区の保護者から「震災時の連絡方法について、何とかならなかったのか」という苦情をいただいた。確かに現在、クラス別の連絡網はあっても地域別のものは県西にはない。地域別の連絡網は作るのも大変だろうし、作ってもめったに使わないだろうが、地区を細分化して一度系統図みたいなものを作っておけば、翌年以降は案外簡単に作れるものかもしれない。非常時に備えて検討の余地はあるのではなからうか。

一月二十三日(月)地震後七日目

地震後初の登校日。登校者五一三名、欠席者六七四名。(一・二・三年生)

この日、山口地区ではPTA常任理事が集まり震災対策会議を開いたらしく、山口地区の被害状況・学校に対する要望などを連絡してきた。その際、今後山口・塩瀬地区への連絡は、藤本さん宅のファックスを利用してもらうてよいとのありがたい申し出があった。早速、この日登校した生徒に配布したプリント「保護者の皆さんへ」「生徒の皆さんへ(兵庫県南部地震災害に対応すること)」を、藤本さん宅へファックスで送り、塩瀬・山口地区への連絡を依頼する。(と書けばいかにも簡単だが、電話のパンク状態は依然続いており、一枚のプリントを送るのに何十回もダイヤルを回さなければならなかった。しかし、ファックスはまだまだ普及率が低いものの、正確な情報を送るという点では大いに将来性があるということが今回の震災でわかった。)

一方、毎日連絡を入れるはずだったテレホンサービスがこの日から調子が悪く、何回やっても入力できなくなってしまう。修理を依頼するにも、電話が通じないのだからどうしようもない。テレホンサービスだけが唯一の情報源の生徒もいるのに、弱り目にたたり目である。(後日、業者に調べてもらったところ、機械には何の異常もないと言われた。機械に弱い私が操作を間違えていたのかもしれない。)

一月二十五日(水)地震後九日目

山口・塩瀬地区のPTA役員の「センターテスト受験者の二次出願に対する指導をしていただけないか」という依頼があったこともあり(塩瀬・山口地区以外のセンター受験者のほとんどは、登校して担任の指導を受けていた)、三年学年団の先生方(谷垣学年主任・磯村・片山・石田各先生)と車三台を連ねて、朝学校を出発し、山口町へ向かう。(尾川先生は茨木の自宅から直接参加された。)盤滝トンネルは依然通行止めのため、船坂峠を通過して行く。途中今にも崖崩れしそうな箇所や大きな岩が道路に落ちていく箇所があり、地震のすさまじさを見せつけられた。しかし峠を越えると、青のビニールシートをかけている家はごくまれで、いつもと変わらぬのどかな田園風景にほっとしたのを覚えている。会場の北六甲台センターには、三年生を中心に生徒が約三十名程集まっており、お互いの無事を喜びあつた後、受験生たちはそれぞれ熱心に個人指導を受けた。石田先生はコンピュータを持参し全員の個人データをプリントアウトしていた。この日、保護者の方のご好意で昼食にほかほか弁当が出たのだが、久しぶりの温かいご飯であり、この日ほどほかほか弁当がおいしく思えたことはない。また、トイレで水が自由に使えることに思わず歓声をあげ、保護者の方に笑われるというようがあった。

また、驚いたのは、先日学校が送ったファックスを保護者・生徒が協力して、山口中学で印刷した上で山口・塩瀬地区の生徒宅に全戸配布していたことである。また、これからのことに備えて、山口・塩瀬地区の回覧板方式の連絡網が完璧に作られていたということだ。北部地区が陸の孤島化されているということで、学校側としても塩瀬・山口地区の地区別連絡網を作る作業を進めていたのだが、先を越されたわけである。お母さん方のパワーをまざまざと見せつけられた。この時の保護者との打ち合わせで、今後の連絡法について以下のことを決めた。

一、山口地区については県西から藤本さん宅へファックスを送

り、その後電話を回す。

二、塩瀬の赤坂・みどり丘・グリーンハイツ・生野高原の各地区については県西から岩野さん宅へファックスを送り、その後電話を回す。

三、塩瀬の残りの地区（東山台・南台・東久保・生瀬・武田尾生瀬高台・木ノ元・名塩・名塩ガーデン・すみれ台・清瀬台・名塩南台・茶園町）については県西から塩瀬中学へファックスを送り、それを松原さんが取りに行き、その後電話を回す。（後日、塩瀬中学はこの件を快く了承して下さった。）

またこの日、会場の二階で理事会の竹下元君・成重千里さん（ともに二年）をはじめとする生徒有志十数人が、地震で被害にあった友人のために自分たちで何かできることはないかということと、自主的に集会を持っていたのも嬉しいことであった。この後、彼らは義援金の募金活動を計画し、それを実行したのであるが、この募金活動に参加した山口・塩瀬地区の生徒は総計百六名（一年四十一名、二年六十五名）、募金総額は百六十一万円にも及んだ。この間、学校には、「高校生らしき者が募金に来たが、本当に県西生なのか」「この募金活動は学校が生徒を使ってやらせているのか、もしそうなら即刻やめさせるべきだ」などの問い合わせや苦情電話が連日十本ほどかかってきたので、私も竹下君を呼んでどういうやり方をしているのか聞いたのだが、生徒たちは、PTA役員にも相談をして彼らなりによく考えた詳しい計画書を作っており、その作られたマニュアル通りにやっていたとすれば特に問題はないように思われた。ただ、実際に百人も動いているので、その末端でマニュアル通りに動かなかった生徒もいたのだろう。その後、かかってくる電話に対しては「生徒が純粋な気持ちで自主的にやっていることなので、不備なところもあるでしょうがご理解をお願いします。ただ、おかしいことがあったらどんどん注

意してやって下さい」と答えることにした。たいていの方は「そういうことなら喜んで協力しましょう」と言って下さったが、中には途中で一方的に電話を切る方もおられた。募金活動終了後、彼らは募金とともに十六ページにもわたる詳細な「阪神震災義援金募金活動に関する報告書」なるものを学校側に届けてくれた。やり方に未熟さはあったかもしれないが、彼らなりに、実によくやったと思う。彼らにとつてこのことは、いい社会勉強になったに違いない。その後彼らが集めた募金は、県西の被災生徒及び西宮市災害対策本部へ寄付された。

一月二十八日（土）地震後十二日目

地震後二回目の登校日。登校者三五四名、欠席者四四二名。（一・二年生のみ）

この日配布されたプリント「保護者のみなさまへ」「授業再開について」の二枚をファックスで山口・塩瀬へ送る。

一月三十日（月）地震後十四日目？

山口・塩瀬地区のPTA役員約十名の方が、われわれ教職員を励まそうということで、突然、鍋・釜持参でわざわざ県西まで来校され、おでんの昼御飯を作って下さった。昼はほとんどの教職員が救援物資のインスタント物ですますという生活を続けている最中だったので、この暖かい心遣いには本当に感激した。

（注）これが本当に三十日だったか、PTA役員を含めていろいろな人に聞いたが、不明のままである。

二月十七日（金）地震発生一カ月目

一週間ぐらい前に山口・塩瀬地区のPTA役員の方から「前回のおでんの時は全員おられたわけではないので、今度は全員おられる時に炊き出しをして先生方を励ましたい」というありがたい申し出を受け、今回は丁重にお断りしたのであるが、どうしても

ということ、厚かましくもまたご好意に甘えることにした。この日は約十名のお母さん方が来られて校務員室で料理をして下さった。メニューは、五目飯・豚汁・サラダ・揚げポテトという超豪華メニュー（村津先生のメモによる）だった。温かい食べ物というのは、不思議に人の心まで暖かくしてくれる。この日の職員室のみんなの表情は久しぶりに明るかった。

『あの一瞬からの県西PTA』

平成7年度PTA会長 八上 弘子

〔PTA中枢機能も壊滅的〕

平成七年が特別な予感のないままにごく普通に明けて、年始気分にしる髪を引かれながら、一月十三日定例常任理事会が開かれ、平成六年度の終章に向けた準備が進められようとしていた矢先、阪神・淡路大震災に見舞われたのでした。

あの朝、誰もがかって経験したことのない地鳴りと揺れとで、暗闇の中にたたき起こされ、時の経過とともに、衝撃的な渦中にいる事を知らされておりました。とにかく、身の者の安否を確かめ、死線を取敢えず越えた実感だけがあるのみで、先ず、生きるために目の前のことに体を動かすこと、それはさながら戦いとも思えるものでした。

PTAの中枢を担う人々にも、当座はお互いの生死すら確かめる術もないまま、PTAの存在すら脳裏に浮かべる余地などあるはずもなく、学校の様子を知る意志さえ、生活を成り立たせなければという思いに比べれば、後手であったと記憶しております。そのような中で、一月十九日、修学旅行中であった高二の生徒たちを、全員無事に迎えた山口地区では、帰宅した生徒を通じて、仁川で別れた学友たちの中で、親元の避難先が不明のため、帰りに着く先が決まっていけない人がいるということを知られました。大部分の家庭が取りも直さず無事であった山口地区では、旅の疲れを癒すどころか、不安で心落ち着かない思いの一夜を、学校で過ごさなければならぬ生徒たちのために、せめて取急ぎ夕食だけでも届けようと連絡を取り合い、行動が開始されました。

〔地割れの峠道を越えて〕

続々と、おにぎりや飲料水や当座の食料等が届けられ、有志の

父親や、大学生のご子息、学校の状況把握を望む生徒たち等で、車数台のキャラバン隊が出来上がりました。数年前に完成した南部と北部をつなぐトンネルは損傷がひどく不通で、崖崩れや地割れの峠道を越え、余震の不安を打消したり、覚悟の程を互いに語り合いながら、数時間がかかりの行程であったことが思い出されます。

夕闇の中で目にした学校の惨状は息をのむ状況で、疲労の限界を越えた表情の先生方のお顔を、今も忘れることは出来ません。そして、その被災状況や、又、PTA総務役員や常任理事の多くが被害を受け、被災生徒が数百名にも及んでいることなどが伝えられました。一方、北部の多くの人々は、実感として学校や南部の把握が不十分なため、登校への意志は強く、余震の警戒の解けない中で、自転車での峠越えの登校計画や、自家用車による送迎などの話が行き交ったり、常任理事への問い合わせなど、南部とは異なる混乱が発生しておりました。

〔PTA年度末対策委員会設置〕

北部の常任理事は、それぞれが何らかの対応に迫られたことや、動けるものが出来ることをしなければとの思いに至り、PTAの地区組織を有為に活かす取り組みを始めました。

悲惨な総務の方々の様子を耳にし、自らの地域活動を進めるため会合を重ねるうちに、総務を補う役割を模索しながら、総務役員との共通認識の確認が計られ、PTA年度末対策委員会設置へと発展いたしました。そこで、活動停止で発生した年度予算の残金を県西関係の被災家庭への見舞金とすることなどを決めて、決算処理や検討途中の課題処理や、引継ぎの諸作業に当り、PTA活動の空白は、さほどの障害にはならず、新年度体制に全く滞りなく橋渡しが出来ました。

〔平成七年度につないだ糸〕

未曾有の災害を受け、完全復興には数年を要するという学校にあつて、PTAに何が出来たのか、大袈裟に言えば、その資質が問われる時でもあると思えます。

先ず、身近な課題として被災家庭への会費の免除、全国PTAから寄せられた義援金の使途などについての検討、主に会計上の対応が中心にすすめられております。

仮設校舎が立ち並び、施設面では安定した環境が望めない状況で、補習授業維持のための先生方との話し合いや研修活動の充実など、ソフト面での取り組みが続けられています。

一時、価値観の変化を多くの人々が語り合っていました。震災で得た教訓が本当の意味でPTA活動に生きることが願い、次年度への引継ぎ作業を進めてまいります。

「山口地区PTAの取組み」

平成六年度山口地区常任理事 赤羽 志津子

何事もなかったの様に季節はめぐり、「阪神大震災」から、一年近くが過ぎ去った。

あの朝、「ドーン」という強い衝撃音と、激しい横揺れで、目を覚ました私は、棚から本やカセットテープが崩れ落ち、不気味に家がきしむ音を聞きながらも、何が起きたのか、とっさの間、把握できなかった。あわてて廊下にとび出すと、揺れで開いた窓からの冷気を、素足に感じた。すでに停電になり、暗闇に包まれた中で、あたりは、不思議なほど静まりかえっていた。手探りで懐中電灯を探しあて、トランジスタラジオをつけると、「淡路島」を震源とする地震が、「五時四十六分」に発生した事を報じていた。

アナウンサーが、やや緊迫した声で、「皆さん、落ち着いて行動してください」と、何度も繰り返し続けたのが、印象的であった。夜が明けるのを待って、家の内外を点検したが、被害はさほど大きくない様だった。割れた食器を片づけながら、何をすべきかを考え、まず、食事だけはと、簡単に朝食を済ませた。しばらくすると、遠方の親戚や知人から、お見舞いの電話が入りはじめた。そのうち、電話もパニックになり、全然通じなくなってしまった。それでも、夜までには電気も復旧し、ガス、電気、水道のいわゆるライフラインは、確保できた。地震のすごさを知ったのは、夜になってからで、テレビを見た時、言語に絶する被害の大きさに、悲しみと、やり場のない憤りを感じた。何故、こんな理不尽なことが起きてしまったのだろう。

活発な活動を展開した。その為に要した日数は、延べ十日ほどだっただろうか。理事の中には、親戚や知人が大きな被害を受けた人もいたが、少しでも何らかの役に立ちたいと、一同で頑張った。大勢の子ども達も、友や県西を思い、粉雪の散らつく中を、義援金集めに奔走した。

春が過ぎ、初夏が近づいた頃、私自身も仮設住宅の訪問など、ボランティア活動を始めた。最近では「もちつき大会」などの行事にも参加したが、寒い冬を迎え、その胸中を察すると胸のふさがる思いがする。

何十秒かの揺れによって、運命を変えることを余儀なくされた多くの方々。自然の脅威の前には、「人」は小さな存在でしかないかも知れない。しかし、そうであるなら、なおさら英知を結集して、被害を最小限に食い止めたい。私たちには、「阪神大震災」の教訓を風化させることのない様、個人として、組織として、何ができるのか、また、何をなすべきなのかを考え、次代に引き継いでいく義務がある。といま改めて思う。

県西も多大な被害を受けたにもかかわらず、子ども達は、落ち着いた学校生活を、送らせて頂いている様です。先生方をはじめ、皆様のご努力に対して、心からお礼申し上げます。

震災後、山口地区では、常任理事を中心に、連絡網の作成、三年生の進路相談の呼びかけ、炊き出し、義援金集めの手伝いなど

「震災をふりかえって」

P T A地区部理事 岡本 順子

「震災の記録」ということで、原稿を書く機会をいただいて当時のことを振り返ってみると、あれから十一カ月が過ぎた今、日付通りの細かい事は思い出せないことが多い。一番鮮明に浮かんだのは、震災後六日ぶりに入ったお風呂で、「ああ、人間にもどった!」という、しみじみとした気持ちになったことです。体験した人すべての感想だと思えますが、本当にあの数十秒の揺れがすべての日常生活を奪い去ったのです。

沈黙していた電話がポツリ・ポツリと受信するようになったのがいつだったか……、十九日の午後に和泉会長から子どものクラスとの連絡を頼まれたということは、その頃には復活していたのでしょう。クラスの生徒の安否と二十三日の登校に関する連絡が目的でしたが、まだまだ一本の電話をかけるのは大仕事でした。一年と三年に在籍していた我が子のクラスの連絡を引き受けたことが、つながりにくい電話との戦いの始まりでした。十九日は深夜三時すぎまで、翌朝は五時すぎから受話器を握り続けていたと思います。「どうかつながって下さい!」と願いながら……、呼び続けていた電話に「どうか出て下さい!」と祈りながら……。電話がつながらないことより、鳴り続ける電話に応答のないことの方が私の気持ちを重くさせてしまいました。そんな電話との格闘の結果を一覧表にして子どもに学校へ届けさせました。どうしても連絡のつかなかった人が何人かあった様でしたが、それ以上はどうすることもできませんでした。連絡できない家に、何度も何度も電話しながら名簿を見ていて、近くの人だった子どもにも確認に行かせる事もできましたが、一年生の方は商業科なので、それをするにはあまりにも広範囲でした。

現在、県西のP T Aは地域別（主に出身中学校区別）に理事を

選出しています。私は地区部の部長をしていましたが、うかつなことにあの電話をかけているときも自分の立場まで思い至りませんでした。「地区毎にきちんと名簿があればもう少し何かできたのでは……」と考えたのもずっと後になってからでした。小・中学校は校区の範囲が狭く、状況を足で確かめることもできますが、高校になると当然校区は広がり、おまけに県西の場合は、音楽科・商業科があり、電話に頼らざるを得ません。しかし、今回のように大きな災害となると電話が機能しない事態に陥ってしまいます。当時も、すべての人が情報を待っていました。生活に密着した情報は自分の足と目と耳で集めるしかありませんでした。混乱期の不安を解消してくれたのはマスコミ情報でなく、すべて口コミの情報でした。

一カ月が過ぎてP T A活動が再開した時、私は山口・塩瀬地区での連絡網作り等のことを聞きました。学校からの連絡をスムーズにする連絡網作りも、足で廻れることを念頭に置くとかかなりの苦労があったようです。そして、慣れないこととはいえ連絡網を使つての伝達もなかなか大変だったようです。六月になってP T A地区部で「いきいきトーク」を開催した時、避難所にいた頃、県西の状況がわからず苦労されたことについて話された方がおられました。先生方もまた地域の様子がわからず、県西からの情報のチラシを貼る有効な場所がつかめなかった事を反省点とされていきました。先にも書きましたが、あの頃の生活に必要な情報は口コミに頼っており、被災者の多くは地域のつながりの大切さを考えていました。行政や市民団体などいろいろな場で地域を見据えた取組みがされているようです。県西P T Aでも、理事が地区毎に選出されていることを生かしての活動を考えてみる必要があるのではないのでしょうか。二度と起つてほしくない事ですが、あの災害を体験した今だからこそ、一歩踏み込んで話し合っておかないといけないことだという気がしています。

『震災をふりかえって』

P T A 広報部 原田 美智子

まさか 関西に。生まれも育ちも嫁ぎ先もここ西宮で、「阪神間ほど住み良いところはないわ。災害はないし、環境はいいし……。」 私にとって自慢の一つでした。

ところが、あの朝、この大好きな地が牙をむき、大きなうなり声をあげて激しく揺れました。お弁当のおかずを作ろうと、コンロに向かっていた私は、ごう音と衝撃で持っていたフライパンも吹っ飛び、立つことも歩くこともできず、暗闇の中、声で家族の無事を確認し合いました。夜が明けてくるとともに、信じられない光景を目の当たりにし、地震の恐ろしさを痛感しました。余震に怯えながら家族や近所の人たちと協力して、倒れたブロック塀や道路を塞いでいるガレキの片づけに頑張っていました。

昼過ぎ、「実家の両親が……。」の知らせに体中の力が抜けてしまいました。「しつかりしろ。」と言う主人の言葉に支えられて、自転車でかけつけました。この時、結婚以来初めて「九州とか四国とか、もっと遠ければなあ。」と身勝手な思いが頭をよぎりました。生まれ育った家を見るも無残に壊れ中に入ることも出来ません。

日暮れ前、やっとガレキの中から父母が……。二人とも眠っているようで、今にも起き出しそうな穏やかな顔でした。でも、手も足も残酷なほど冷たく、もう二度と動かないことを悟りました。前日電話で「じゃあ、またね。」と言ったばかりなのに、嘘みたいで悲しいと言うより、父母とのこんな別れ方に戸惑うばかりでした。

ライフラインは途絶え、心にも大きな穴がポツカリ空き、白黒の世界に迷い込んでしまった気がした時、家族の暖かい心遣い、友人・知人の励ましにどれほど勇気づけられ、嬉しく感じられた

ことでしょう。皆が送ってくれたエールに応えるためにも、今後しっかりと生きていこうと誓いました。

息子がぼつりと「おかあさん、命なんてはかないね。だから生きていることは素晴らしいんだね。」と言いました。子ども達もこの震災で大変な体験をし、一番大切なことを学んだのだと知り、胸が熱くなりました。

あれから十一カ月、ガレキの山は空地になり、周囲の風景も変わりました。震災で多くの物を失い、多くの人々が辛い思いをされました。そんな悲慘な中、人間の暖かい真心に支えられ、復興へ向けて立ち上がろうとする人々の力強さを信じ、私も皆と共に頑張りたいと思います。

奈良県立奈良高校 三年 伊藤 ひろみ

(雑誌「FOR YOU」掲載)

一月十七日、私は修学旅行（県立西宮高校）中だった。朝食時に先生から阪神地区に大きな地震があったと知らされたが、その時私はまだ事態を楽観視していた。しかし、時間がたつにつれてどんどんひどくなり呆然とした。行き慣れた神戸が燃えていた。家に近くも映し出された。死亡者の数が激増していった。真っ青になつて公衆電話に駆けつけたが通じない。それでも何度もかけに行つた。友達の中には近所の人や亡くなつたり、家の全壊を知らされた人もいた。また、テレビの死亡欄で知り合いの名前を見つけた人もいた。私はそんな彼女たちを見て、慰めの言葉も見つからなかった。いつも不安にかられてどうしようもなかった。こんな中、周りに先生や友達がいるのがどれほど励みになつただろうか。これは言葉では言い尽くせないほどである。

しばらくして「全員無事。周りの家崩壊。今大阪にいる」という短い連絡が先生を通じて入ってきた。全員無事というのは本当にうれしかった。ただ大阪にいるといわれてもまったく心当たりがないため、帰ってから家族に会えるだろうか、という不安も生じてきた。

西宮に帰る途中、救援物資を乗せた車に次々とすれ違った。このとき本当に被災地に帰るんだんという実感が伴った。そして、家の前に来るとまさに風景が変わつていった。私は西宮市甲東園に住んでいたのだが、駅の周りの商店街はどこが歩けるのか分からない状況だった。壊れた家には「全員無事」か「忌」の張紙がしてあり、街にはほとんど人がいなかった。私が家族と出会えたのはそれから数時間後である。

そして、なんとか無事だった家で、電気、ガス、水道のない暮らしをしたが、数日後配水管が壊れた。マンションでこれが起ると暮らせなくなる。やむなく奈良に引越した。

約六千人もの死者を出した地震。その中には一家全員亡くなつた先輩や弟の同級生も入っている。いったい誰が自分の命が今日までだと思つていただろうか。まさに無常である。

あれから八か月。久しぶりに神戸に行つた。あまりの復興の早さに驚きを感じた。電車などが予定よりずっと早く立ち直つたのは、生き残つた者が亡くなつた六千人のことをいつも念頭において頑張り続けたからだ。私は信じている。私のこの地震に対する思いは、この紙面だけではとても言い表せない。だが、とりわけ述べたいのは、十七日の朝から今日までの間に、私を励ましてくれた数知れない人たちである。西宮の友達、他府県に住む友達、そして私たちのことをまず第一に考えてくださった先生方、奈良に来てからの友達や先生。私は今本当に感謝の気持ちを伝えたい。また、この地震からの復興は、外面上どんなにひどい状況でも、人間は意欲さえあれば前進できることを教えてくれた。

長い人生の中、逆境はいろいろあるかも知れない。その時はこのことをいつも思い出し、一歩でも前に踏み出したい。

『魚を配るおばさん』

二年 仁井 泰 久

震災後（一日後くらい）電気が復旧して、テレビを見たときのこと、どこかの商店街で元氣そうなおばさんが、地元でとれた魚を焼いて（もちろんガスも電気もない中であつたので炭火を使つて）、声を大きく周りの人々に「辛い時はみんな一緒や」というふうな言葉をかけながら、焼き立ての魚を配っているのを見た。もちろんお金はとらずにである。一瞬、魚の香ばしい香りが伝わってくるようで、とても感動した。自分は家の中で、カセットコンロもあつたので、とりあえず食べることはできていたので、それまでわからなかったが、食事ができることの有り難さというものを少しであるかもしれないが理解できた。すぐに画面は他のニュースを伝えていたので、ほんの十数秒の出来事ではあつたが、とてもうれしく思った。その後、しばらくして宝塚の駅の付近の見慣れた商店街のニュースになつて驚いた。水が出ないということに目をつけたと思われるが、小さなポリバケツが一個三千円だか六千円だか売っていると怒りながら話す人がいた。魚を配るおばさんのことを思い出して、「ここまで違うものか」と落胆した。その他、テレビ・新聞で見た人々にも、心のきれいな人と、心の汚れた人との差が見えるようで、やりきれない気分になつたのがいまでも心に残っている。

『その時』

二年 川谷 昇大

僕はその時、その瞬間目を覚ました。その直前、何かいつもと違う夢の中にいたのだ。夢の中は真暗で、その中で僕は震えている。その日付は一月十七日だつた。夢の中の今に時刻は五時を回つたところだ。そして……。僕は必死に自分がとばされるのを防いだ。

『ゴゴゴゴ……』という無気味な音に、思わず首をすくめた。始めの軽い揺れで「いつもと同じか」と思っていたが、本当に一気にきた感じだつた。そして、親が必死に叫んでいるのを聞いて焦りが出そうだったが、こういう時こそ冷静にならなくてはと思ひ、まず懐中電灯を探した。しかし、電池が入っていないかつた。とても焦つた。「落ち着け、落ち着くん」そう言い聞かせ、考え、思い出した。以前ちっちゃなライトをゲームの景品で当てたことを。そしてそれを探し当てたが電池が入っていない。単三電池ならどこかにあるはずだ。机を開けようとした。開かない。僕は力づくで引き出しを開け、微かな空間に手を入れた。指が電池に触れた。もう少し、もう少し……。やつと取れた。しかし見えないのでプラス・マイナスが見えない。一度失敗し、二度目に成功した。ドアを開けようとする。しかし本が邪魔でなかなか開かなかった。出た瞬間、割れた食器があつた。こんなところまでとんでいるなんて。

なんとかみんなと合流できた。夜が明けて様子を見ると、食器棚が倒れている。テレビが落ちている。タンスが倒れている。何もかもメチャクチャだ。そとは……？ 隣の家は潰れている。道路もビクリ。一夜にしてこんなになるとは思つてもみなかった。ぼくは、この地震を通して、電気の着かない不安さ、水の出ない不便さ、とてもよくわかつた。

三年 宮地 亜衣

ニュースで地震があったことを聞いたときは、あまりたいしたことではないのではと思っていました（修学旅行で信州竜王スキー場に滞在中）。でも続けてテレビを観ていると、悲惨な状況が映し出されて、とてもショックを受けました。それと同時に、家族のことがとても心配になりました。心配で心配で、いてもたってもいられなかったけれど、電話はつながらないし、帰ろうにも帰れない。何回か電話をしてつながり、家族の無事が確認できたときは泣きそうになってしまいました。修学旅行から帰っても、私の住んでいるところはほとんど被害がなかったので、いつも通りに生活ができました。でも甲東園のあたりに住んでいる友達のことを考えると、何か落ち着きませんでした。

2週間の休校の間、募金活動をしたりしました。雪の中を歩いて集め回りました。とても寒いし、雪はだんだんひどくなってくるし、途中でやめたいと思ったけど、避難している方々のことを考えると、「あーがんばらな。寒い思いしてるんやわ。このお金で一人でも多くの人が助かるんやったら」と思い、最後まで続けることができました。募金活動をして、いろんな人と触れあうことができたと思います。一軒一軒家を回りました。ほとんどの方が「寒いのにご苦労さん、がんばってね」と言い募金してくださいました。中には、雪が降っているからと言って、傘をくださる方もいました。その時、なんでかわからないけど、人っていいなと思いました。助け合っている言葉や行動が、すごく好きになりました。まだ不自由な生活をしている方がたくさんいます。それをニュースで見る度に、何もできない自分が腹立たしく、もどかしく感じます。たくさんさんの命を奪った地震。めちゃ悔しい。めちゃ腹が立つ。新聞読むと涙がぼろぼろ出てくる。くそ！。今私の気持ちを表わすところな感じです。これから、まだまだ大変なことがあるけど、がんばろうと思います。

三年 岡野 晶子

今回の地震があったことを修学旅行に行っている時に聞きましたけど、実際自分が揺れを体験していなかったで、被害の大きさに気がつきませんでした。けれど、テレビで何度も見ていくうちに、まず家族のことが心配になりました。そして、電話をかけてもつながらなかった時、本当にすごく心が動揺して、「死んでいたらどうしよう。もう二度と両親や姉に会えなくなったらどうしよう。」と心配で心配でもう本当にどうしたらいい分からなくなりました。でも結局みんな無事でけがもなく生きていてくれました。そのときすごく安心できました。

今回の地震で家族をなくした方は、どんなに悲しく辛い思いをしたのだろうか？ テレビで両親が家の下敷きになって死んでしまった女の子の映像が映されていました。遺体が見つかったときその子は、腰が抜け、悲しみのあまり今にも倒れそうでした。それを見たとき、このような人が何万人もいることを思うと、自分は幸せだなと思いました。家族の大切さが身にしみた感じを受けた。すごく普通の生活をしていた時は、「学校休みたい」とか、「もっと食事とかいいもの食べたい」と思っていたけれども、そう思っていたことはすごくぜいたくなことで、わがままだったと考え直されました。いつも幸せすぎて欲が出ていたのだと思います。地震のことを忘れないように、家族を心配していた気持ちを忘れないようにしたい。

『遙かなるあなたへ』（「ジャコメッティとともに」を読んで）

一年 上村 真利衣

（兵庫県学校図書館協議会
県読書感想コンクール 優秀賞受賞作品）

三十度傾いたわが家から、必要なものだけ、と運び出された最小限の荷の中にこの本はあった。あの阪神大震災は、私の家を直撃した。生活に無縁の本類は真っ先に見捨てられるなか、くしくもこの「ジャコメッティとともに」が、必要と判定されたのは、それが二十年前に亡くなった祖父のものだったから。表紙の彫刻家の眼はすぐに私に話し始めた。私は震災後、仮住いにいるので、個室はなかったけれど、ジャコメッティを読むと、いつも簡単に孤独になった。そしてその孤独は心地良く、彼の言葉を心に刻んで過ごした。でもそれは難解で、たった一語に一日悩まされたこともある。あるときジャコメッティは問いかけてきた。「指さす人」という作品について、「これは初め、二人の人間を組にして作ろうとしたのだが、もう一人の方はどうしてもできなかった。この横にもう一人おくことは絶対に不可能だ。絶対に。」と。これは悲しいけれどすぐに解けた。私は震災直後に二度、人間の孤独を見ていたから。一度目は西宮の駅から集団で向かってきた。それは知人の災難にいち早く駆けつけた人の流れで、皆一様に大きな荷物を身体いっぱいにつけていた。そして同方向、同速に急いでいるにもかかわらず、眼差しは皆孤立していて、まるで何百もの亡霊が歩いているようだった。二度目は朝早くから福祉センターに並んだボランティア希望の長い列を横切ったときである。皆寡黙で、皆独りだった。そしてそれぞれの位置から奥のシャッターを見つめていた。私にはこの二度ともが真実の人間の姿に見えた。本当に自由に、心から人を想えば、あの日駆けつけた人達

のように、なりふり構わず、他人も気にならず、自由意志で突き進める様子は、本当に当然で自然であつたし、ボランティア希望者が列の長さも早朝も労働の無償も気にせず、ただ自分を一歩進めるために並ぶ姿もまた自然だったから。しかし両方とも、とても孤独だった。他のどんな一人も近づけない緊張があつた。やっぱり孤独であることが人間らしいということになってしまふ。ジャコメッティの「指さす人」の横にもう一人おくことは、やはり不可能なのだ。彼の言葉はこんな風に、いつも裏付けみたいなものが必ずあつて、彼自身の生き方が必ず込められていると確信してからは、彼を熟知することで彼の言葉は数学のように解けていった。そして今私は、彼に関するペーパーテストなら文句なしの全問正解者だ。また、この書はある意味で、震災を忘れるために始めたにもかかわらず、彼を探すと、きまつて震災が現れてきて、それはいつも「極端」というところで融合さえもしてしまうのだった。

震災の不幸の中では人の心がよく見えた。衝撃で皆裸になったんだと思つた。避難所の中庭で、皆で同じプラスチック容器のみそ汁を飲んだときのおいしさは忘れられない。昨日までの強弱の区切りも、差別偏見の類も皆無、無意味で、子が親を、昨日の弱者が昨日の強者を励ました。どんな無秩序も無秩序だとだけ一人感じていいようだった。自分も傷ついているのに他人の傷を思えた。ジャコメッティは描いては消す、作っては壊すの繰り返しだった。消し、そして壊さなければ現れてこないものを求め続けたのだ。偏見、常識を捨てて、眼に見えるものを見る通りに実現したかったのだ。「内部に向かってどこまでも消して何が残るか見よう。結局は何も残らないかもしれない。畜生！」彼は嘆きながらも、その先の自由を見つめることをやめなかった。そして一日の終わりにには決まつて、消す勇気もつとあつたらと落胆しながら。私達は何の勇氣も持たず、ほんの少しだけ、あの避難所の中庭で自由を見た。心の痛みはあつたにせよ、偏見も常識も介入しない懐かしい空間だった。しかしその少しの自由には到底、

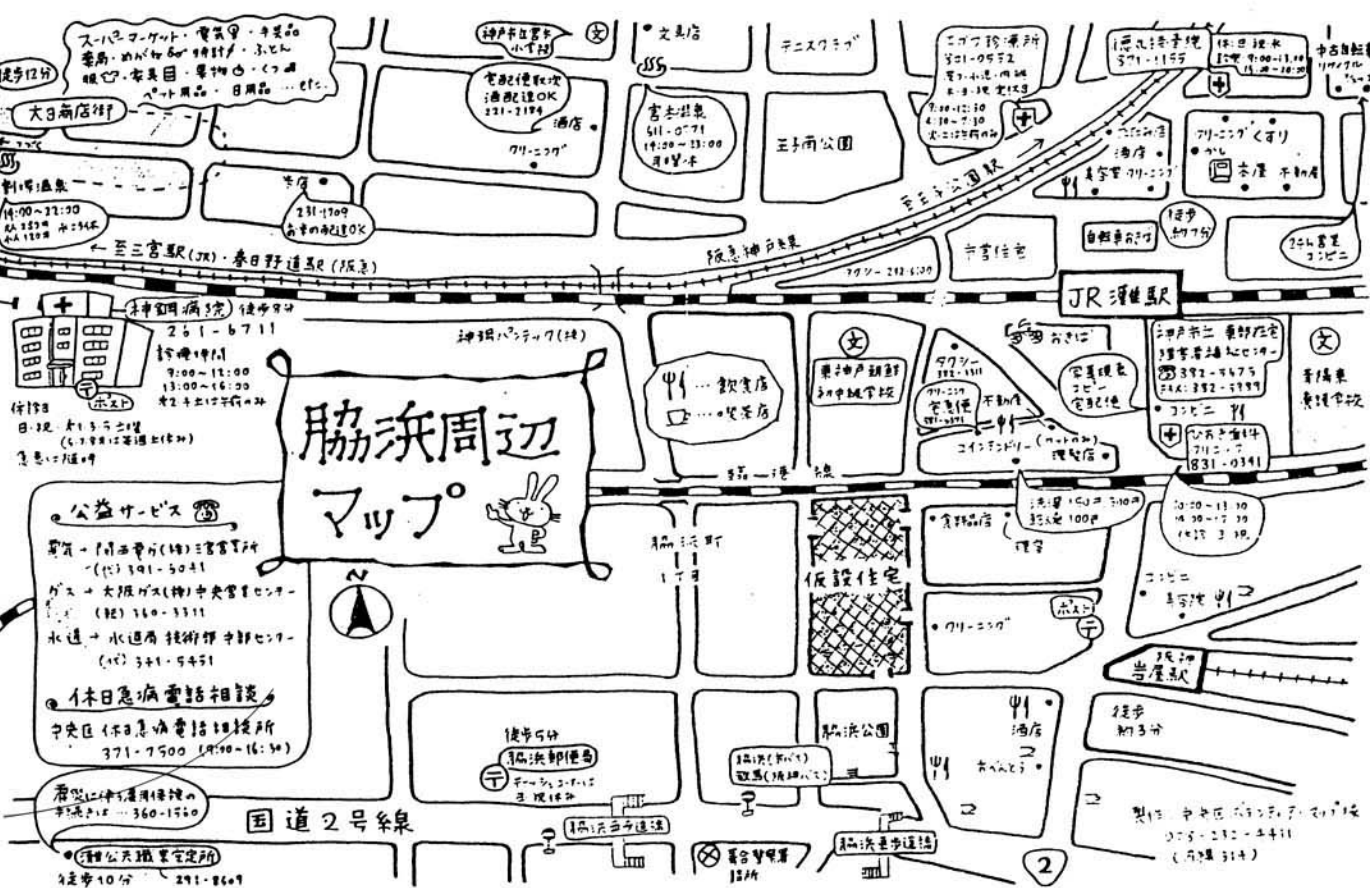
匹敵しない壮絶な震災という犠牲を勇気がわりにしていたのだけ
れど。ジャコメッティは最後まで貧しいアトリエで、不要なもの
を一切捨てた後の人間存在そのものを見つめ続けた。私にはジャ
コメッティの言う「不要なもの」が次々と見えてくる。初めそれ
は布の上の顔の輪郭や口だったりするけれど、次第にそれは私の
周りに多すぎて見えにくくなってしまう。ピカソよりエジプト彫
刻が好きだったジャコメッティが私は好きだ。彼が良いと言っ
たゲーテやダンテの演劇も観てみたいし、サルトルやセザンヌも
知りたい。彼がわくわくした中国の京劇も必ず観る。ジャコメッ
ティのまねを思いきりして少しでも不安なものが消せたらと思う。
ペーパーの次は実施だ。あったことのない祖父が、がんばれとジ
ヤコメッティをくれた。祖父とジャコメッティが、ふつとだぶる。
心配しないで、私は大丈夫。迷った時は、「もう一度写生からや
り直そう。」というジャコメッティの口癖を思い出すから。ただ
し、私の写生の場所は、寒くて貧しくて、限りなく不敵だった、
あの中庭だけだ。

「地図づくりボランティア」

三年 川瀬 礼実子

春休み、ボランティアに行っている友達に「れんちゃんに、やってほしい仕事があるんだけど…手伝ってくれる？」と頼まれました。最初は、自分のことも忙しいし、あまり乗り気ではありませんでした。でもその仕事の内容を聞いてみると、仮設住宅に入居する人のための地図作りで、その担当をしていた人が（その人は北海道から来ていたのですが）帰ってしまうことになり、後を継ぐ人を探している、友達は、私にピッタリの仕事だと思って私に頼んだとのことでした。地図作りということで私も興味があったし、自分の得意なことを生かすことが出来ればと思い、ボランティアセンターへ行きました。まず手順を教わりましたが、何も決められたことはなく、何でも自分からしなくてはならなかった。最初、最初は戸惑いました。地図を作るといわれたので、私は紙に書く仕事をすればよいと思っていたのですが大間違いでした。最初に仮設住宅の建った場所を住宅地図で調べ、その周辺の地図を縮小コピーしてつなぎ合わせました。そうして作った住宅地図を持って自転車で現地へ行きました。道はでこぼこだし、自転車はガタガタ、空気は悪いし大変でした。自転車を置いて、地図に入る範囲をすべて歩き回り、全てのお店の電話番号や営業時間などを尋ねて回りました。かなり被害のあった地域だったので閉めているお店も多く、一軒一軒訪ねて行かないと事情がわからない状態でした。ポストの位置もチェックしたり、仮設からここまで徒歩で何分かかるか調べたり、あらゆることを調べつくしました。そうして集めた資料から、やっと地図をかく作業に入りました。ですが、使う人のことを考え、見やすいように分かりやすく作るのにとっても苦労しました。何度下書きを繰り返し直しました。出来上がったときには嬉しくてずっと眺めてしまいました。この地図を利用してくれる人がいるのだと思うと嬉しかったです。自分のでき、生かすことができ、とてもやりが

いのある仕事だったので、今では引き受けてよかったなと思っています。時間があればずっと続けたかったです。



第三学年 短 歌

第三学年（四八期生）は、平成七年一月十七日信州に修学旅行中でした。

宿舎でテレビ等を通じて次々に入る情報を見ながら、遠く西宮の家族・友人の安否を想い、ある意味では、震災体験者以上に心を痛め辛い思いをしたのではないかと思います。

この短歌は、震災から九カ月たった十月二十九日、「いきいきハイスクール推進事業」の取組みの一つとして詠んだものです。

思い出がたくさんつまる講堂の 残るがうれしい高校の思い出

阿久根 元子

待ちぼうけ水も電話も待ちぼうけ 冷たい冬にふと思ひ出す

浅田 京子

信州で水はたくさんあったけど 家に帰ると水不足

池上 幸宏

地を踏んで初めてわかる変わり様 我が心には戦場浮かぶ

石黒 佑一

昨日より今日が大事な街づくり 明日はどうなる神戸の街は

市原 志津香

家入り自分の部屋の戸が見えぬ 片づけながら牛歩で進む

天野 美沙絵

震災で失くしたものはかえらない 前進しよう生きてる限り

因藤 礼子

開店前にずらーと並ぶ長い列 買うのは同じパンやおにぎり

小田 恵

建物の壁にのびるひびわれを 見たたび思う人の無力さ

笠谷 尚美

突然の大震災で奪われた 命のことを忘れまいとす

柏原 聖子

失って避難してみてもよくわかる 水の大事さ命の尊さ

荻谷 悠子

信州で知った悲しみ大きいぞ 心配なのは家族の無事

北谷 理絵

揺れ止まり復興進む家や町 心の揺れは今だ止まらず

郷上 友世

実際に味あわなかった震度七 夢の中では二度も体験

酒井 直子

大震災街はけっこうつぶれたが 人の心は一つになった

師玉 真由美

完璧に復興しても忘れるな 今日明日もあの日の続き

澁谷 華

バスの中不安がつる帰り道 家族に再会心落ち着く

高橋 利幸

テレビ見て心配になる西宮 朝起きればテレビにくぎづけ

竹谷 康代

旅行から帰ってみるとみんな無事やっぱり落ち着く家族のぬく

田中 涼子

知らぬ間にあのあの店なくなった あの空地には花は咲くのか

谷藤 徳一

大切だ大地震で思ったこと 近所づきあい人の優しさ

辻 陽子

震災で傷ついた人ががんばって 死んでしまった人の為にも

堤 治子

あの朝もいつものように出ていった それが最後のDear

天満 由佳

My House 震災地離れてみると別世界 受けたギャップが忘れられない

鳥井 涼子

全壊と聞いていたけどあの笑顔 頑張ってたねとカイロ手渡す

畑 敦子

よく通るいつもの道も崩れてく 人の心も崩れていくの

林ヶ谷 理沙

広がる火事流れるニュース変わった町 残されたのは人の心

東村 奈緒美

ゲレンデで雪をとかした涙たち 家族の無事を祈りながら

平松 友子

ついさつき初めて会った人なのに 優しい心にジーンと感動

増田 暁子

電話の声遠い距離を近づける 不安な気持ち涙に変わる

増谷 多栄子

テレビ付けあまりの惨状目に入り 家族の安否無事にと祈る

丸山 浩司

余震で怖がる姉妹三人 震えながら三人川の字で寝る

水島 彰子

無き水はいまさら思う大切さ 忘れずにいう水のありがたさ

光田 綾

今もなお生きつづけてる活断層 その恐ろしさは夜も眠れず

森川 優子

水がなく友人宅に入りびたり 人と付き合う大切さ知る

柳田 めぐみ

時がたち日に日に薄まる地震の記憶忘れちゃいけないあの悲惨

山澤 絵理子

さを 旅行先家族の無事を祈りつつ ダイヤル回す指が震える

吉田 紀子

仮設での授業が慣れて忘れゆく よくかよった昔の校舎

吉田 真

二組

復興で真価問われる関西人 陽気な街にしましうや

東 和孝

厳冬の睦月半ばの信濃路で 頭抱えて寝るに眠れず

新井 健一郎

震災で親を亡くした子供たち 心の復興進むといいな

新城 智子

震度七細長いものすぐ折れる あちらこちらで電信柱

飯田 悠介

人々が力を合わせて頑張れば きつと前よりいい街になる

池田 朋子

不安さのあふれる日々で気付くのは頼りすぎてる自分の居場所

伊東 陽子

旅行から帰ってきたら建物が どこも壊れて生活大変

井上 龍

目の前に傷跡見すえて立ちつくし 亡くした人にはせる思いは

浦辻 麻紀

見慣れたた街の風景一瞬で すっかり変わり知らない街に

枝川 元美

かのときに露と消えにし神の戸に 今ひとたびの息吹き求めん

江藤 仁

テレビ見て急いで電話かからない 家族への思いつのるばかり

大前 美穂

地震前広々使ったグラウンドを 今は使えぬもどかしさ

岡本 晃房

大地震あったその時修学旅行 家族気にしもスキー実習

景山 みどり

ガスなくて風呂屋もなくて汚くて お金もなくて行く所なし

亀田 聡

町並がだんだん元にもどつてく 地震の怖さも薄れてく

北田 純江

ある朝に見慣れた町が変わり果て 実感ないがとく参らなむ

北谷 和洋

ぐらぐらと揺れる神戸は火の海だ 早くみんなの笑顔が見たい

黒田 祐子

大地震あれから一年神戸にも 新たな年の日が昇る

小山 隆章

飼い主はどこにいるのと犬が言うところが家だと言ってやれば

真田 佳美

大変だ地震が起きた西宮 力を合わせて復興目指せ

實久 圭子

水が出たその時感じた嬉しさも 今となつては忘れてしまった

下川 修也

あの朝の地震と知ったその瞬間 頭に浮かぶ父母の顔

惣田 亜実

地震起き緊張してたあの気持ち 時がたったら忘れてきてる

十亀 直之

腕はれた何十回もの水汲みで 初めて知った水のありがたみ

寺尾 晶子

落ち着かず不安で曇ったバスの窓過ぎゆく光景ただ恐ろしくて

富田 波

帰り道バスは連れてく不安を乗せて 自宅へ向かう長い道のり

中山 雄一

生きている夢に向かつて頑張れる 生かしてくれてありがとう

成重 千里

皆怒鳴れカーッパカッパ屁のカッパ 地震なんか屁のカッパ

新谷 洋介

これからは戻すのでなく変えていこう 人の心と神戸の町を

西澤 郁子

一瞬で消えた神戸が今変わる みんなの手と手明るい笑顔

野上 美幸

人会いて涙ぼろり嬉しくて たくさん喋るが聞いてはくれず

橋本 和美

旅先で地震起きたと聞かされて 家は無事かと心かなし

林 功治

見慣れてた街が変わった瞬間に 胸によぎった家族の姿

廣瀬 麻奈美

一瞬で変わる人生なのだから 今を大事に生きてみるかな

松嶋 達也

朝起きてテレビに映る別世界 まさか夢だと頬をつねる

向裕 子

行きと帰りバスから見える西宮 全く違う町になっていた

柳生 江美子

無事だよと声を聞いても落ち着かず 家に帰ってやっと一息

山下 啓太

朝起きてはっと気付けば大地震 あら大変どころ大変だ

山本 貴彦

震災後人と人が助け合い そろそろ見える復興の兆し

山脇 洋人

苦しみを一つこえて強くなれ いつかきっと人を支える

横井 聡

三組

もしもまた地震起きたらそのときは 次は神様力借りるぜ

赤木 充彦

阪神を一気に襲った大地震 初めて気づく命の尊さ

赤瀬 友則

帰り道消えてしまった町の景色 どんどん積もるガレキと不安

荒谷 総利

電話かけコールの音がこだまする はやくはやくと心もとなし

安藤 守俊

惨事知りみな顔から笑い消え 心はせども行けぬ苦しさ

石井 正則

無感動無意識のうち日が過ぎて つのるいらだちわく後悔

市原 葵

復興に向けて働く人々に 心安らぐ春の訪れ

伊藤 麻衣子

家族への連絡つかない友達に 何もできない自分に戸惑う

今西 愛

深みそう空も町も人の心も 絶望が襲う一月の朝

岡野 晶子

やっと出た水もガスもやっと出た やっと来たのも春五月

加茂 淳之介

冬空に湯気がこぼれる人の吐息 寒さに耐えていざ立て直さん

北村 公彦

早朝のニュースに驚き疑った 穏やか神戸がつぶれたなんて

北門 郁子

旅先に震災情報飛び込んで ホテルの廊下は静まりかえる

木戸 慎介

旅行先予期せぬ事態に不安な思い 落ちつかせるのは母の一言

小西 智美

帰りつき見ては休まる親の顔 心細さはみな同じかな

柴 孝宏

留めおかん切に願ったあの思い どうか皆が無事でするように

新良貴 馨

地震おきてテレビをつけて見てみればまるで戦争あった後の様

外林 将典

震災後ふと頭に手をおいた 父の姿に明日を夢見る

孝岡 睦子

眠い朝声が聞こえる友達の 「兵庫に地震」直ぐとび起きた

瀧口 梓

一刻も早く無事だと伝えたい 家族の気持ち真夜中はいる

中川 理咲子

何もかも殺風景なこの街に 止む事のないサイレンの音

中村 佑介

一瞬に破壊し去ればいかがせむ 見る方もなきすみよしの街

西川 智人

震災はパンドラの箱の災厄か 最後の希望は人の心か

西瀧 将寛

寒空の下でひとときわ胸にしむ ボランティアの人の優しさ

野村 和甲

大震災人々の街を無に変える 個人の歴史をかえり見ないで

橋田 大佑

早かったスイスの犬は早かった 村山よりも現地に来るの

原 太雅

ガスだけが出ずに不満と思ったが 自分の勝手に深く反省

平尾 陽子

水波みに初めて入った浄水場 だけど今では立入禁止

広友 則子

人々の助け合いで勇気づく ずるさは人を傷つける

福井 千晶

瓦礫から聞こえてくるは悲しみの声いつか変われよ喜びの声に

宮地 亜衣

寒い朝水で重いバケツ持ち 今までの暮らしふと身にしむ

茂村 有実

世間ではオウムが鳴けば震災は 音もたたなくなりにけり

桃原 豊

予定より修学旅行早く終え 帰ってみれば浦島太郎

森本 未知子

困難な状況乗り越え前進を 進む復興輝く神戸

保田 達哉

震災の瓦礫をどけた空き地には ひっそりと咲く復興の花

柳原大志

親戚の家で過ごしたあの日から 友達に会えず寂しく思う

横山雅絵

無事告げる友達の声聞きたびに 受話器を抱いて一人喜ぶ

吉平理世

一瞬の目を疑ったあのニュース 長野の山で胸が騒いだ

和田慶子

四組

失った命の数と引きかえに 世界の人の心つながる

浅井佐知子

帰り道不安をおおる救助隊 一緒に向かうけむりの街

東井裕子

震災後何度も聞いたその言葉 あの目おまえは遊んでいたと

伊藤一樹

さわやかな朝かと思えば大間違い 慌てて寝たふりスリル満点

川畑祐樹

オオナマズ動くな動くな永遠に 二度と動くな悲劇を起こすな

近藤豪弘

瓦礫取り地域ぐるみで参加して 昼めし時の人のぬくもり

塩谷崇敏

今はもう復興せし我が町は 人の心は忘るべからず

竹下元

テレビ見て地震と知って大騒ぎ 慌てて電話ほっとした

田中早苗

朝起きてテレビの中で土砂崩れ 画面のすみになんと我が家が

田中秀俊

旅先で空吹き荒れる冬の風 吹いてくれるな西の空には

谷口大輔

二月頃犬を飼った二月終わり 大阪に行つて楽器を買った

戸田岳志

寒いけど地震にあった人たちの 心の中は暖かい

友安裕子

遺体を見尊き命の悲しさに 命ある身に復興を誓う

長田康隆

ホテルの部屋でテレビを見ても感覚が麻痺して他人事に思えて

中務紀子

あかつきに照らされ朝を知らされて 戸外は瓦礫と静かな廃虚

新田長久

我々の自然破壊の警告か 灰色の山が無情に消えた

波壁義典

崩れゆく建築物燃え上がる炎 人はただ跪くのみ

橋本雅之

寒い朝自然の強さまざまざと 見せつけられてなす術もなし

平山勇二

帰り道不安つのるバスの中 思い出すのは家族と友の顔

藤澤亜希

瓦礫から転がり出てきたぬいぐるみ持ち主中から未だ出てこず

藤原さやか

時がたち再びめぐるあの季節 忘れちゃいけない地震の傷跡

宮崎浩介

もう一年たつと思うと早いのか遠い日の事を思っちゃいけない

八上俊介

雪の中募金活動で得たものは ほかの何より愛とぬくもり

山下景子

想像とまったく違ったあの風景 今も心に残っていますか

山本博之

心から涙が出ませんどうしても いつからこんな風になったか

鈴木順靖

朝起きてテレビをつけると地震あり 地元のはずが遠き神戸

渡辺原

帰り道崩れた家のそば通り 不安つのる家族の安否

山脇広子

五組

震災で街が壊れた復興だ はやくみんなであはよつ

阿武盛夫

ニュース見て急いで電話してみたら 心安まる家族の声

阿部悠子

テレビ見て知らせを仕方なく 僕らのぬけがら修学旅行

石田慎

旅行先家族のことが気がかりで 列をつくった公衆電話

市妙歩

恐かった家族の声を聞くまでは 涙した家族の無事で心温もる

因谷みゆき

寒い日の凍えるような早朝に 大地を揺るがす大火災

梅本隆広

地震の朝いつものように目が覚める特別の日と知りもしないで

亀田有香

我が県西以前とは違^{まえ}う傷すがた いつになるのか元の姿に

河合宏将

紙一重一ミリ違いの大阪は いつもの人混み絶えず賑わう

魏柳青

帰った日玄関開けると不思議な声 地震で迎えた知る人たち

北本克成

懐かしく昔のことを想いだし 涙流して今日を想う

桜井豊史

震災で見るも無惨な県西で 仮設校舎の壁画作り

鴨原秀幸

いつになく不安に思う十七日 もう来なければと願うばかり

柴田麻美

予想外あつという間の出来事に 心も体も焼け野原

杉山浩道

一瞬で友を取られたこの悲痛 今になっても心癒やせず

瀬戸沙織

寒い朝指がかじかみがんばって 冷氣に負けず並んだ水汲み

竹中悠子

震災の傷跡残る心中は 希望の光傷口癒やす

田中敬二

地震後の苦しみ悲しみ乗り越えて明日の街をつくつていこう

中塚清人

ポリタンク一つ買うのに三時間 車渋滞普段十分

中村和代

震災がどんなハンディになろうとも 夢は必ず叶うと信じる

林隆之

一月のまだ震える大震災 廃虚のあとに蘇る光景

福田寿史

滑っている間はみんな楽しそう 不安を胸に隠しながら

三谷文夫

電車から見る民家の屋根の色は 青が目立つ宝塚線

南本育恵

十カ月あつという間に過ぎたけど 心の傷は少しも癒えず

宮上由紀子

家倒れ空き地が増えて見晴らしよしそこに見えるは昔の思いで

山下怜子

県西に集まつてきた仲間達 笑顔はないが心やすまる

山田 健太

旅先でテレビのニュース見るたびに 家族の安全祈つてやまぬ

山本 伸子

いつのまに過ぎていく時あの怖い あの大地震きつと忘れまい

横溝 貴保

六組

あれも不満これも不満と思いだす 震災時よりずっと良いのに

板屋 智子

震災の記憶もやがて薄れゆく 豊かさあふれる時代の中で

遠藤 宣子

むだ水をしないと誓う大地震 時が過ぎるとそれを忘れる

大内 陽子

正月が過ぎたばかりに訪れた 辛いばかりの大地震

大坂 友美絵

温かいお風呂や料理のありがたさ 震災後に初めて知った

大山 陽子

ひとゆれで今までありし風景は 変わり果てたが残った光

岡本 舞子

現文で習った「無常」というものが 死を経験してわかった気がする

鍛冶 美沙緒

大地震多くの命奪い去り 人のまごころ運んできたよ

金田 宏樹

震災後人の本性あらわれる 善人いれば悪人もいる

河井 稔

蒲団出てまぶたをこすりおもむろに つけたテレビは見知らぬ

神戸 魏 哲史

大地震友の命が奪われて 悲しさ胸に幸せ願う

城戸内 真弓

たくさんの人との触れ合い味わった 感動ものの募金活動

金野 宏美

電車から見える風景日々ごとに 変わってゆくよ心と共に

熊野 友紀

大地震起らなければ分からないいろんなことやいろんな気持ち

小谷 慶子

阪急が復旧するまでJR 運賃高いし混雑してるし

近藤 陽介

凍てついた人の心に差しこんだ 助け合いという一すじの花

篠原 江梨子

一月に突然起きた大地震 僕らはその時修学旅行

柴田 理弘

時間では心の空隙埋められぬ なくしたものの戻らぬ悲しさ

清水 順一

あの日までありふれていた我が街は 涙で満ちた悲しみの街

関 真一

旅行先何も知らずに見たテレビ 目には見えても遠すぎる距離

鷹尾 和哉

水道もガスも電気も大切に 節約節約これから

内等 真琴

不自由な生活つづく数ヶ月 我身にしみる人のやさしさ

西 俊美

うつろげな瞳のおくに限りなく 広がる空は希望の光

西垣 望

バスの中変わる風景見ていると 不安かくせぬみんなの顔色

根角 小弓

悪夢からだいぶ月日は経ったけど まだいやされぬ人々の心

橋本 直

網膜に焼き付けられた光景は 見渡す限りこの世の修羅場

畑 亮 輔

いくつかの悲しみ胸に人々は 夢や希望で心なぐさむ

原 田 明日美

夢に見ぬ思いがけない恐怖の手 ぬくもりくれるみんなの手

日 置 かおり

震災にあつて初めて知るものは 人の心と物のありがたさ

平 田 義 雄

震災で家や学校こわれても つながる心深まる友情

星 野 道 世

ボランティア受付任せられおぼちゃんの文句聞いても力になれず

堀 口 正 樹

震災で命の重み分かったが 今となつては忘れがちな

前 田 智 崇

寒い中よくがんばったボランティア みんなの心めっちゃあつ

三 上 佳 子

たか マスコミのヘリコプターがうるさくて助け求める声が聞こえず

溝 渕 三 佐 子

町中の家が倒れた大地震 スキーをしていた修学旅行

宮 本 桂 一 郎

旅行先家族のことが心配で どの電話も並んで待った

矢 上 美 由 紀

バスの中はるかかなたにある家の 家族を想つて眠れぬ夜

横 山 雄

真っ白な雪山の上ただ一人 家族の顔を想うばかり

吉 富 絵 理

トゥルルル二度目で鳴った電話のベル手に汗にぎる家の状況

和 田 忠 大

七 組

雪の中不安抱えて帰る道 家族の安否きづかいながら

青 石 章 裕

もどかしい雪に邪魔され涙する 今すぐ飛んで帰りたいのに

赤 羽 伴 子

たらちねの母親思い心配で 夜中に一人落ち着きなくす

足 立 勝 紀

母の顔いつも見ていた顔なのに 今日はずいぶん涙が流れる

石 田 愛 子

大地震あたり一面地獄絵図 人のぬくもり闇のもし火

伊 勢 宏 嗣

大地震人の命を奪ったが 肌身にしみる人のやさしさ

伊 藤 恵 美

あゝむなし神戸の街は灰と化し 絶望こえて心動かず

上 田 靖 人

水がない電気つかないガスこない 家は壊れた家族残った

梅 本 祐 介

大地震ぼくの町はヒビだらけ 復興作業はいつ終わるのかな

岡 田 務

戸を開ける今までなかった道が見え 通勤の人歩いている

岡 本 絢 子

春が来て冬が来たって忘れない 地震の大きさあの日の恐怖

岡 本 蘭 子

揺れ出してやっぱり怖い家の中 ネコも走って騒ぎ出す

岡 山 悦 子

報道に家族の無事を願いつつ 電話よつながれそう願う僕

沖 野 謙 一

広々と感じられたグラウンドに 今は埋め尽くす仮設校舎

片 尾 友 一

朝起きてテレビつければ大地震 どうなってるの僕の家

金井 暁

震災で学んだこと数多く 人の優しさ思いやり

黒田 美樹

朝起きてテレビつけたらあの映像 夢かと思えど夢にはあらず

桑田 喬史

大切なのは人と人の繋がり人間は一人きりでは生きていけない

小池 日登美

震災で水道ガスがつかなくて お風呂に入らず不便だった

近藤 幸恵

遠くから父の安否を気遣って 普段は見せぬ娘の心

桜木 法子

震災で友に会えない日が続く 早くみたいなみんなの笑顔

澤田 愛

近所中犬の鳴き声ひびきわたる 余震のたびにおこる光景

世古 智子

電話する聞き慣れた声聞けなくて 皆で部屋で泣いた日もある

田中 身 和

普段なら気にもかけない道路さえ 地割れの間にあの日を想う

富高 真里

震災後最近気になることがある 家の傾き気のせいだよ

野坂 大

連絡がつかぬ不安をだいたまま 寝つけぬ夜を友と過ごす

野田 真由美

闇の中一瞬にして消えた街 時が過ぎても忘れはしない

馬場 良子

ガスと電気当然のものの震災で 変る価値観そして生活

早川 敬治

次々と明らかになる情報に こみあげてくる不安の涙

本田 敦子

震災で尊いものをなくしても あらたに息吹く小さな命

松下 泰史

家に着き家族の顔を見たとき 不安が消えて笑顔になれた

松本 やよい

大地震夢に思わぬ大惨事 地震の悲劇夢かうつつか

三上 知宏

人は皆悲しみから目を背く だがこの悲しみは永遠に伝えん

三原 聡

家つぶれ財産なくてテント小屋 後に残るは家族の絆

宮崎 紘二

震災が奪った心の傷跡は 人の笑顔で取り戻そう

宮丸 賢子

余震きて初めてわかる恐ろしさ 命の重みも初めてわかる

木村 幸江

震災後苦しいときが過ぎ去れば 春の兆しが近づいてくる

本吉 佳貴

故郷より遠く離れた横浜で 友の苦勞を思う毎日

山口 隆一

四組の友に抱かるる笑顔の遺影 その声なき声を心にこそ聞け

衣川 伸秀

八組

隣から助けを求める声しても 助けられない自分の無力さ

北嶋 治樹

生きてこそ命あつてのものだねと 思えば深い家族の絆

大坪 伸江

君がため捨つる命は惜しまねど 心にかかる街の行く末

廣瀬 拓史

忘れかけ失いかけた物事を 戒めよとて神の怒り

青山 津也

家に着き母の涙に励まされ 一人がんばるみんなのために

有原 道子

日が過ぎて忘れかけてる人たちへ忘れてならないあの苦しみを

池田 勇

時が過ぎ忘れ去られた出来事が 思い出となり今ここにあり

池田 享弘

先生につながらないと言われても 電話の前には長い列

石川 佐世

震災で消えた街にもまた一つ 灯り始める神戸の夜景

壺崎 さゆり

A棟が壊れてしまいB棟へ メツチャ寒いでB棟一階

一町 拓児

夜が更けて家族よりあい眠る夜 不安と恐怖で涙こぼれる

岩本 真由美

地震後の救助の様子テレビで見 人の怒りと悲しみを知る

岩本 理恵子

旅路から帰ってみればガレキ山ガレキで見たのは人のぬくもり

上村 知宏

目の前に広がる更地の向こうには 幸せな生活あったんだろう

岡本 亜祐子

言葉では心配するだけしておいて あとはへりから見てるだけ

加藤 寛子

旅疲れ一晚過ごした避難所で 地震おきても一人寝ている

上平 正幸

バスの窓見える景色は変わり果て 壊れた家に驚くばかり

川尻 修平

ひび割れた地面の下にある命 何も知らずに花をつける木

北野 真澄

ぬくもりは震える闇に吸い込まれたただ残るのは手のあたたかさ

喜屋武 夢子

生かされて何をすべきかわからずに 過ぎてゆくのは時と景色

熊木 裕子

数日後この地に戻り見た景色 あまりの違いにことばもです

黒江 陽子

大切と思はぬものこそ大切と 全てをなくし初めて気付く

斉藤 郁恵

心細く我が家へ向かうバスが着き 視野に入った母の姿

阪上 美樹

寒い朝忘れられない突然の 心に受けたあの衝撃を

高木 由紀子

水がない電気もないしガスもない何もなければど頑張らなくちゃ

瀧口 慎二

震災のツメ跡残る県西に 復興願う志し多し

樽谷 卓

人々の不幸に追い討ちかけるよに 廃屋荒らす情け知らず

永井 美紀

時が過ぎ人の優しさ気がつけば 復興しつつ神戸の街並

仲盛 日和

冬の空はく息白く凍える体 人の優しさ心にしみる

西垣 有佳

冬空に寂しい街並続くのか 未だ先見えぬ復興への道

西本 愛美

君はどこ僕はここだよさあおいで 共に歩こう新たな街を

長谷川 雄彦

故人宛郵便きたが誤って 我が家に入り再び悲し

福原好恵

久々に港の会話笑う声 このひとときがなんだか嬉しい

室山優子

年初め突然起った出来事は この一年をどう変えたのか

柳澤靖彦

被災地で避難している我が家族 安否わかるものなお急ぎ足

山内智雄

街はなく君の姿もまた同じ 僕の思いは消ゆることなく

山本晋史

のびのびと広い所でやりたかった サッカーとかソフトボール

吉岡幸恵

今はただ知らぬ命を嘆き来し 失せにける人の夢ぞ悲しき

渡邊晋平

九組

震災後塾の帰りに見てみると センター街が廃墟のよう

岩野翼

街並の変わり果てたその姿 予想もつかぬ一瞬の出来事

河西美穂子

朝起きてテレビつければ大惨事まさかそんなとチャンネル回す

菅修士

影が揺れ多くの苦しみ背負う中 人の命を深く感じる

岸本康男

悲しみを乗り越え今は笑み戻る失くしたもののより得たもの多し

北川亘

十月経ち仮設校舎の立ち並ぶ 校庭に今年も枯れ葉の落ちる

国田麻里

不意の揺れ返事のない妹を 助けに行く母の強さ

窪田理沙

影長く朝日と共に悲しくも 忘れられぬ人との運命

古島幸治

寒い日の指先凍る水運び 壊れた家の見える街並

木場一郎

大地震大地をゆらしつぶしゆく 人の心も揺れに揺れたよ

小山聡章

バスの中ふと見た街並変わり果て 心はいつも復興心

斉藤あゆみ

地震起きなくしたのも多いけど つかんだものも結構ある

斎藤健次

つまらない打てば何でもホームラン仮設が並ぶグラウンドでは

山地あゆみ

旅行先不幸の知らせ聞かされて 身内無事かと不安がつる師

師子鹿研二

足早に風呂屋へ向かう男かな ふりさけ見れば天の橋立

新名尚史

震災後前と変わらずそびえ立つ くすの木通り強い意志かな

高島誠

木枯らしに消えゆく人の魂を 地面の奥であざけり笑う

田中剛

この季節からだに寒さがしみわたり 水汲みしたこと思い出す

田中雅子

学校が休みになっても嬉しくない いつもと違う震災後

田中ゆか

時止まり壊れた家のその陰に 人の心を通うかけ橋

田端マリコ

季節すぎ北風吹きし街角に 復興の火は強くともれり

中尾哲

避難所は寒くてつらい場所だけど 心温まる優しさ見つけたよ

中嶋 優子

寒い朝奪い去られしたくさんの もどられるものもどせぬもの

中本 勝三

朝起きてテレビつけたら大地震 テレビ消しても大地震

中山 徹也

ぬばたまの闇に埋もれし翁さえ 助けられずに諦む唄

楢本 悠二

大地震特大地震大地震 超大地震大大地震

橋本 淳

時過ぎて冬来たるらし雪の音は 入試と地震思い出されし

早川 覚

冬空に暗く沈んだ街並を ほのかに照らす小さな優しさ

林 美桜里

震災で思わぬことが身にしみる ありがたいんだ普通の日々が

原田 敏絵

何もかもわからないまま時は過ぎ ふと見渡せば復興の兆し

東本 亜紀

目をあけ見渡し眺めるこの学校 思い出す姿あふれくる涙

松原 順子

人は病み医師の治療で治るとも 治せぬものか心の病

三好 薫人

改めて気付きし人のたくましさ 地震如き何するものぞ

森久 晃行

寂しさに子供を想う親あれば 親を亡くして泣く子あり

森山 真介

復興を天から見てる五千の顔 助け合いこそ大きな力

山路 将司

妹の一家を支える水運び あまりの重さ天地逆さま

与謝野 英子

花開くここの庭にもあの庭も 倒れた家の柱のかげにも

吉田 眞理

十組

歌声を体育館で響かせて 冷たい心を元気づけた

井口 寛子

震災で街は笑顔を失った 失わないもの家族の笑顔

石原 亜衣

朝起きて目に飛び込んだ映像は 見たことのない自分の街

乾 麻里子

数日後遠方からの手紙きて 友の心のあたたかさみる

上田 由紀

がれき山ただひたすらに主待つ やつれし姿に心うたれる

江口 希世

復興で切り倒される桜の木 いつになったら春は来るのか

衛藤 智美

電車から見える長田は焼け野原 あの光景は一生忘れぬ

大迫 めぐみ

遠き地で家族の安否気遣いながらすぐに帰れぬのもどかしさ

奥野 英子

生きている自分が不思議に思われるけれど生きてるこれからよ

川瀬 礼実子

通学道いつも見慣れた風景が 崩れてしまいい色まで変わった

黒川 紗恵子

心にはあの日の記憶刻みつつ 未来の日々に胸はずませよ

小竹 敦子

夕さりて山に隠るる太陽に 照り映えるかな屋根の小波

小谷 昌子

助け合い知恵を出し合い立ち上がる 震災の街復興に向けて

小松原 章子

寒い夜周りを見れど闇の中 家へ帰れば家族の温もり

小美浪 はるか

寒い日に学校通学友人と それでも笑顔絶えぬことなし

土井 恵美

あの時の 時が止まった感覚の 中でこそ得たものがあるはず

中井 麗

毎日がどれだけ楽で便利かを とても身にしみて感じられた

中尾 祐子

子泣きじじい背中に乗せて線路道 苦しかった重たかった

成瀬 千春

遠出した愛しい娘連れ帰ろうと 母真夜中のヒッチハイク

西脇 恭子

切ないね生まれ育ったこの町の好きだった道消えてしまったね

長谷川 伊都

恐ろしい自然の力知らされた でも人々の強さも知った

平野 栄利

あの時の悪夢のような出来事が なぜこの街になぜあの人に

深田 玲功

寒空にのっそり浮かぶ地震雲 地上の苦しみ知らんとばかりに

藤田 知日子

ちりばめる星の夜空のその下で 火の海原と人の沈黙

藤原 美智子

ありふれた毎日こそが幸せと なくしたものが教えてくれる

真下 文

線路沿い重い荷物をひきずって えっちらおっちら西北到着

松井 淑恵

ありがたや蛇口から出る水を見て冷たき水のあたたかさを知る

松岡 万希

友に会い喜びあったその横は ガレキの前に供えられた花

松本 幸大

〇七八かけた電話が鳴ったから 私の声はきつと届いた

水口 理央

助け合い励ましあって生きていく みんなの街の復興目指して

水谷 留美

その瞬間音楽よりも何よりも 命あればと師は語りけり

山中 麻梨

寒い朝月出るうちに起きだして 始発の電車に乗りにつけるかな

山本 静香

死にたいと願う老婆に言葉なし 己に何ができるのだろう

吉本 美里

大丈夫分かっているても落ち着かない 早く帰ろう家族のもとへ

脇塚 歩

シンとした甲東園のホームには 時計のはりあの時をさす

芦田 裕加

帰宅後に潰れた我が家を前にしてただ呆然と立ちつくすのみ

池村 佳子

震災でがれきの中から思い出が また一つ出てさみしい思い

土肥 久奈

十数秒残していったのはがれきの山 涙と傷とそして助け合い

日俣 綾子

震災のつめあと残って思うこと 無力はかなさ悲痛の思い

松永 幸子

大震災心に大きな傷のこす あれからもう一年たつ

松本 由貴

『S M A Pには負けへんで!』

夕刊フジ編集局編 「大震災日誌」

一時は開催が危ぶまれた第六十七回選抜野球球大会の組み合わせが三月十五日、決まった。地元兵庫の育英は東京の創価、報徳学園は北海道の北海、神港学園は仙台育英とそれぞれ対戦相手が決定した。

§

「一度言われたことを二度繰り返すな!」

県立西宮高校の音楽教諭で吹奏楽顧問、吉永陽一さん(四八)のもとに主催者側から電話がかかった。「吹奏楽部に開会式の入場行進曲を演奏してもらえないか」。吉永さんは二つ返事で引き受けることにした。

同校は普通科、商業科のほかに音楽科を置く公立校。昨年は吹奏楽コンクールの関西大会で金賞を受賞。過去には全国大会で金賞をとった経験もあるハイクラスの吹奏楽部だ。

「部のメンバーは、音楽科よりむしろ普通科の生徒の方が多いいですよ」と同校の卒業生で副顧問を務める繁田千都子さん(二五)は話した。「二度とないチャンスだとみんな大喜びでした」と繁田さんは後輩の選抜出場を心から喜んでいいる。同校音楽科卒業生で教員になった第一号。しかも、母校が初任校になった繁田さんは「専門は音楽なんです、出場が決まり、益々仕事が増えました」とはりきっている。

もちろん、一番喜んでいいるのは六十人の部員達だ。「市民会館での定期演奏会が中止になり落ち込んでいたところなんです」。二年生で部長の山地あゆみさん(十七)は「家が全壊した仲間もいたので、(出場が決まって)とてもうれしかった」といまだに興奮覚めやらぬといった様子だった。

毎年春に開催してきた演奏会の会場は、市の災害対策本部が置かれている。「一部損壊まで入れると全員が被災者なんです」と繁田さんは震災の大きさを改めて語った。フルートと打楽器の部員二人の自宅が全壊したという。

§

三月上旬、同校で西宮周辺八校の吹奏楽部顧問教諭が、合同練習の日程などについて初会合をもった。「『主催者側から最初、西宮高校への参加が依頼されたのだから、(同校が)母体になつて話を進めてください』と参加した先生方が言われました」と兵庫県吹奏楽連盟の副理事長でもある吉永さんは、会合が円滑に進んだことを強調した。

「西宮周辺には十六校の高校がありますが、震災で交通が途絶えていて練習に來れない学校は参加できませんでした」と吉永さんは出場校決定までの経過を説明した。

「練習場所の講堂は壁が壊れて全壊しました」というハンディもあるが、本番まであとわずかの日数。合同練習も強行スケジュールが組まれた。

開会式まで合同練習は五、六回が限度。しかし吉永さんは「こういう時だからという理由でお茶を濁したくはないんです」ときっぱり言い切った。

§

「目が死んでる! 顔からまず作れ! 顔が死んでる人間にそのシャープの音はでないで!」

顧問会議翌日、吉永さんの檄が音楽教室に響いていた。

例年開会式を受け持っていた県警音楽隊に代わり、今年は同校メンバー五十九人に他校から十一人を補充した七十人の特別編成。入場行進に選ばれたS M A Pの『がんばりましょう』は被災した市民全員に送られるエールだ。

『絶望から再起させた甲子園球場開会式の演奏』

三年 池 邊 雅 美

(雑誌「FOR YOU」掲載)

誰もが予想しなかったあの忌まわしい阪神大震災から、はや十か月。自宅のマンションは全壊し、私は公民館で避難生活を送った一人でした。震災の影響で学校も一時避難所となり、正常な学校生活を送りにくい状態になりました。もちろんクラブ活動などもできず、私の所属していた吹奏楽部の練習所であった講堂も、使えない状態でした。誰を恨むこともできず、やりたいことすらできず、絶望していたときに、甲子園球場での春の選抜高校野球開会式の演奏の依頼を受け、又、みんなで練習ができるということと、少しでも復興の手伝いができるということに喜びました。練習が再開できるといっても、講堂は使えず毎日寒い外での練習が続きました。しかし、寒いのは誰もが同じであつたし、外で練習できるということだけでもありがたいことでした。そしてまた、練習中に地域の方々が、私たちの音を聴き、散歩がてらに校門の前まで、聴きに來ておられたということの後で聞かされ、驚きそして、心強く思いました。こんなときに音楽なんて、と言う人もいましたが、こんな時だからこそ心の支えとなるもの、音楽が必要だつたと思います。音楽、開会式を通じて、明日への生きる勇氣のようなものを被災地の方々に伝えたかつたのと同時に、全国の方々へ、私たちは一生懸命元気に生きているんだ、ということ テレビを通じて伝えられるといいなと思ひました。物やお金だけでは、賄いきれない精神的な何かを、音楽を奏でることによつて、賄えたのではないかと思ひます。

あの震災を体験し、犠牲になつた方々のことを思うと、あの日が憎んでも憎みきれないけれど、でも、震災がなければ感じ合うことのできなかつた人と人のつながり、人の優しさ、人のあたた

かさを感じ取ることができたように思ひます。

後ろを振り返るだけでなく、恨み憎しみだけでもなく、あの日から一生懸命生きてきた証が、今の被災地の状態であり、そして、今の私たちの姿ではないかと思ひます。

完全復興にはまだ遠いように思ひますが、でも、少しずつ、元の街、そして新しい街へ進んでいつてゐるように思ひます。

人の生き方、考え方、街の姿を一八〇度変えてしまつた地震、でもそんな地震で知つた人々のあたたかさ、そして地震の恐ろしさを一生忘れることのないように、次の世代に語り継いでいくことは、私たちの世代の役目ではないだらうかと思ひます。

『震災』と『いきいきハイスクール』

担当教諭 吉永陽一

平成七年度三学期は新学期早々、思いもよらぬ大震災に見舞われた。交通機関も途絶えてしまい、しばらくの間授業もできず休校となった。芸術棟全壊の影響で教室や備品は全く使用できない。しかし、一方で授業再開計画が進み、普通教室での芸術科の授業も再開したが、例年通りの指導計画が実施できず、教科として何をすべきかをまず検討することから始めた。そして、手始めに行なったのが芸術棟の被災状況を目で確かめることであった。

芸術科教員が複数でヘルメットをかぶり、一步建物の中に入つてまず目に飛び込んできたのは、壁や天井から崩れ落ちて床に散乱するコンクリートの破片であった。恐る恐る階段を上がると、人の通る振動であろうか、天井からこぼし大のコンクリートの破片が突然落ちてくるので危険きわまりない。階段と踊り場はどこも完全に離れていて、それらはかろうじてコンクリートの中に埋め込まれていた鉄筋でつながっているという状態であった。また、人が歩くたびに階段や廊下が揺れているようで、いつもの通り慣れた場所とは全く異なる無気味な感触を誰もが覚えた。周囲の壁には長くのびた亀裂が走り、踊り場では床が盛り上がり、タイルが割れている部分など、至るところで確認することが出来た。どの階にも共通しているのが、ロッカーが倒れ、棚の中ものが散乱して足の踏み場もない光景だ。そして、ロッカーに取り付けてあったガラス窓は割れて大変危険な状態であった。書道教室や美術教室の太い何本もの鉄筋の柱には、地震のすさまじさを物語るように横に大きく亀裂が走り、ねじれ、この建物が決定的な打撃を受けたことを物語るに十分であった。音楽教室はドアが建物の歪みでびくともしない。かろうじて開いたドアから中には入り様子をうかがうと、机や椅子の散乱、大きなスピーカーの転倒、アンサンブル室の床を突き破り傾いたランドピアノと、これが

直前まで生徒が学習していた同じ部屋とは思えないくらいの廃墟となっており、生徒がいなくて本当に良かったとつくづく思った。

以上の状況の中から次に行なったのが三学期の指導計画の立直しであった。前述したように、芸術教室として指定された教室はこれまでホームルーム教室として使用されてきた教室だ。部屋は確保されたが備品は全く使用不可能の中、何をきかけとして授業形態を成立させることが出来るのか。誰もが初めての体験の中、考えられたのが生徒の震災体験を何らかの形で調査・記録することであった。幸い教科の特色として、この異常体験を様々な形で表現し、記録することが可能と判断し、この未曾有の災害から受けた印象を調査することから始めることとした。そして、その結果から生徒が何を感じ、今後どうあるべきかを調査し、今後の芸術科指導の課題とすることにした。

平成六年度三学期は、このようなことをきかけとして、それぞれ音・美・書の各教師が試行錯誤を繰り返しながらようやく終えることが出来た。

平成七年度開始早々、今年度の『いきいきハイスクール推進事業』の実施計画が検討され始めたとき、私の心にはこの事業も、この震災を切り離して考えることは出来ないと感じていたもので、一つの案が決まろうとしていたとき、南雲先生に心の内を打ち明けたのがきっかけとなり、当初考えられていた計画から、震災で出来た瓦礫を使ったモニュメント制作が取り上げられることになった。この計画の特徴は、単に震災の記録としてのモニュメント制作に終わらず、それ自体が生徒の学校生活の活動の一部となりうる施設づくりであるということであった。そして、更に震災の記録としての創作詩を書道で展示、またその作曲の創作であった。

この計画案実施の鍵を握るのが校舎解体で出る瓦礫を確保する

時期であるが、不安は的中し、九月になっても解体の目途が立たない状態が続いた。そして、ついに計画変更を余儀なくされた。そこで検討されたのが、運動場全てに建ち並んだ仮設校舎の殺風景さに少しでも潤いを持たせる目的で、仮設校舎壁面壁画制作を、モニュメント制作に代えて実施することであった。

九月から十月の変更決定までには、理事会、推進委員会、職員会議と会議に計り、県へ計画変更書提出の運びとなったが、体育大会や音楽科の定期演奏会、及び全国音楽高等学校協議会全国大会開催準備とも並行し、最も慌ただしい日々を送ることになった。

十一月に入り、三十日の壁画完成に至るまでは、連日ホームルーム連絡を各担任に依頼し、絵コンテ制作者選出、壁画テーマ募集、作詞・作曲募集と、制作への準備を整えていった。この時期の壁画制作に関して最も重要な課題の一つは、下絵制作者の数である。この係は初め募集したときには十六名しか集まらず、九十枚の下絵を制作するのに、この人数では制作者一人にかかる負担が大きすぎ、全担任に事情を説明して依頼したところ、即座に倍を超える四十二名の生徒が制作にあたってくれることになった。

下絵を完成するまでの時期が一週間。この期間が次の大きな課題で、制作はほとんどが自宅で行なうので制作状況がつかめず、非常に不安な時を過ごすことになった。しかし、完成と予定した日に、全員が下絵を持って集まってきた時、初めてこの計画の成功を確信することが出来た。

下絵制作者の多くは絵を描くことが得意な生徒が集まっている中で、中にはクラスで誰も引受けてくれなかったり、籤があたつてしまい、絵を描くことを最も苦手とするにもかかわらず、やむなく係を引き受けてくれた生徒が、首をうなだれ、途方に暮れた表情で、最初の係集合時に座っていたのだった。しかし、その生徒が、連日会議室で遅くまで制作に努め、その生徒に応援が集ま

り、ついに自分に課せられた下絵が完成したときに見せた表情に、この生徒がこれまで絵に対して背負い続けてきた重荷から解き放たれるのを見ることが出来た。私は多くの下絵の力作が並ぶ中で、この生徒の作品を見ると、この生徒の苦痛を克服した明るい表情を思い浮かべ、その表情にどれだけ自分自身が励まされたかを思い出すことが出来る。

ベニヤ板の下地塗りに一・二年各クラスより二名の計四十名が下絵をベニヤ板に描き写す作業には、各クラス八名の計百六十名がそれぞれあたり、連日放課後から日が暮れるまで意欲的な制作準備にあたってくれた。そして、いよいよ十一月二十九日の制作当日、前日の雨で心配された天候も午前中は晴れ、制作の午後を迎える頃には曇ったり晴れたり、やや肌寒い天候になったものの、一・二学年全員による。午後の二時間を使った色塗りが行なわれた。仮設校舎の建ち並ぶ運動場の空き地、地震で破損してはいるものの使用可能な講堂の床全面やA棟教室を使い、汚れても差し支えない思い思いの服装の生徒が、歓声を上げながら制作にあたっている姿を見て、大きな充実感を覚えた。

当日の三年生は、当初から有志参加を計画していたが、最終的にこの計画への参加者が得られず、当日に向けて三年生独自で短歌制作を学年担任団で計画していただき、「いきいきハイスクール」に全生徒で参加していただいた。そして、その立派な作品集が完成した。

壁画制作の最後の工程は完成した壁画にニス塗りを施す作業で、これは三十日の放課後に行なわれた。ニス塗りから乾燥まで約一時間、乾燥した作品から順次いよいよ教室廊下壁面に取り付け作業が行なわれた。作業が進むにつれて、前日までの殺風景な仮設校舎とは思えない色とりどりの、生徒の心のもった作品が校舎壁面に展示されていた。

翌日の十二月一日は前日からの雪が残る寒い朝であったが、白く雪化粧した六甲山や甲山を背景とする壁画の並ぶ校舎に暖か味

を感じずにはおれなかった。登校してきた生徒も壁画の前に来ると歩調をしばし緩めて、それぞれの作品に目をやり、さまざまな思いを巡らせながら教室へと向かっていった。

十二月二十一日、冬季文化発表会も予定通り開催され、美術部が制作担当していた十作品が完成し、全部で九十作品が、そして壁画制作に合わせて書道選択者が制作を続けてきた木彫り作品も完成し、壁画の合間合間に展示された。そして、ついに仮設教室への壁画作品は完成することが出来た。

一・二年生による壁画制作、書道選択者による木彫り制作、そして三年生による短歌創作の後を受けて、いよいよ今年度の計画の最後の仕上げとして、生徒から募集し、選定した作詞による作曲を一月十八日披露することで、全ての計画が完了する。

作詞応募選定作品

(作品A)

一瞬にして 消え去った町が、
悲しくなった町が、少しずつ、
明るくなっていく。
人々のやさしい心が、また人の心にとけ込んで、
大きな力を生み出す。
そして、その力が町の明るさに火をともし、
強い力を作り出す。
さあ、歩み出そう、明日に向かって！

(作品B)

一 夕焼けがのびてゆく
昼と夜とが出会う場所

ドラマの場面みたいで
一人寂しくなる

歩こうよ 私と一緒に
歩こうよ 君の涙が止まるまで
歩こうよ

〈コーダ〉

夢を捨てないで
笑顔忘れないで
きつときつと輝き続けるから

流れる空をみて
肩を組み合って
歌おうよ
人が好きでした
そして今もいつまでも

二

赤い雲が溶けている
光と影の継ぎ目の場所
止まった時計動かすように
そつとふり返る

歩こうよ
歩こうよ たとえ小石につまづいても
歩こうよ

(作品C)

一 人として大切なものを失いました

人として大切なものを知りました
空き地の広がる街角で

あの時のことを思い出します

今の私たちの社会の中で

忘れてしまったものを

あの時は思い出しました

だから今

人々は手を取り合って立ち上がるのです

あの時のことを忘れないためにも

二

人として今生きることは何でしょうか

人として今出来ることを探します

復興進む街角で

あの時のことを思い出します

今もどりつつある生活の中で

まだ心の中にある

悲しい思い出から

あしたへ人は思いをよせます

だから今

人々は共に明日へ歩き出しています

あの時のことを忘れないためにも

(作品D)

主はほこりにまみれ涙さえ流さず

民は苦痛を感じる間さえ与えられず

けれど民は腰を上げ主の「冷」に屈せず

ACの叫び 復活のリズムを

多くの炎へのレクイエムとして

闇は光へ 破壊は「結」へ 無関心は絆へ

足音はもつと大きく近づいてくる

価値観の反転 それだけ「滅私奉公」

ボランティアとして誠心誠意 粉骨碎身 不撓不屈

不眠不休 この身に熱ある限り 誇りを捨て

夢を胸の底に押しやり 時が必要とする炎となつて

地を縫い ガレキを組み立てる炎となつて

この阪神を赤く照らし続ける炎となつて

(作品E)

たくさん命を奪った大震災で、

私たちはもらったものがある。

それは家でもなく、服でもなく、人の温もり。

冷たくなつた心は、その温もりで温まる。

いつかきつとよみがえる、大好きな神戸

現在この五つの選定された詩の中で、三作品に曲がつけられています。これらを披露することで、今後この活動が継続的に本校に定着すれば、今年実施した「いきいきハイスクール」事業の活動も評価されるであろう。

これらの計画を実施する中で改めて強く感じたのは、生徒の能力は創造へのきつかけを待っているということだ。そのきつかけさえ準備できれば、いかなる課題にも、生徒は私たちの想像を超えて対応する能力を有しているということを実証してみせたことだ。発芽を待つ「生徒」という種子が、「県西」という太陽と、さまざまな栄養を含んだ「職員」の水が、発芽に適度なタイミングを与えたことで、「壁画」・「木彫り」という花や、「作詞」・「作曲」という花を自らの力で咲かせてみせた。

壁画制作前日の一・二年生学年集会で、「地震は多くの建物を

破壊し、尊い命を奪ったが、明日みんなが取り組もうとしているのは破壊ではなく、新しい壁画を生み出そうとする行為だ、壁画が素晴らしいのではなく、それに取り組み、創造しようとする行為が尊いのだ」と話した言葉が、今重みを持って心地よく響き続けている。

次の「いきいきハイスクール推進事業」が、どのようなきつかけを生徒に用意してやることが出来るか、我々に課せられた課題と考える。

最後に、さまざまな栄養素で生徒の命のエネルギーにきつかけや弾みを与えてくださった先生方、そしてきめ細かくクラスへ情報を提供してくださり、アンケート集約に尽力くださった理事会の皆さん有難うございました。

心づな新聞

新聞記事の転載あり 省略

『演劇「MY BLUE HEAVEN」』

「こんな青空の下では誰だって幸せになれる」

演劇部顧問 福田成樹教諭

震災で生徒を失った私には、その悲しみとともにもう一つ、心に抱え込んだ問題があった。

前年末、ちょうど震災の一カ月ほど前に、担当した「いきいきハイスクール創生事業」で生徒によるミュージカルを上演したのだが、そこで私は「生」や「誕生」を取り扱った。全校生が鑑賞し、拍手を受けて、それはそれでよかったとその時は考えていた。一カ月後、あの地震が阪神を襲い、生徒の命が奪われた。言葉もなかった。

全校生徒を前にして、演劇という表現で一カ月前に私は生を語った。ところが今、圧倒的な死を目の前に何も言えなくなっていた。むなしかった。あのミュージカルは嘘でしたと詫びたい気持ちになった。調子に乗って無責任な表現活動をしてはならないものだった。

寒かったが空は毎日晴れていた。地震から一週間、初めて雨の降った日が、彼女の葬儀だった。それはまさに彼女の涙雨だと思えたが、遺影の彼女は元気にVサインを出し、懐かしい満面の笑顔で笑っていた。その写真が選ばれたのはもちろん遺された者たちの配慮だろうが、私はその笑顔にせめてもの救いを見たような気がした。

葬儀が終わり、戻ってきた青空を見上げながら考えた。結局私は生き残ったのだと。生き残った者は生きていかねばならない。死んだものは何も言えない。生きている者は話し続けなければ。そしてきつと、甘つちよい夢を語ってきたものは、それを続ければよいし、それを続けるしかないのだ。震災という現実直面した以上、死を語らないわけにはいかない。そして、死を前にし

て、私にはただ厳かになるというような表現はできなかった。軽率だと言われようと、生き残った者としてその批判は甘んじて受けようと思った。

そうしてできた脚本が「MY BLUE HEAVEN」こんな青空の下では誰だってしあわせになれる」だった。同じ家の中で、家族と別の場所にいたために一人生き残ってしまった主人公の青年が、その現実を半ば受け入れ、半ば信じられないまま、家族の幻と対話をしながらとにかく生活していくというストーリーである。そして、この幻の家族との生活の中に、震災後に聞いたありとあらゆる「うそのようなほんとの話」や「ほんとのようなその話」を盛り込み、できるかぎり「笑える芝居」に仕立てた。この本を、当時震災にもかかわらず、私のもとに演劇をしたいと集まってくれた四人の新三年生を中心としたチームで上演することにした。演劇部新入生歓迎公演と銘打ち、四月二十五日にひび割れた視聴覚教室で上演した。観客は六十人、評判は上々といえた。「MY BLUE HEAVEN」の公演は、これで終わるはずだった。

ところが、思わぬことになった。この本を読んで面白いと顧問が評価してくれた神戸の須磨東高校の演劇部がこれを文化祭で上演したところ、それが新聞で取り上げられた。これがきっかけとなって、十月二十八・二十九日に県の「ふれあいの祭典」明石公園の野外ステージで、須磨東高校と合同でこれを上演することになった。さらに高校演劇コンクールにもこの作品を出品することにした。

明石公園では、野外という悪条件にもかかわらずかなりの人に見てもらえた。その一週間後には高校演劇阪神地区コンクールで上演、優秀賞と創作脚本賞を受賞、県コンクールへ進んだ。県コンクールでも優秀賞と創作脚本賞を受賞、近畿コンクール出場はならなかったものの、評価を受けた。また、被災地の他の高校の演劇部からこの脚本を上演したいとの申し出をもも

らっている。

世間が震災を忘れかかっているからというわけではないが、この「MY BLUE HEAVEN」の上演は、今年限りのものだと思っている。来年以降の再演のあり得ない特殊な作品だが、そのキャストたちとともに、また一つ、これも忘れえない作品となった。

亡くなった彼女は、この「MY BLUE HEAVEN」をどう見るだろう。またつまらないもの書いてと、あの笑顔で許してくれるだろうか。

「MY BLUE HEAVEN

「こんな青空の下では誰だってしあわせになれる」

上演記録

四月二十五日 本校視聴覚教室

配役

有二：上村知宏

修三：八上俊介

依子：小谷昌子

ふみ：深田玲功

新聞屋：岩野翼

(六月十七／十八日 須磨東高校文化祭)

十月二十八／二十九日 明石公園

配役

有二：上村知宏

修三：八上俊介

依子：橋本雅子

(須磨東高校)

ふみ：木全真由佳

(同)

新聞屋：乾直樹

(同)

十一月四日 ビッコロシアター(阪神コンクール)

十一月九日

姫路文化センター(県コンクール)

配役

有二：上村知宏

修三：八上俊介

依子：三浦美弥子

ふみ：巽 理絵

新聞屋：益田祥子

土田：森田和美

十二月十九日 本校旧視聴覚教室(冬季文化発表会)

忘れないでおこう

1995年1月17日火曜日午前5時46分、僕は便所で用をたしながら雑誌を読んでいた。最初は弱い揺れだったが、徐々に増幅され、ある時点から嘘のように揺れだした。その短く長い時間で多くのことが頭の中をよぎった。特に、人に見られたくない姿で未曾有の災害に見舞われたということがどうしても納得いかなかった。惨めだなと思った。この瞬間の思いが震災以来ずっと心にひっかかっている。

10時ごろだったか、和泉と国本が学校にやってきてくれた。百合野町で大規模な崩落が発生し、4組の福田の家が飲まれたという。信じられなかったが、泥まみれの二人の服装は朝からの救出作業を物語っていた。谷垣先生と車で見に行くことにした。仁川にかかる水道管を越え、道なりに右に曲がると突然、膨大な量の土石が視界を遮った。道の跡切れるところで車を止めた。その場所でさえ人の身長よりもはるかに高く積もっていた。川の流れていたところには土石の岡ができていた。岡に登るとあたりが一望できた。左手のかなたには斜面をはぎ取られた崖が白々と見えた。右手では生存した人が家財をトラックに積んでいた。梶と9組の竹中がその作業を助けていた。土石が周囲を圧倒して、とても静かだった。この土石と戦って、何とか福田を助けようとした和泉、国本、梶、竹中らは立派だと思った。

翌日は越前先生と現場に行った。昨日とはすっかり様変わりしていた。30名ほどの機動隊がパワーショベルを使って発掘していた。多くの人が集まって、口々に噂をしながら作業を見ていた。ヘリコプターが低空を旋回し、新聞社やテレビ局も取材に来ていた。こんな衆人環視の中で、福田家の搜索は続けられた。パワーショベルが唸りを上げて瓦礫をすくい上げるごとに、秘密が一つずつはぎ取られていくようだった。空しいほど太い柱、福田の大切にしていたテニスラケット、泥だらけの蒲団、修学旅行の写真を貼ったアルバム、そんなものが全て一緒にくたになってすくい上げられた。何か出てくるたびに人々は好奇を露にして身を乗り出した。そこに福田のブ

ライバシーはなかった。人としての権利はなかった。それが死ぬということだと思った時、初めて福田の死を確信した。もう2度と福田と話をするのがないのだと思うと無性に悲しかった。

今も福田の笑顔が思い出される。自分が知っている限りの彼女の明るさ、素直さ、熱心さ、真面目さを覚えておこうと思う。それを思い出す時、彼女はかけがえない人として心の中に再び生きる。思い出すことは胸が締めつけられるように辛いことだが、辛ければ辛いだけ彼女は生き生きとよみがえる。そして僕が生き続ける限り僕と共に生きる。みんなも福田と繋がりがあった人は覚えておこう。みんなが生き続ける限り福田もみんなと共に生きる。たまたま生き残ったぼくらにはそんなことぐらいしかできないと思う。

秋の日

村野四郎

私にはけふ、

死んだ彼と一緒に歩いた
木犀やコスモスの^{かき} 塙の向ふに
青いそらのある道を

私は花をとって彼の^{ほたん}鈕の穴にさしてやろうとした
すると彼は^{かた}瘦せた胸骨を硬くして
あらぬ方を見てゐた

遠く流れてゐた雲
 はて
 涯なく深い青空
 とら
 彼の目を捉らへてゐたものは何であつたらう
 つるき
 道には枯れた蔓草が乱れてゐた
 に
 鶏があわてて遁げた
 彼の冷たい影の中で虫がいないてゐた

言はうとして言へなかつた
私のたくさんの言葉
きかうとしてきけなかつた
彼のたくさんの言葉
それから悲哀の中で騒いでゐた
よわよわしい^わ娘のこゑ ——

震災救援物資について

震災後、各地の個人および団体から、下のような救援物資を送っていただきました。これらの多くは、本校事務室を通じて、まず体育館に避難されていた方々に配布し、余ったものを学校の運営に使用しました。

物資を提供していただいた方々をはじめ、物資を届けていただいた皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

送 り 主	品 目	個 数
全国からの救援物資（県より送付）	雑貨・衣料	段ボール箱 110 箱
県保健環境部薬務課	医薬品	段ボール箱 3 箱
県立消防学校	ノート	580 冊
創価学会兵庫池田講堂	絵の具セット 書道セット	14 セット 9 セット
福井工業大学	衣料品	段ボール箱 5 箱
兵庫県学校厚生会 兵庫県高等学校教職員組合	自転車	3 台
兵庫高等学校教職員組合	デイパック	171 個（被災生徒分）
兵庫県高等学校教職員組合（全教）	図書券	36,000円（被災職員分）
2年修学旅行団	飲料水・パン	段ボール箱 30 箱余
北斗電子工業（株）	原動機付自転車	2 台（貸与）
各教科書出版社	教科書・辞書	800 冊余

阪神・淡路大震災被災状況

生徒に関するもの							
(1) 被災状況	生徒数	死亡者数	負傷者数 (入院数)	家族に死亡者の あった生徒数	家族に負傷者の あった生徒数	自宅が全・半壊 した生徒数	
	1 1 8 5	2	0	1	3	1 7 1	
(2) 避難状況	避難した生徒数		避難先	避難所		親戚・知人宅	
	7 2			5 8		1 4	
(3) 通学不可能 生徒数	5 6 7	理由の 内訳	避難のため		交通事情のため	その他	
			7 2		4 9 1	4	
(4) 転出生徒数	6	内訳	県内	県外			
			0	6			
(5) 学区外通学の生徒（平成8年1月1日現在）				5 3			
(6) 震災による授業料減免措置を受けている生徒 （平成8年1月1日現在）				1 9 8			
教職員に関するもの							
(1) 被災状況	職員数	死亡者数	負傷者数 (入院者数)	家族に死亡者の あった数	家族に負傷者の あった数	自宅が全・半壊 した数	自宅が全・半壊 した数
	7 1	0	0	1	0	0	2 9
(2) 避難状況	避難した数		避難先	避難所		親戚・知人宅	
	2 5			5		2 0	
学校に関するもの							
(1) 被災した 校舎	A棟（半壊）・C棟（全壊）・D棟（全壊）・E棟（全壊） 音楽棟（一部損壊）・体育館（一部損壊）・講堂（半壊） 旧図書館（半壊）						
(2) ライフライン 停止状況	水道の完全復旧		都市ガスの完全復旧		電気の完全復旧		
	2月3日 （但し、その後音楽棟等断水 平成8年1月5日現在まで）		3月7日		1月17日		

編集後記

平成七年一月十七日（火）午前五時四十六分突然、阪神・淡路大震災が起った。

理不尽な自然の猛威に、死者は六千三百人を超え、各地の建物その他に甚大な被害が引起された。県西でも、判明しているだけで在校生二名を含む十二名のゆかりの方が亡くなられ、校舎もその大半が破壊された。その後、運動場一面に仮設校舎が立ち並ぶ中で、県西の伝統は生き続けており、校舎の復興にも明るい展望が開けつつある。震災体験も表面上風化しつつあるかに見える。しかし、大震災の記憶は私たちの中に深く潜在しており、時として生々しくよみがえる。

大震災一周年を迎えようとする現在、この大震災で県西がどうなったか、県西に係わる人たちが何を感じ、いかに行動したかを記録にとどめ、県西の後世に伝える事を意図して本誌は編集された。寄せられた原稿は、生徒・教職員・PTAの方々、更に新聞・雑誌等に掲載された記事などを集めた。ただ、手作りの記録をという事で、不鮮明になる写真・資料の類は掲載を略した（これらは、旧図書館復旧後に設置される「県西資料室」に展示予定）。原稿は、直接ワープロに打ち込んだり、フロッピーをいただいで打ち出したものと様々であったが、どの原稿にも何度も目を通した。集まった原稿の数だけ胸が熱くなった。さりげなく語る生徒たちの原稿に、心の傷を秘めて将来を明るく展望する健気な心情を感じた。原稿をお寄せいただいた方々に謝意を表したい。

山道先生はじめ多くの先生方のご協力を得て編集を終えた今、この震災で亡くなられた方々への哀悼の念を改めて強くしている。また、全国から寄せられた心のこもった援助、力をお貸し下さったボランティアの方々に深く感謝すると共に、寝食を忘れて県西の非常時に奮闘された関係諸氏に心からの敬意を表したい。

最後に、被災地の私たちは、全国どこの地域の人たちより、当時家族・友人のことを真剣に思いやり、人のやさしさや心の温かさに触れた。県西生が被災の体験を乗り越えて、この心の財産を自他に及ぼしてくれることを強く願っている。

平成八年一月九日

教頭 田村 高